912.4
C44
2

始

Z2208

912.4
C44-2

詩註 壬松世話物十種選

文學博士 吉澤義則
文學士 宮田和一郎

大正
15. 2. 4
内交

例言

一、本書は巣林子の世話浄瑠璃のうち、なるべく趣向に變化のあるやうに、而も彼の代表作を網羅するやうにと力めた。

一、曲は外題年鑑等の説によつて、その登場年代に排列したのであるが、異説のあるものは、それ〴〵の解題の中に註しておいた。

一、本書は巣林子の作を一般に紹介する目的で編したのであるから、正本の假名書のところも漢字に改め、送假名も正し、句讀點を施し、鈎を加へ、段落を切り、特に會話と地の文とを區別するなど、只管讀み易いやうに意を用ひた。

一、頭註も、以上の趣旨から、煩瑣のやうであつても、なるべく詳細に加へ、かつ同一語句でも數箇所に點出しておいたのもある。

一、巻首の地圖は、元祿十二年版の大阪古繪圖を寫眞によつて縮寫したのを摸寫し、寶永四年版の地圖をも參照し

て、本文に現れて來る地名を記入したものである。

一、卷末の索引は主要なる語句を集めたもので、數個所に出て居るものでも、便宜上大方一箇所のみを揭示することにした。多少なりとも讀者の便益に供せられるならば幸慶である。

大正十五年一月

著者しるす

目次

一 長町女腹切……一
二 淀鯉出世瀧徳……五一
三 曾根崎心中……一〇五
四 重井筒（おふさ徳兵衛）……一五一
五 戀八卦柱暦（おさん茂兵衛）……二〇一
六 心中萬年草（女人堂高野山）……二六一
七 五十年忌歌念佛（おなつ清十郎）……三〇七
八 冥途の飛脚（忠兵衛梅川）井三度笠……三九九
九 心中天の網島（紙屋治兵衛紀伊國屋小春）……四一一
一〇 女殺油地獄……四六九

長町女腹切

上の巻

例[1]の童の言の葉に、いひ寄る品もよし[2]あしの、難波の京の物語、今の狂歌に取りなせし、京童の口ずさみ、落首[3]・洛外とり〴〵に、その一ふしを繪双紙[4]や、下立賣[5]を堀河へ、引廻したる角屋敷、刀屋石見何某とて、諸役[6]御免の受領職[7]、折紙[8]太刀の御用まで、御所は勿論屋敷[9]がた、

(1)京童。(2)善悪に葭蘆をかける。葭蘆は難波の名物故難波につゞける。難波の京とは、この作の舞臺が大阪と京とに跨つて居るから、難波と京との物語の意。(3)嘲弄や諷刺の意を含めた作者匿名の戯歌など。昔言論の自由でない時にかくして時事を諷刺して都の辻などに張る事が流行したこれを洛中にもぢつてその筆拍子で洛外とつゞけた。(4)通りの名の下立賣と續けて、繪双紙賣をきかせてある。繪双紙賣とは人倫訓蒙圖彙に「繪双紙賣。世上にあらゆるかはつたる沙汰、人の身の上の惡事、萬人のさしあひを顧みず、小歌に作り、淨瑠璃に節づけてつれ節にて讀み賣る也」とある。所謂讀賣である。(5)下立賣通は東西、堀河通は南北に通ずる。即ち堀河下立賣の東北隅にある屋敷。(6)江戸時代に、武家の御用を承る者は、總ての課役を免ぜられた。(7)國司に任ずるを受領といふから後には實際任官されなくても、只官名を許されただけでも受領職といふた。(8)奉書紙、鳥の子紙、檀紙等を横二つに折つたもので目錄や鑑定の文書である。折紙太刀は即ち鑑定書の附いた太刀である。(9)武家屋敷。

(1)放任して置くから、性のよい人間も到頭惡性に墮落するといふ意に、刀屋であるから刀の道具をいひかけてある。放目貫とは、刀の柄の目釘の上を卷かぬのをいふ。戰爭用の太刀は目釘の拔けるを防ぐ爲にその上を糸や革で卷くが、禮式用には卷かない。燒きつける、研ぎへらす、こじり、つばめ、鞘鳴笛刀の緣。(2)刀の鞘の末端の飾。(3)燕合。燕算用をする事、即ち合計する事。それに鐺目をかける。鐺目は鐺際に同じ。(4)佛門に入つて法體になつた男子。(5)過ぎたれば。(6)一條通堀川に架けてある。三善清行が蘇生して戻つた故事からこの橋の名となる。(京羽二重)(7)菊の形の鐺。御所の御紋は十六の菊であるからいふ。下の九月は菊の緣。(8)黑の緣で烏丸殿。(9)食出鐺。鞘及び柄の上にすこしはみ出した鐺。二口屋の口の緣。(10)革卷の柄。猪熊の緣。猪熊は町の名。(11)親鮫の皮の粒立つたのをいふ。醒が井のさめ(鮫)の緣。醒が井は町の名。(12)下請負をする細工人。皇都午睡に鎌倉時代の俗諺として「橋の下の菖蒲は折れ ず刈れども折られず云々」とある。(13)刀の拵へ方の一種。五月は菖蒲の緣。(14)辨慶は長刀の緣。

男たる身の魂の、「御刀脇差 拵 請取所」と大看板、見世は弟子にうち任せ、誰が下人やら頭やら、放目貫の性よしも、つい燒きつけて惡性に、身を研ぎへらす奉公や。跡のこじりの帳面の、つばめ合せと親方が、鞘鳴するぞ道理なり。あるじ石見は禪門の、白い頭に黑まなこ、仕事塲を見廻つて、

やあ、おれが足音聞いたやら、皆細工に精が出るよ。煙草ばかりが仕事ぢやないぞ。彼岸過ぎたりや、」めつきりと日が短かい。夜なべさしよにも此の油の高さでは、儲ける程皆戻る。や、戻る序に戻橋の鐺は戻つたか。一條の御所樣の菊鐺も九月の御用ぢや合點か。黑鞘が出來たらば、烏丸殿へ渡しておじや。二口屋のはみ出し、猪熊の革づか、「なせに遲い」と毎日二三度使が走る。醒が井の親粒も、まだ入れてやるまいな。三條小橋の下細工、菖蒲作りの拵へも、五月からの誂へ、何として出來ぬぞ。長刀直しを研いだらば、辨慶山の町へ持て往け。兩替町の銀作り、御池の町のふち頭、小川通りのせかいらぎ、今日あすに持たしてやれ。さつきにわせた下の町の酒屋のかみ、「入婿がはひる、引出物にしたいが、娘が望む道具ぢや」と、大切先のだんびら物、身ばかり買うていなれたは、後家鞘にきはまつた。

と、堅い親仁の輕口も、刀屋とてや古身なり。

重手代の忠二郎、旦那の前に帳面控へ、左介・喜八は算盤の、さゝん の九月節句前、算用の高見合はして、

主人 やあ、この半七の大のらめ、帳面も埒あけず、今朝からこゝへつら出しせぬ。どこへうせた。又祇園狂ひか宮川町か繩手か。朋輩どもが知つてをろ。詮索せい。

とわめかける。

手代 いや、半七は昨日から頭痛するとて鉢卷で、小座敷に寢て居まする。」

(1)銀は兩替の緣。(2)鐺頭即ち柄の先の部分又そこを被ふ金具。ふちは池の緣。(3)鞘や柄などの、刀身の背に當るところを掛革皮作にしたもの。硬い粒狀突起のある鮫類の皮をかいらぎといふ。それで包んだのをかいらぎ作りといふ。(4)來た。(5)おかみさん。(6)聖引出或は聖引出物、即ち婚姻の時男から聖への引出物。(7)だびらびろに同じ。身の幅の廣い刀劒。(8)間に合せに用ひる他の鞘。鞘を買ひに來た酒屋のかみが後家に違ひないの意をきかす。(9)洒落の事。輕は堅に對す。(10)その洒落も古臭い陳腐なものだ。古身は刀の緣。(11)頭立つ手代。手代は番頭と丁稚との間に使はれる者。(12)なまけ者。(13)祇園、宮川町、藝手、何れも遊所。

(1)胸の痞。
(2)茶屋は茶屋小屋即ち揚屋で、そこで飲む酒。
(3)酌する妓のない酒。
(4)親椀の次の大きさの椀。即ち汁椀の事。
(5)色模様などを染めた浴衣。染は秋の日の云々の條。
(6)松の落葉四大津追分踊「猫が三味ひく酒呑む奴、愛宕參りに袖を引かれた、伊達な若衆が鷹手に据ゑて、ふれやれ〳〵大とりげ。」
(7)井筒屋は四條通石懸町にある。石懸は石垣に同じ。積むの縁。
(8)女郎も身を賣る、刀屋も刀の身を賣る。その賣る品は變るが。
(9)中子は刀の柄に入る部分。中をかけてある。正銘、とぐ皆刀の縁。
(10)諸捻。柄糸の卷様の名。
(11)お花の親の意味をかける。
(12)案じて心がぼうつとする。ぼるはぼける事。
(13)薄く透いた綿朝子。ぼんやり綿ともいふ。
(14)古びて煤けた事。
(15)寄ると寄るべをかける。寄るべは縁、ゆかり。

主人　何ぢや、頭痛ぢや。若い身で又しては、頭痛のつかへの何のと[17]は、皆茶屋酒が過ぎるから。粥でも焚いてくらはしたか。

手あい、粥の事はさておき、おも湯も咽へ通らぬと云うて、やうやうど今朝酒の燗して飲んで見て、「どうでも色[3]のない酒は飲まれぬ」と、にがい顔しながら、中椀にたつた三杯。

と、いへばあるじも興さめて、叱る心も拍子抜け、笑ひ暮せし秋の日の、西山近き染浴衣、[6]愛宕參りに袖を引かれた、これも仇なる世の勤め。四條の水に名を流し、身の憂き數を積みあげし、[7]石懸町の井筒屋のお花、世ざかり戀ざかり、[8]身を賣る品は變れども、刀屋の半七と、深い中[9]ごと正銘の、互の誠ごぎ入れて、締めた心のもろひねり、[10]その柄糸のほつれそめ、わが親ざめのつれなさを、[12]問ひ談合も中絶えし、いとし男も親方がかり、首尾はどうぞと案じほれ、顔の見たさもやるせなく、駕籠昇屋うて草鞋がけ、浴衣を假の旅出立、[13]ぱんぱり綿もひねくろしく、背中に皺の寄るべなき、石見の見世へ、

(1)わけもない。とんでもない。ばか〳〵しい。
(2)伽羅は沈香木。
(3)謡「細工貧乏人賣」。
(4)正月、五月、九月。昔はこの月に神詣をした。
(5)つつきはる。
(6)山々あるの意をきかす。
(7)愛宕山。

花　頼みませう。はゝゝ、こりや旦那さんで御座りんすか。内方に居さんす半七殿に、一寸逢ひたう御座りんす。

親方ぎよつとし、

主　はて、いかう「りんす〳〵」といふ女子ぢや。そなたは半七が女房か。

花　はあ、つ[1]がもない。わたしは大阪者、半七が叔母で御座りんす。

主　あれまだ「りんす」ぢや。むう、大阪の叔母御とは、伽羅細工の[2]甚五郎の内儀か。

花　あゝ伽羅々々。何かのお禮に疾う參る筈なれども、主[3]は細工の人だから、貧な世帶のひまなしで、今日までの御無沙汰。大事の甥が出世の門、祝ひ月を心がけ、愛宕かけてののぼり舟、乗合の窮屈さ。ところ〳〵と寝よとすりや、後ろからせゝるやら、前からは毛の[5]生えた大きな足を突出すやら、歯切をするやら寝言やら、をかしい事のかず〳〵は、[6]山崎から連れもあり、あがつてお山[7]を一息に、嵯

(1)仕合な事には。
(2)蜑嬬の清涼寺。
(3)お供御の詭。雲飯の事。
(4)てれん。人をなやなす手ざは。
(5)草臥れた。苦しい。衝ない。
(6)しんきの轉。うるさい。面倒な。
(7)前の「御座りんす」の「りんす」に綸子を利かして「繻子の」とつゞけた。
(8)喞すと更科の姨。
(9)疑はしく怪しむべきもの。
(10)年季の年限を増す事。
(11)強請言。ゆすりごと。

蛾へおりたりや仕合せと、釋迦さまの開帳の、相伴やらおこゞやら、旅籠屋で支度して、すぐにこれへ。

と出次第の、口は手管に馴々しく、

皆さん御免、あゝしんどう。

と腰かけて、煙管取る手もぞんざいに、

皆さん半七の朋輩しゆか。しんくな仕事で御座りんす。

繻子の肌着に色さらしなの、叔母と名乗りて刀屋に、見するは胡散者なりし。

主それ喜八、「叔母が逢ひにのぼられた」と、半七に知らせてやれ。誰ぞ茶を進せぬか。幾たり居つても氣がつかぬ。

と言ふ内に半七は、そつと起きて障子の隙、のぞけば馴染のお花なり。

半南無三寶、さては内々苦勞にした、慾づらの繼父めが、年切增のもがりごと、急々にせがむと見えた。その工面に來たさうな。何にもせよ出すぎたこと。逢ふもあぶなし逢はぬもまた、仕舞ひのつか

(1)遊女ぐるひ。
(2)諺、下地はすきなり御意はよし」。
(3)愛宕神社から出す火除のお札を檜の枝に結びつけたもの。

ぬ我が身ぞ。

と、夜著引つかぶり、生きたる心地はなかりけり。親方は正直一ぺん、半七はなせ出ぬぞ。頭痛でまだ起きられぬか。他人ではなし、なう叔母御、寢ごころへいて逢はつしやれ。お山ぐるひで、酒やら何やら過ぎるゆゑ、煩ひ暮して物もくはぬ。ちと意見して下され。そりやそこへ案内せい。

と、下地はすきに据ゑる膳、うまい首尾とぞなりにける。

やゝ時過ぎてこれもまた、愛宕參りの花お札、風呂敷包下人に持たせ、女刀屋の石見さまとはこなたか。大阪甚五郎が女房、半七に逢ひたい。「叔母が來た」とおつしやれて下され。

といひ入れば、家内の上下喫驚して、

やあ、こりやどうぢや。かごにも叔母、內にも叔母、騙か狐にきはまつた。

と、不審がるやらこはがるやら、中にも亭主は一理窟、

主ざわ〳〵とかしましい。奥へ聞えりや詮議がならぬ。だまれ〳〵。

と小聲にて、

おもての叔母御、通らつしやれ。爰へ〳〵。

と云はるゝにぞ、綿帽子取つてしとやかに、

叔これはまあ〳〵結構なるお内方。(1)つひしか御出入申さねば、どなた様がござなたやら。これ、そこな前髪殿、(2)盆一枚貸さつしやれ。わたしが事なりや心まで。奥様へあげまする(3)樋の上の切荒布、花の都へこんなもの、お恥かしや。

と差出す。叔母の年ばい恰好を、見ればどこやらおもざしも、半七によく似たり。さては奥なる似せものめと、思へども念のため、

主これは〳〵いはれぬ事。女房どもは寺參り、戻つたら見せませう。

してつきもしほもなう半七に、何用あつてのぼられた。

と云へば叔母は打ち笑ひ、

いや、半七にさのみ用もなけれども、旦那様へすこしお頼み申すこと。連合甚五郎のぼらるる筈なれども、お屋敷方の御用は多し、飛脚でもいかゞとて、さてわたくしがのぼりし。

と、下人に持たせし風呂敷より、棒鞘の一腰を取出し、

叔これはこれ信國とや。さる大名の若殿へ、藏屋敷からあげらるる大切な指へ物、大阪にもあれこれと、職人衆も多けれど、京細工と申し男子がため、内方へ頼みます。注文はこの通り。さぞ方々の請取、お忙しいは存じながら、どうぞちか〳〵に頼みあげまする。この序に半七めが顏も見たさ。何やかやにのぼりました。

と差出せば、石見は脇差注文見合せ、

これはこちの商賣、心得た。

とずつと立つて、

これ叔母御、戀しがらるる男がざまを見せませう。暫くそこに。

と云ひ捨てて、思ひがけなき一間の障子、蹴破つてつつと入る。二人ははつと驚いて、うろたへまはる胸ぐら兩手につかんで、

(1)遂にに同じ。今まで一度も。
(2)丁稚をさしていふ。
(3)事なれば。心までは、ほんの志だけ。
(4)大阪道頓堀清津橋西詰の地。そこに昆布屋があつた
(5)年ばへの詞り。年頃。
(6)贈物に對しての御禮である。いはれぬ事は餘計な事、それには及ばぬ事。
(7)突然。だしぬけに。つきは付端。しほは機會の意。

(1)反のない鞘といふ說と白木の鞘といふ說と、朴の鞘といふ說といろいろある。
(2)山城の刀匠。信國には二十數人あつてその内のどれか分らぬ。
(3)大阪には諸大名の米屋がある。これを管理する爲に各自が屋敷を設けてある。それを藏屋敷といふ。
(4)あつらへ物に就ての條件を書いた書付け。
(5)引きうけ。
(6)脇差と注文とを。
(7)そこにお待ちなさい。

主やい、半七のいきすりめ。(1)ようも〳〵親方を踏みつけたな。あの女が來た時から、「ござりんす」が呑込まれぬ。りんすの正體現れた。お山やら惣嫁やら、(2)厚皮づらな、晝日中、「大阪の叔母で候」と、(3)目利の家へ似せ物を、ぬく〳〵と寢所へまで手引させ、主に一杯、おのれめは旨い所をくらうたな。親代々の刀屋を、太皷持にするのみか、座敷を揚屋にしくさつた。お禮申す。

と突倒し、(6)えさし箒おつ取つて、さん〴〵にぶち叩く。叔母はこの體聞くよりも はつと人目の恥かしさ。憎うもあれど甥御が難儀、思ひやられて、何とがな此の場の首尾をと氣を砕く。半七・花は身のとがを、いひくろめんと眞顏にて、

半 まうし〳〵旦那樣、お氣が違ひはしませぬか。私はともかくも、

叔母ぢや人を打擲あり。必ず後悔なさるるな。

と、いはせも果てず、

主やあ、(7)盜人たけ〴〵しく、其のざまになつてさへ、まだ惣嫁めを

(1)いきは罵る詞。いき畜生、いき盜人、などのいき。すりは掏摸。

(2)さうか、さうよめ、惣右衛門、惣州、十文色などともいふ。即ちよたか、淫賣婦である。

(3)刀劍や書畫などの眞僞を鑑定する人。

(4)あたたかい樣。うま〳〵と。

(5)一杯くはすをきかす。

(6)柄をさした箒。

(7)聽「盜人猛々し」。

いたはるか。主の身代空になし、天道をかすめをる。やい、天罰といふもので、殺して腹をいる。(2)さあうせぬか。

と杖振上げ、はた〳〵と打つ音に、叔母は悲しく走り寄り、

旦那樣、暫く。

と、取りつけば振放し、縋りつけば突倒し、とかうする間に思案して、

叔やあい、こりやお吉か。そなたはこゝへどうして來た。これまうし旦那樣。あれはわしが妹。

といへば、旦那は興さめ顏。半七はなほ合點せず。花はきよろ〳〵うろたへる、袖を控へて、(3)

叔こりや、いもと、やいお吉。これ姉ぢや。姉が顏を見忘れたか。

とねめつけ、目ませで知らすれば、やう〳〵と心づき、

花はあ、ほんに姉樣。姉樣々々ぢや。

(1)叔母の。

(2)癪。晴らす事。

(3)叔母が花の。

(1)そぶり。様子。
(2)未だ曾て。
(3)皆が私をお袋としかいはぬ實は姉妹であるのにと、その場をつくろふのである。はゝかはより外、しかの意。
(4)お花をさす。
(5)御存じのない旦那様が。
(6)道理に合はぬやうな。非難されさうな。

といふ鼻慄ふばかりなり。叔母は色目(1)を悟られじと、

五條の木賃宿へ行きはせで、姉さへつい(2)ど來ぬ内へ、騙らしい事いうて來た故にこんな事。旦那様の、お山ぢやと御覽じたも御尤。今日も愛宕で、私(3)をお袋とはか云ひませぬ。それも道理ぢや。(4)あの人は腹がはりの兄弟で十五違ひ。半七が爲には叔母なれど、年は甥より二つ下。叔母・甥のよしみとて、親しうするを知らぬ目で、女夫と見るに咎はなし。

と、非の(6)入りさうな事どもを、いひくろめたる情の程、二人はあつと嬉しさも、夢に夢見る如くぞや。あるじの石見まんまとくひ、むゝう、二人ながら叔母御か。よい年して不調法。あやまつた、許してもらを。叔母御怪我はなかつたか。

と、背中さすればあちら向く。

主おゝ、若い人の道理々々。そちらな叔母様頼みます。機嫌取つて下され。これ半七、いひわけして呉れ。

(1)慳貪當麥切の事。慳貪をきかす。
(2)腹立ちまぎれに。
(3)ひどい目にあはせた。

と、もぢ〳〵と勝手へ出で、

皆の奴等、うつかりと、なせ茶漬でもして出さぬ。腹の立つた揚句ぢやに、けんどん(1)を取りにやれ。まあ盃を出して置け。むつかしからう、おれは出見世へいてゐるぞ。はれやれ腹の立つ勢ひぐちに、叔母をも知らいで見(3)しらした。

と、足早にこそ出でにけれ。

あと見送つて半七は、叔母の前に手をつかへ、

何にもわざと申しませぬ。面目ないと有難いと、胸は二つに裂けます。

と、悔み歎けば、お花も涙にしみ〴〵と、

わたしは四條石懸町、井筒屋といふ茶屋に、花と申す勤めの者。半七様とは末々まで、面倒見あふ契約に、ちといき詰つた憂きふしの談合に、」逢はいで叶はぬ事あつて、横着なこの有様。叔母様なら、大事な甥をそそのかすとのお憎しみ、そこも許して下さんせ。いと

しいが只因果ぞ。

と、共にかこちて泣きければ、叔母も同じ涙にくれ、

さう見た〳〵。連合は、大阪に伽羅屋といへば、町によい衆・屋敷方、

人に知られて、世の有爲無常、この叔母とても知つて居る。色事は

若い役、此の上にどのやうな生きる死ぬるの塲になりても、厄體も

ない氣を持つまいぞ。世間多い心中も、銀と不孝に名を流し、戀で

死ぬるは一人もない。流れの身には取分けて、悲しい事むごい事、

そこを死なぬが心中ぞや。眞實男かはゆくば、五度逢ふものを三度

あひ、二度を一度になす時は、親方も機嫌よく、戀に身をうつ事も

ない。二親もない半七、叔母一人甥一人、もとは知行も取つた筋、

職人の弟子と朽ち果つれど、かはいゝとも不便とも思ふ者は此の叔

母一人、末かけて頼みます。今日叔母がのばらずば、二人の命はあ

るまいもの。ありがたや忝なや。愛宕まゐりの一しるし、佛神のお

(1)身分のよい人々。お金持。

(2)義理人情の意。佛說では諸種の因緣が和合してなる諸現象を有爲といひ、それが展轉變滅窮りがないから有爲無常といふ。

(3)たわいない。役にも立たぬ。埒もない。

(4)身を滅す。

(5)武士の家柄。

と、意見も親は泣寄りの、二人が肝にこたへつつ、泣くより外の事ぞ

なき。叔母は重ねて、

やれ半七、涙ついでに今一度、泣かねばならぬこの脇差、見知つて

ゐるか。

と差出せば、半七棒鞘の柄引抜き、中子を見れば信國、裏目釘の穴ぎ

はに、風といふ字の一字銘。横手を打つて、

これはさて、我が家の重代ぞや。親の祕藏が年を經て、めぐり來る

も不思議なり。再び武士に立返る瑞相なり、嬉しや。

と、推し頂く脇差を、叔母引つ取つてからりと投げ、

なう、情なのさぶらひや。武士になれと　見せはせぬ。此の脇差ゆ

ゑ、家筋のかう落ちぶれた因緣話、小耳にも聞きつらむ。お花とや

らもつながる人、悲しい咄の一通りを聞いてたも。もと我々は伊勢

の龜山者。先祖は猪瀨文平とて、あの子が爲には祖父樣。お持筒の

鐵砲大將、百五十石取つた人。同じ家中に高木宮內とて、八百石取

(1)諺「親は泣寄り他人は食ひ寄り」。

(2)思ひ當つた時又は驚いた時などに手を打つ事。

(3)子供の時の耳。

(4)江戸時代、將軍の鐵砲を預り、又戰爭の時には與力や同心を率ゐて、將軍の旗本を警衞する者。

る旗頭、互に無二の中なりしが、上方の(1)ごりうりが、此の脇差を賣りに來て、諸朋輩の附きあひに、祖父樣も望みにて、買ひ求めたい心ざし。彼の高木も望をかけ、(2)代物問へば三百貫の折紙。心安さの當座の座興、こはいひながら高木が粗忽、「文平お身の身代では、高い物ぢやがお買やるか」と、ふつゝと云ひしも互の不運。にが笑ひにて一座は濟み、その取沙汰の國一杯。(3)「いはれぬ猪瀬が齒も立たぬ刃物ずきして、高知行の高木殿と」と頭音を合せてある。齒も立たぬは、我が力に及ばぬ事を、堅い物に齒の立たぬ事にたとへる。高知行の高木殿と張合うて、人中で恥辱受け、あれでも武士か」と言ひはやす。此の脇差を買はいでは、一分立たぬ祖父樣の、武具・馬具・衣裳・夜の物まで代なして、三百貫の折紙代一倍増し、二百十兩に買求め、すぐに中子に一字銘、高木に勝つと(4)賣代なす。即ち賣つて錢にする。(5)諺「高木は風に折らる」「高木は風に憎まる」、「高木は風に憎まる」。の心にて、風といふ字をほり記し、明くれば九月十五日、登城の道に待受け、「高木やらぬ」と聲をかけ、尋常に討ちおほせ、屋敷へ歸つて祖父樣は、娘・子供に暇乞、「命にかへしこの信國、必ず人手に渡すな」と、お腹へぐつと押立てて、右の脇まで一筋に、唯一言(6)立派に。

(1)參覲交代で江戸詰をする事。
(2)刃物と持主との相性。
(3)刀身の燒きに、水の流れの如き象あるもの。
(4)長さ。
(5)鯨尺。曲尺の一尺二寸を八段とした物差。刀劍を測るに用ひ、又それによつて吉凶善惡を定める事がある

の義によつて、身上を果たされたり。そなたの父樣は、叔母が爲には、兄樣、そ(1)の憂き苦勞、悲しい暮しが病となり、いよ〳〵つらきその中にも、遺言にて、「此の脇差、乞食するまで離すな」と、藥も飲まず、祖父樣の第三年同じ月に病死ぞや。悲しいともつらいとも、情なや、お袋も又歎き死。あとに殘るは叔母とそなた。まだ九つの頑是なし。叔母が心を推量あれ。三年に三人まで、同じ月に死ぬる事、不思議と思ふ氣がついて、刀物の(2)相性見る人に、目利して貰ひしに、「祖父樣・父樣同じ火性、刀は水の流れ燒、以ての外の不吉の脇指、寸は一尺四寸五分、(3)けん尺は災難、これをそのまゝ持つならば、三代までは祟る」とある。占に驚いて、捨賣に賣り放し、まはり廻つて十三年目、お屋敷方よりこの脇差拵へ仰せつけられて、孫子のそなたの目にかゝると、はや親方の打擲の難儀に逢ふも此の不思議。武士美しと思やんな。一言の咎めより、親・祖父の命を絶ち、子孫まで落ち

(1)因縁。報い。
(2)境遇。
(3)感嘆詞に用ひてある。
(4)免れない。關係の深い。
(5)店を閉ぢる頃。夕暮時。
(6)大阪で毎年六月晦日に各神社で行はれる大祓。
(7)お家様に同じ。奥様の意。
(8)逢うたのも因縁であらう。

ぶれしは、前世の業(1)とは思へども、愚痴な心に淺ましい。この脇差がないならばと、科ない及物に恨が殘り、折つても捨てたい氣なれども、今では大名のお腰の物、家のかたきの此の脇指、主人のやうに撫でさする、その時々の身(2)すぎほど、悲しいものはなきぞとよ。(3)子にも甥にもたゞ一人、奉公大事に勤めてたも。いとしの身や。と掻口説き、膝にもたれて泣きければ、半七も伏し沈み、お花も退(の)ぬ身の上と、語るも聞くも主の内、うなづきあひつゝやきの、忍び涙ぞ哀なる。

叔やあ、うか〳〵咄して、あれ見世(5)さし時。叔母はすぐに伏見まで、夜中でも船はある。來年のお彼岸(6)には必ずくだりや。此の脇指の拵へ、注文の通り、隨分急いで下してたも旦那殿(7)へ、内方様へ、よいやうに頼むぞや。お花女郎にも緣(8)でがな、又やがてや。

花叔いや、私も東、道までお供致しましよ。

(1)陸じ〳〵。
(2)お花に何かたべさせて歸らせなさい。
(3)綿粉。水で捏ねた糠の粉を蒸して餅のやうにしたもの。
(4)茶うけ。甥の子のこ〳〵は例の口垢子。
(5)察しがよい。粋だ。
(6)高瀬川は二條の南から舊京極河原を通じ、竹田で二分して、一は桂川に一は鴨川に入る。そこへ底の平たく淺い所謂高瀬舟を浮べて、大阪までの舟樽の便を計つた。
(7)三味線の一種の彈法で、文句は大抵皆す。て、て、てんと三段に句切つて結末をつけるからいふと。
(8)石懸であるから名は堅いが、遊女町であるから人は和ぐ。
(9)濁に身を投ずる音ぼん。先斗町は鴨川の西岸で、三條から四條の間にある遊女町。
(10)刀屋の意をきかせて下に刀屋と口調の上から續ける。雜なしは難しと同じ。
(11)牛七の代へ名。

叔あゝ、折角來て素戻りか。これ半七、叔母は粹ぢや。あとでしつぽりと咄しやいの。

半いや〳〵別に話す事もござりませぬ。

叔そんなら祝うて、口濡らしていなしや。

花いや、最早お茶もたべました。

叔はて、茶ばかりで濟むものか。しんこのやうなものなりと、茶の子甥の子、のこ〳〵ふるまや、半七。

と、二人引寄せ寢所の、障子の中に押入れて、叔母は氣とほり堀河通り、二條通の高瀬舟、すぐに大阪へ三重下りける。

中之巻

名は堅く人は和ぐ石懸町。前には戀の底深き、淵に憂き身を先斗町。都の四季の月花を、こゝにとゞめて通路や。馴染〳〵の色遊びの、中にお花は忘れても、忘れがたなや刀屋の、半と深きつま戀に、懐く

やつち(1)の継三味線、心くらべの連引に、思ひの色を忍び駒、忍ぶに餘る涙かな。浮氣烏とそやされて、月夜も闇もこの里へ、光滿寺といふ坊主客、お花に馴れし鶯の、ほけきやうとも念佛とも、知らぬが佛の斗帳ぞと、井筒が暖簾、撞木杖にてひらりとあげ、

坊太郎、内にか。四五日お目にふらさがらぬ。

太ゑゝ珍しい、どつち風が吹いたぞい。

坊いや〳〵どつち風でもない。今夜はしよざいの無常風。沙汰はないこと、葬禮の戻り。一寸寄りたし心はせく。どうせうかう燒香場を、候べく候にやつて捨て、引導も何いうたやら、不便や、今日の亡者も碌な所へ往くまい。これもお花へ心中。

太これお花、どうぞいの。お寺ならば大黒、こゝではわつさり恵比須顔して見せさしやし。さあ笑やいの。

とせり立つれば、

坊あゝ太郎おだまりおだまり。あれは我等にあまえるの。腹立つところがなほうまし。嚊衆二階へ連れておじや、今宵は妓衆の惣揚げ、見事なことか。古手の肴取りおいて、蒲燒一種で飲みあかす。

鰻四五本裂かせにやりや。南無阿彌陀佛。

と騒ぎ立ち、皆々二階へのぼりける。

既にかたぶく宵月の、夜もはや四つ。半七は銀の才覺ならずものと、茶屋にはせかれ、親方に見限られつゝ筒井筒、心の水もかへほして、流れあるきにとぼ〳〵と、格子のかげに身を潜め、お花がよすがを待居たる。こゝに誰とはしらがまじり、きんか頭に無用の提燈、門口にてふつと消し、

はあ、太郎左衛門様、お宿にか。花めが父西陣の九兵衛でござる。

と、辰巳あがりにいひければ、亭主夫婦、

(1)八つ乳房のある猫の皮で張つた繼三味線。繼三味線は棹が幾つにも折れるやうに出來たもの。(2)おだてられる。(3)來うにいひかけて、高慢ときかす。(4)鶯の啼聲に法華經をかける。(5)諺「知らぬが佛」。(6)佛壇の上に垂れる帳暖簾と見たてていふ。(7)井筒屋。(8)頭の丁字形をなした杖。(9)井筒屋太郎左衛門。(10)あなたの來られたのはどうした風の吹きまはしかと亭主のお世辭。(11)どつちともつかぬ所在なしの無常風が吹いたからやつて來た。所在がないに無常風をかける。どつち風といつたから無常風と應じた。無常風は無常の人の命を奪ひ去る事。こゝは葬禮の歸りであるからいふ。(12)内證だが。(13)爲うをかける。(14)出鱈目にいゝ加減にやりつ放しにする事。(15)僧侶が棺前に立つて、死者を引導する經を誦する事。(16)義理立て。(17)ゆで玉子。(18)揚屋の妻。こゝは井筒屋の主婦。亭主は太郎左衛門。(19)梵妻。表向には出ず、厨にのみ居るからの名。(20)爽かに。陽氣に。

(1)せき立てる。催促する。

(2)花車をさしていふ。(3)夜寢の義か。遊女の事。山衆といふに同じ。(4)見事な事だらう。

(5)四つ半に半七をかける。四つ半は午後十一時。(6)ならずとならずものとかける。(7)賺られる。(8)見限られつつのつゞと音を重ねて心の水もかへほすと縁語を起す。(9)氣力がなくなつて。(10)知らずと白髪。(11)金柑頭、毛が抜けて金柑のやうに光る頭。

(12)言行が暴く鋭い樣。ゐたけだか。

(1)小むすめ。女郎屋や茶屋で使ふ少女。
(2)抱へ主。こゝは太郎左衛門自分の事。
(3)諺「酢の蒟蒻の」。「四の五の」の訛であらう
(4)世話になる。
(5)未練氣なく、綺麗さつぱり。殘らず。
(6)金一兩に銀六十目換のところ、この頃銀の値が下落して、八十目乃至九十目を以て換算したからいふ。
(7)丸取り。あたたまるは金が懷に入る事。
(8)お花と父親と。
(9)入れ智慧。さしがね。
(10)不運になつた事。貧困に陷つた事
(11)打ちつぶす。みしやぐはひしやぐ即ちひさぐに同じ。
(12)放蕩者、道樂者。
(13)馴染みあふ事を罵つていふ。

やあ親仁來てか。こちへ〳〵。
と茶釜の前。太郎左衛門顏しかめ、
此の頃だん〳〵いふ通り、そなたが娘お花が事、そも〳〵小(1)めろの時分から、手形の表(おもて)丸七年、親方(2)に損をかけず、追つつけ年季(ねん)もあくぞや。なれども勤めの習ひ、小間物屋の、煙草屋の、紙屋で候、呉服屋で候の、酢(3)の蒟蒻のと、借錢が今の金で七八兩。その上親仁も長者ではなし、あの子にかゝる(4)身でないか。がら(5)り二十兩、ま一年切りまし、居なりに居れば借錢もまづその分(ぶん)。賣り(6)買ひ高い此の節、二貫目ぢかい二十兩、そなたが手取(7)にあたゝまれば、兩(8)だめと思ひ世話燒けども、かの柄卷屋(つかまきや)の半七といふ虫がさいて、何のかのと入れ(9)性根、お花が一切呑込まぬ。これからは勝手次第。半七といふ職人の弟子、こゝらあたりの拂ひさへ埒あかず、東(10)ふさがりになつた者、打(11)ちみしやいでも、粒三文ないは知つてゐる。あのやうなごく(12)どうと腐(13)りあうたお花が行末、流浪は知れた事。小さいからの

(1)諺「壁に馬を乘りかける」。性急な事や無理をする事。唐劉禹錫文「其難如頓策駑進壁面」。突然お花の年季を切增す事にたとへていふ。
(2)前以て。豫め。
(3)お花の不心得を憎んでいふ。
(4)將來は乞食となるべき者。
(5)つかうど聲。慳貪な聲。尖り聲。ごつ〳〵した荒々しい聲。

馴染なれば、よい事聞くやうにはござらぬ。どうぞ意見でも召されぬか。壁(1)に馬乘りかけては、あくべき埒もあかぬもの。前(2)びろに手形しようために、呼びにやつた。
と語りける。門口には半七、聞けば悲しさ無念さの、格子の柱嚙みひしぎ、齒をくひしばり泣きゐたる。親仁は横手ちやうど打つて、
さて〳〵にが(3)〳〵しい。親方殿にお世話をかけ、不孝者と申さうか。その刀屋め知つて居る。ならず者の大將、菰(4)かぶりの下地(したぢ)。いや、花めはどれに居る。こゝへ來い、用がある。引きずりにいて、お客の前で恥かかさうか。
と、昔作りのつこど(5)聲。お花は人目の恥かしく、
あい、あの盃、藤さん・さよさん預かつて下んせ。
と、言ひすておりる箱梯子。
花やあ、父(とつ)さんか。夜更けて何しにござんした。
と、そばへ寄るを突倒し、

父やい不孝者。親方殿お話で、一から十まで聞き屆けた。半七めと
いふ騙(かたり)めと夫婦にしては、年寄つた此の親が、鼻の下(1)が干(ひ)あがる。
二十兩といふ金が、天から降るか地から湧くか。かたりめが挨拶(2)、
はらりしやんと切つて了ひ、年切(ねん)りまして奉公するか。いやとい
へ、分別ありさあ〳〵どうぢや。
と腕まくり、つかみ附くべき顏色(がんしよく)なり。お花ははつと胸塞がり、暫し
涙にくれけるが、
なう父(とつ)さん、朋輩衆(3)は內證、客さんたちの手前もあり。さもしい事
をいはんする。勤する身の親たちは、どの口聞いても、「かはいや(4)、
親ゆゑ苦勞をする。定めの年(ねん)も近づく、屆いた男を見定め、末の片
づき心がけ、身を安樂にして見せい」と、いはぬ親はござらぬ。
節季(5)〳〵にせびらかし、足らいで又年を切り增し、男にまで添はせ
まいとは、あんまりむごうござんする。ほんの親より繼父(まゝてゝ)は、なほ
大事とたしなみ、隨分孝行盡せごも、こなさん、わしに微塵も憐み

(1)食ふに困る。生活が出來ない。鼻の下は口の事。
(2)絲。
(3)朋輩衆の間ならば內々であるからよいが。
(4)かはいさうに。
(5)物前ごとに金を請求する。せびらからすはせびるに同じ。ねだる事。

はござんせぬ。殺しなりとどうなりと、分別次第にさあんせ。半七
樣と挨拶切り、勤はせぬ。
とばかりにて、人目も恥ぢず大聲あげ、身をもだえてぞ泣きゐたる。
傍若無人の繼父(まゝてゝ)、えせ笑(1)ひ、
ようぬかすな。盜人(2)の晝寢も當がある。おのれが母に何の見込はな
けれごも、おのれを賣つてくはう爲女夫(ためおつと)になつた。今の詞は誰が教
へた。半七のすりめに習うたか。べり〳〵しやべる頰げた、蹴放い
て了はん。
と、武者ぶりつくを、井筒屋夫婦、
年(ねん)の間はこちの者。疵つけさせぬ。
ともぎ放す。
花思ふ男に添はれぬからは、殺しや〳〵。
父おゝ殺しかねうか。
と、ぶちあひねぢあひ大喧嘩。破れかぶれと半七、裾引つからげ、井

(1)せゝら笑ひをする。嘲り笑ふ。作り笑ひをする。
(2)諺。

筒屋の庭へつか〳〵つか、

(1)柄巻屋の半七。

と聲をかけ、九兵衛を取つて突きのけ、眞中にどつかと坐り、

これ親仁、そなたはお花が繼父、酢(2)につけ粉につけ憎いのもことわり。此の半七を、すりの、かたりの、がんごう(3)のとは、いつかたりした盜みした。半七が目には、そなたを人賣と見た、もがり(5)と見た。よしそれはともかくも、お花はおれが女房。すべ(6)い奉公仕舞うては、繼父殿でござらうが、もがり殿でござらうが、主のある女房、分別して物をいへ。

と、せきくる顏(7)の靑疊、叩き散して詰めかくる。

九むゝう、刀屋の半七とはそなたか。どれ顏見よう。はれよい男の。江戸元結に縮緬(8)髮、あたまつきは兩替町(9)、內證は曾我殿、見せかけ力(10)みおいてくれ。此の年まで排毒散一服飮まぬこの親仁、ゆす(11)りはたべぬ。あゝ慮外ながら、親も許さぬ女房とは、粟田口へいきたいか。この娘女房に持てば、小判がいるが合點か。小豆粒ほどな細金(1)さへないざまで、なんぢや、お花を女房ぢや。いきがたりとはその事。いつそ手(3)をよう巾着か屋尻(4)切れ。

とぞわめきける。半七ぐつとせきあげ、

むゝう、ようこそ言うた。小豆粒は持たねども、小判といふもの持つて居る。來年の給分二十兩渡すからは、お花は身が女房。

と、紙入より金二十兩取出し、

さあ、金でした小判といふもの、近づきになつて置け。

と、まつかうに投げつくる。

九やい半七、あの娘はまだ五十年が百年が、顏に色氣のある中は、奉公さしてくはねばならぬ。千兩道具の娘を、二十兩の目くさり金で、女房に持たうや。ぺか(5)こ、まあなるまい。どこで盜んでうせたやら、のちの詮索やかましい。おのれに呉れる。

と投げつくる。

(1)つかの音から。

(2)何につけ彼につけの意の諺。酢につけ醬油につけ」とも「酢につけ味噌に漬け一ともいふ。

(3)强盜の字の唐音。

(4)誘拐の事。

(5)ゆすり。

(6)すべき奉公。

(7)顏を青くして、青疊を叩いて。

(8)毛筋を透かさぬやうに結うた結髮で、安永頃に流行した。

(9)半七の頭つきを見ると、兩替町の人のやうに金持風に見えるが、實は貧乏で曾我兄弟のやうである。

(10)腐毒藥の事。

(11)前に半七がもがりというたのに對していふ。

(12)京都三條通白河橋の東。刑場があつた。

(1)はした錢。

(2)騙りといふ事をあしざまにいふ。いきは、いきずり、いき畜生、いき盜人などいふいき。力を入れて罵るに用ひる接頭語。

(3)手段。方法。

(4)家や土藏などの後ろ。

(5)めかかうに同じ。目赤うの轉。

(1)詰め開きする事。談判。
(2)心得たにかける。
(3)無にかける。
(4)奈良の産。主に細緒。
(5)足に對して半。

半いや、金貰はふ好みがない。おのれに呉れる。
と投げ返し、投げつけ打ちつけつかみあひ、お花はわつと泣出す。太
郎左衛門つつ立ち、
これ半七、お花ほこちの奉公人。親仁とのせりふなら、どこぞ外で
したがよい。門には大勢人だかり、客の邪魔して貰ふまい。それ男
ども追ひいだせ。
(2)心得太兵衛・長兵衛・五介、ばら〳〵と立ちかゝり、無理無體に引出
す。お花はわけも正體も、(3)涙ながらに取りつくを、
人々どこへ〳〵。
と押し分くる。親仁を中の關守の、雪駄片足に(4)奈良草履、足には足ら
ぬ(5)半七が、髻をつかんで引き立てしは、日もあてられぬ次第なり。
太さあ親仁もまづ歸つて、諸事談合は明日のこと。
九はつあ、それもさう。然らば明日參りませう。申すまでも及ばぬ
が、花めを敷居よりそとへ手放して下さるな。やい、そこな不孝

(1)氣力のありたけを出す。
(2)藥罐あたま。茶を飲むにいひかける。
(3)諺「藪から棒」。
(4)無愛想の人相のわるい顏。
(5)盃をやるをさす、受けるを抑へるといふ。
(6)外の山衆。
(7)女郎屋の主人の居間又は帳場。
(8)有馬とありとの掛詞。
(9)當時の小唄。

者、おのれ明日來て何とする、待つて居れ。ゑゝ、息(1)せい張つて咽
がかわく。
と、ごぶり〳〵と煮えばなの、茶(2)びん頭を振立てゝ、河原を西へと歸
りける。
かゝる哀の最中、二階の梯子ぐわた〳〵〳〵、藪(3)から坊主の佛頂顏、
坊お花、そこに何して居る。さつきの(5)抑への盃は、いつの世に戻る
こと。總體今夜はそなたが顏、浮き〳〵せいで酒が飲めぬ。氣をか
へて、西石懸の關東屋で騷がう。太郎、山衆貸してたも。
太はあ、殘りの子供は、西石懸が天竺へも御同道。お花一人は我等
が內、手放しては內證に氣遣(5)ありまの、
坊言ふな〳〵。皆までいふな、湯(9)のだんこか。湯治するなら遣ひ錢、
見事な事か。
と金三兩、衣の下より取出せば、
太これこそほんの呑け有馬の湯のだんこ、やれ湯のだんこ湯のだん

(1)大黒頭巾とも丸頭巾ともいふ。炮烙の形をして居るから名づける。
(2)醫者の緣で藥師といふ。
(3)藥師如來は左手に瑠璃の壺を持つ壺屋は人家に附屬した物置のやうなもの。
(4)慌てふためいて人をもてなす事を「槌で庭はく」又「横槌で庭はく」といふ。それに白人即ち藝のない遊女をいひかける。
(5)足の緣。
(6)いはんもんぢやにいひかける。紋紗は模樣を織出した紗。
(7)ひやかしあるく時の姿。うかれ騷ぐ時のなり。
(8)のらくら坊主。
(9)遊び仲間。
(10)同じ寺に住む僧。
(11)戀に鯉をかけて、下に摑みどりと受ける。
(12)つかみどり深緣と音を重ねる。
(13)延寶の頃、京都の人都一中が創めた淨瑠璃。
(14)廣がるの緣。
(15)（延寶八―享保十九）京都宮川町に生る。元祖長十郎。寶永正德期のやつし役の名優。大阪に下つた。

こ。今は有馬の湯のだんこ、しよんがゑ。西石懸へ。

と騷ぎける。

同じ所も西側は、祇園・丸山前に受け、芝居の櫓暗き夜も、行きかふ人の提燈は、月もおろかと照り渡り、見おろす〳〵、おろす駕籠からぬつと出た。[1]炮烙頭巾の醫者殿は、[2]藥師如來の引合せ、[3]つぼ屋の客と脈を取る。

妓それ〳〵〳〵、花車も亭主も[4]槌で庭掃く人呼びに、走る足もとお[5]かるぢやないか。お玉ぢやないか。お玉やあい。

坊はて、これから呼んで屆くものか。わけもない事いはん。

妓[6]紋紗の衣著て、[7]ぞめき姿の[8]のら坊主。後ろ姿見たやうな。

坊おゝそれよ、あれは愚僧が[9]五人組、萬年寺の[10]同宿、忍び[11]戀路のつかみどり。

[12]深綠屋の小丁稚が、[13]一中節の川風に、聲も廣がる[14]扇屋の、仲居のまんが供して通る。あれは[15]澤村長十郎。あつたら男を、やがて大阪へ下り

(1)下り舟の緣。袖崎氏。元祿頃の大阪の女方の役者。
(2)頭音を重ねる。道外方金子吉左衞門。以上三人とも大方同時代の人。
(3)「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」。
(4)鼻と放さぬとにかける。花色は縹色即ち薄い藍色。
(5)熊坂頭巾ともいふ。目に當る所だけを殘して、他は全く包まれるやうに拵へた鐵付きの丸頭巾。
(6)富くじの一種。豫め各卦に金額の高低を記し、各自當つた金額を醵出して、飲食物を調へて均一に分配する。その中金を出さずに均等の恩惠を蒙る人を阿彌陀といふ。

舟。[1]歌流・[2]金子も[3]難波津へ、咲くやこの花その花の、噂も戀の種ぞかし。苦のない女郎の仇口を、聞くにもまさる涙の露。お花は一切氣も浮かず、四條の河原幾萬人、ぞめきの中にかの人が、もしやと目をも[4]花色の、[5]長範頭巾しよんぼりと、番屋の蔭に佇みしは、たしかにさうぢや。あゝ一寸逢ひたい、云ひたい事も山衆の手前、客の手前も量りかね、床柱に打ちもたれ、念佛申して紛らかす。料理人の傳介、盃を下に置き、

やあ、花樣の念佛で、思ひ出した事がある。三味線・小唄も古めかし。町方に流行る[6]阿彌陀の光といふ事して、御一座の妓樣がた、どれにても阿彌陀如來に當つた者が、豆腐と酒と買ひに行く役人。色里にないづな騷ぎ。妓樣がたいかに。

といへば、

おゝこれは珍しい。早う〳〵。

と紙押廣げ、蜘蛛の巢後光延紙引き裂いて錢の高。

(1)ひねりぶみ。紙に事を記して、無心に引抜いて占ふ籤。
(2)そつとあける事。
(3)いざよひで休むから仕合というたのである。
(4)濱納屋の惣嫁は代價十文。しが様はさゞ波の縁。
(5)仲居の名。
(6)慫嗾を含めた強辭。
(7)剃にかける。しまに縞をかける。

傳(1)もみ籤は恵方果報、後に無理いふまいぞ。さあ、今が大事の所。
と、鼠鳴きしてしめあけに、(2)
さよ様ごうぢや。
十六文。
お仕合せ〳〵。(1)
藤さまは。
三十六文。
小めろの林は。(りん)
十文。
それは濱波さゞ波や、しが様たつた二文か。お杉はなんぼ。(5)
悲しやおれは三百ぢや。ゑゝ儘よ。前垂質に置かうまで。(6)
傳おゝ、言やるまでない。錢がなくば布子を、(7)はぎさん・島さん、
これも如來ははづれた。さあこれからは花様、きり〳〵もみ籤あけさんせ。

(1)罪障の深い人間。
(2)代人。
(3)非常に。
(4)まゝよ。
(5)髢にかける。
(6)飯杓子の頭を縦に半切にした形のもの。擂鉢の内側などについたものをかき落すに用ひる。
(7)劍術の語。兩手で刀の柄を持ち、箭道に斜に構へる事。
(8)似せにかける。

花あゝせわしい、何ぞいの。わしがやうな(1)因果人が、なんの阿彌陀になるものか。これ見さんせ。
と押開けば、
傳そりやこそ言はぬか。さあ花様が阿彌陀ぢや。(2)名代は叶ひませぬ。
妓樣に豆腐買はして、(3)居ながら田樂たべませう。きつう座敷が洒落て來た。さあ面白い。
と笑ふにぞ、お花は何がなかこつけに、出たいは心一杯。なほも色目をさゝられじと、
あゝ迷惑、そんな事に、今までであるいた事なけれども、(4)てんぼの皮、行つてのけう。その間に用意して置かんせ。
おゝ用意、(7)擂子鉢・(6)刷毛(はけ)・(7)擂子木しやに構へ、待つて居ります、早う〳〵。
花はて、そこらは合點ぢや。
と、妾も下女に(8)二世かけし男のためや徒歩跣足(かちはだし)、つひに著馴れぬ置き

(1)僧と假橋。

(2)名は關八郎左衛門。美濃の關の孫六の家筋。近江滋賀郡西坂本の刀匠で、下坂邑に住するから下坂といふ

手拭、急げばまはる小穢ほら〳〵、杉が前垂(1)かり橋を、足もしどろに行過ぐる。半七は番屋のかげ、ちらりと見るより、

これ〳〵此處に居る。

と招かれ。

やあ、なかばさんかいの、逢ひたかつた。

と抱きあひ、こかうは涙ばかりなり。

半これ、泣いて居ては濟まぬこと。今宵中に大阪までのかねばならぬ。さあおじや。

と手を引けば、

花まあ待たんせ。さつきの小判ごうしての才覺ぞ。詮方なさに、こはい事などさんせぬか。ありやう言うて落着かせて下さんせ。

半いふまでもない事。此の身になつた半七を、粉に叩いても一歩一つ誰が貸さう。先度の脇差三十二兩に賣拂ひ、銘なしの下阪(2)、寸も燒も變らぬを、八兩で買ひ換へ、二兩で銘をほらせ、拵へすま

(1)他人のものを賣拂つて、その代價の幾分を私する事。
(2)斬罪。
(3)叔母の夫茨五郎。
(4)惡しにかける。
(5)堰。せきに同じ。

して大阪へ下し、その賣(1)りへぎの二十兩、たとへ首(2)になるとても、もう取返しのならぬ事。此の上ながらも罪にあはゞ我一人、叔母婿・叔母にも難儀をかけず、そなたの行末賴むため、心ざすは大阪。まことにそなたの繼父が、盜人と言うたも嘘でない。我が身で我が身が恐しい。

と、語ればお花も身を慄はし、

さあそんな事であらうと推量にたがはぬ。いとしやわし故いろ〳〵にお身を狂はする。詮議の時は皆わしがわざにして、身をのがれて下さんせ。

半はて、罪に逢ふとも遁るるとも、分け隔はないわいの。

花ほんにさうぢや、女夫ぢやもの。

と、又締寄せて泣く中に、あとの二階に、

花樣遲い。こりや豆腐に買はれてか。迎ひにいけ。

と聲々の、南無三寶、見付(3)けられては足(4)もと暗き、ゐせき(5)の石に踏み

くじき、長き絆絹裏足まとひ、走るとすれど夜中の太皷、(1)ごんごんぐ
りのづしを出れば建仁寺、
(2)だらりが鳴るぞ、だらつくまいぞ、鴛籠よ〳〵。
と呼ばれども、無いか聞かぬか耳塚の、(3)西に錢座の名のみにて、小錢
なければ草鞋も、二足を小判一兩で、買うて穿く身ぞ　三平哀なり。

お花半七道行

幾夜々々の憂き勤。七枚起請そら誓文、日本國の神さんを、だました
罪かだまされた人の恨の嫉み草、つひに我が身の下り舟、乘りおくれ
たる淀堤。淀の河水行く末は、いかなる罪に大阪の、道がどこやら何
里やら。身は初雁よ初霜に、寢亂れ姿忍ばしと、前垂取つて丸ぐけの、
襷をちみな抱帶、しやんと結んで引締めて、あゆむとすれど行き馴れ
ぬ、道捗取らぬ女旅。これも何ゆゑ男山、作りし罪は山崎の、麓はあ
れよあはれ實に、いつか都へ歸る山。春は梢に色々の、花咲く山にと

(1)太皷の音どんに關東の辻子をかける。國栗の辻子は、京都四條南側芝居の裏建仁寺町二丁目三丁目の間の横町をいふ。辻子とは新道の意。
(2)建仁寺の陛羅尼の鐘は曉方になるだらつくはその條。
(3)豐國神社の前にある。太閤征韓の時、清正と行長とが、彼の國で斬り取つた敵の鼻を埋めたもの。故に鼻塚ともいふべきであらう。
(4)町の名。京都大佛の西。
(5)起請は男女が誠意の變らぬ事を誓ふ證文である。料紙は熊野烏の牛王を用ひるのが本則であるが、その他の神々の牛王を用ひる事もある。七枚起請は、義經記四土佐坊義經の討手に上る事の條に「熊野の牛王七枚に書かせ、三枚は八幡宮に納め、一枚は熊野に納め、今三枚は土佐が五體に納めよとて、燒きて灰になして飲みにけり」ともある。そら誓文は約束を履行しない事。(6)逢ふにかける。(7)しどき。(8)男即ち牛七ゆゑに、男山をかける。(9)山々あるにかける。(10)越前國敦賀郡鹿蒜山歸るにかける。

(1)醬曲山姥による。
(2)古今集十七雜上貫之「かつ見れど疎くもあるかな月影の到らぬ里もあらじと思へば」。
(3)賢い雁は霙を避けて南に行くが、自分たちは雪を誘うて山めぐりをする。
(4)山を守る女神。山彦に對していふ。
(5)ひら〳〵するに枚方をかける。枚方は北河内郡。
(6)夫婦の中。
(7)諺「網の目に風溜る」。「網の目に風とまる」ともいふ。遊女は無精なものであるけれども、まゝ實情もある。
(8)裾をそいだ袖。元祿頃流行した。
(9)あのそれ、記憶してゐますか。
(10)强ひて無理にのむ酒。やけ酒。
(11)待宵の小侍從の歌の俤(平家月見)。

山めぐり。(1)隣は青し夏山の、かしは散るてふ卯の花や。山時鳥山あひ
の、景色の花に顏つくる、笠を傾け山めぐり。秋はさやけき月影の、
到らぬ山はなけれども、わけて名高き山うけの、月見る方へと山めぐ
り。さて又冬は遠山の、雲もて來る雲の脚　賢き雁は南向き、北を
後ろに山を越す。山又山や峰白し。雪を誘うて山めぐり。めぐり〳〵
て山姫の、山衆まじりの淨瑠璃も、夕べ限りの口癖や。今日は委を町
風に、やつすとすれど隱れなき、帶のひら方近くなる。松原過ぎて河
邊を見れば、あれ〳〵〳〵、五つばかりの子を眞中に、乘合舟の女夫づ
れ、思ひ無き身の高笑ひ、餘處のつまごと羨し。流れ渡りの情である。
と、網の目にさへ戀風が溜る。荻の〳〵上風身にしみ〴〵と、せめて
一夜は嘘なしに、ほんの女夫といつの世に、云はれつ云はん情なやと、
抱き締めたるそぎ袖も、涙にひたすばかりなり。間夫で逢うたも一昔。
それ覺えてか、一昨年の、十七日の臘月、宵の我酒にほの〳〵と、二
人炬燵のじやらくらを、憎や鳥に起されて、あかぬ別のあしたより、

(1)日文ちぶみの附届け、いよしごげんと書いたるは、ほだしの種か花すき、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結び文。方様まゐる花より と、思ひまゐらせ候べくの、わけの盃色見えて、わきていづみの思はく は、たゞ逢ひまして〳〵、又の御見をまづかしく。その言の葉も昨日 といひ、今日と暮して飛鳥川、流れの里ははる〳〵と、あとになが の夕あらし、髪のおくれのはら〳〵〳〵、共に亂るゝ我が心。曇りあ る身は恐ろしの、お城も近き難波江の、よしあし知つてはまる身を、意見は釋迦に京橋の、こなたの森を隱家と、暫くつかれを 三重晴しける。

下の巻

急ぐとすれど秋の日の、短きあしの難波潟、京橋より暮れかゝり、問へど隱れも長町の、叔母の家作常々の、話に大方嗅ぎあてて、

半 伽羅細工の甚五郎様はこなたか。

と、くどりあくれば、

(1)日文は毎日送る文。血文は起請など血で認めた文。
(2)いよごげん。もつと度々お目にかゝつて。松の落葉二文ことば「誠に文は関の友、いよし御げんと書いたるは、ほだしの種か花薄、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結び文、方さま參る梅よりと、思ひ參らせそろべくと、譯の盃色」めいて、わきていづみの思はくは、只逢ひまして〳〵、又のえにしをまづかしく」。
(3)下のほんにのぼ「穂」をいふために おく。
(4)戀、色等の意。
(5)新古今集十一戀一筆輔「みかの原わきて流るゝいづみ川いつみきとてか戀しかるらむ」。
(6)待つにかける。
(7)古今集六冬春道列樹「昨日といひ今日と暮してあすか川流れて早き月日なりけり」。
(8)なるに長柄をかける。
(9)大阪城。
(10)善惡に葭草。
(11)「釋迦に經」又「釋迦に心經」をかける。京橋は大阪城の西北口。
(12)新古今集十一戀一伊勢「難波潟短きあしの節の間もあはでこの世を過してよとや」。あしに脚をかける。
(13)無にかける。
(14)伽羅の緣語。

(1)京から大阪に。

あゝ、いかにもこれが甚五郎。これからぞ。

といふ叔母の聲。

半 いや、京の半七、下(1)りました。

と、お花諸共つゝと入り、

叔 やあ、これは〳〵珍しい。文の來たは一昨日、間もなう何の用あつて。や、つれもあるさうな。どなたぢや、これへ。

とあひしらふ。

花 叔母樣、お久しうござんす。いつぞやお目にかゝつた花と申す者。御無事でお目出たうござんす。

と、腰うちかくる二人の體、心得がたくや思ひけん、

叔 はあ、ようこそ。

とばかりにて、不思議さうにぞ見えにける。半七色をさとられじと、お花ごとも奉公の年あき、和泉の親もとへ歸る道、幸ひ同道致しました。いやまづそれはさう、誂への脇指。先樣は侍衆、お氣に入つ

たか入らぬか。萬一お氣に入らいで、甚五郎殿や叔母樣に、難儀のかゝる事あらば、その難を、私が身に受けうと存じ參つた。その次第が氣遣な。どうでござる。

と言ひければ、

叔あゝこゝな人、つがもない。細工がお氣に入らぬとて、何のこちやそなたに難儀がかかるものぞいの。その上喜びや。一昨日下るとそのまゝお屋敷へ持參召されしに、柄まはり・緣頭・鞘の塗、萬事殊の外御意に入り、「甚五郎が女房は、よい甥を持つた仕合せ者。後後はお屋敷の御用も仰せつけられ、出入させ」との御念比。いよ〳〵細工に精出しや。

と、聞くより二人は手を合せ、

半ゑゝありがたい忝ない。天道のお助け、命拾うた。お花喜びや。

花嬉しうござる、胸のつかへがすつとさがつた。

叔おゝ道理々々。武士を相手の商賣、大事に思ふその冥加、今日又俄にお屋敷から、脇指について何やら急なる御用とて、甚五郎殿を召しに來て、晝すぎから參られ、今に於て歸られぬ。定めてお悦びに、又渡の御祝儀。お振舞があるさうな。定めし醉うて戻られう。

と云へば半七色ちがへ、

むゝ、脇差について急用とて又呼びに來ましたか。さあお花、京から道中云ふ通り、かうあらうと思ひし事、我はこれに待受け、甚五郎殿に對面し、脇指の御祝儀身に引受けて祝ひ、運によつて今宵中にお屋敷へ、召し出されうも知れぬこと。そなたはこのあたり旅籠屋に一宿し、明日はさう〳〵親もとへ。

と、いふこわつきもしを〳〵と、

半さうしては半七が一分は立たねども、あゝ何とせう、暇乞ぢや。

と、胸に手を組みうつぶきて、涙を隱すばかりなり。お花も涙に聲慄ひ、

(1)譯もない。つがは繋りの略。
(2)脇差が京から。
(3)夫甚五郎が。

(1)仕上げた刀劍を註文主に渡す事。その時にはお悦びに祝儀がある。
(2)しをれ返つた樣子。

聞えぬこと言うて下んする。喜も悲みも、二人が身に引受ける約束ぢやないかいの、甚五郎樣にあひまして、有無の事を聞くまでは、わしや髪をいごかぬ。叔母樣もをなごおやが、男の一世の大事の時、見捨てられうかこれ半七樣、むごい事いふお人や。

と、恨みかこちて泣きければ、二人の顔をつく〳〵見て、

叔そなた衆がいふ事は、何の事やら此の叔母は、すつきりと合點がいかぬ。こちの連合甚五郎殿は、武士附合して堅い人、半七も侍筋、行儀强い若い者と、常々自慢し置きしに、それにお山を同道し、初めて對面させられうか。一町北は皆宿屋。二人ながら早ういて、甚五郎殿に逢ひたくば、半七ばかり明日おじや。夫婦にもなりおほせ、首尾よい後はお花とも對面さしよ。今にも歸られ此の體見せ、大事の甥を連合に、見限らするが口惜しい。此の世話やむも大切さ。さあ早や〳〵。

と氣をせけば、

(1)合點の出來ない。譯の分らない。
(2)とやかくの事。
(3)さつぱり。とんと。
(4)世話を燒いて苦にやむのも、甥の半七が大事だからだ。

灰

淀鯉出世瀧徳

欠

淀鯉出世瀧徳

大阪北濱の富豪淀屋辰五郎（本性は岡本、父は古安）が、元祿十二年十八歳の時、茨木屋の遊女吾妻を身請する事から追放の身となり、正徳五年に許された事實によつて作られたもの。

外題年鑑には元祿十三年四月八日の登場と記されてあるが、これも恐らく寶永六年（作者五十七歳）頃に始めて上場されたものであらう。

淀鯉出世瀧徳之巻

上

唄「曲輪住居は時雨の雨よ。ふつつふられつむら〳〵さめの、まだひぬ、露もまだひぬやよや」。あゝ霧は不斷の伽羅を焚き、晝にもまさる燈火は、月常住の夜見世かや。朱雀・三谷もいかなこと、直下にみつの浪花の里、戀も所の氣につれて、よろづ手廣き大曲輪。色に擲つ金銀は、土か砂場の西口や。思ひ綻ぶ袖口を、九軒・阿波座の野良鳥、月夜は猶ほか闇の夜も、瓢箪町を腰づけに、いけんふる手の印籠の、底に焚きがら吸殻の、煙に油煙棚引きて、霞が關か東口、爰ぞ浮世の

(1)遊里生活の身は、時雨の雨のやうなものだ。男を嫌うたり嫉はれたりして、悲みの爲に涙の露が乾かぬ。世繼曾我風流の舞「曲輪ずまひは時雨の雨よ、ふつつ濡らしつむら〳〵さめの、まだひぬ露もまだひぬやよや。霧は不斷の伽羅を焚き、晝にもまさる燈火は、月常住の夜見世かや」ふつつふられつは降と振。霧は不斷のとつゞけたのは、寂蓮法師の「村雨の露もまだひぬ」の歌からの聯想。(2)平家物語灌頂巻小原御幸「覺破霧燒不斷香、扉落月挑常住燈」。(3)朱雀は京都島原、三谷は江戸吉原。(4)直下に見ると三津。三津は高津・敷津・難波津の三。故に大阪を三津の里ともいふ。(5)難波の遊里即ち新町。(6)新町の西口の南にある町名。(7)袖口をくける。九軒・阿波座・瓢箪町、何れも新町の廓の通りの名。(8)始終そこに入りびたつて、よくそこの事情に通じてゐる野良者。(9)攝津今宮村から産する根付にする瓢箪は、上下が同じいので、後先が分らぬといふ意で闇の夜と名づけた。それで闇の夜も瓢箪町と續けた。(10)瓢箪を腰につけるのは舊式だといふ事から意見古手の印籠とつゞく。(11)伽羅のたきがら。(12)新町橋の東は、伽羅煙草の煙と油煙とで霞が關ともいふべきで、こゝが浮世の伊達を盡す大木戸である。この大木戸はあけて客の來るを待つて居るが、あけないものは銀といふ富樫の關である。霞が關は江戸。東口はその條。

(1)謡曲安宅「それつら〳〵惟んみれば、大悲教主の秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし」。(2)悉の名。あゐと引くのがお定りであるから長返事といふ。(3)眼の太鼓とも、しまひ太鼓ともいふ。これを合圖に廓の大門を締める。(4)丑の刻即ち午前二時。(5)駕籠舁。(6)亥猪ともいふ。十月の亥の日に食ふ餅。萬病を殺ふとも、子孫繁昌の爲ともいふ。(7)赤と藍との小さい格子縞のべんがら紬、べんがら紬は印度のべんがらから地方から輸入したもの、餅と小豆とは緣。(8)さうかというて。(9)九軒町の揚屋井筒屋。(10)山城國綴喜郡。(11)遊里では本名を用ひないで幣名を用ひた。淀川は八幡の附近から鯉を產して淀鯉というて有名であつたから勝二郎の幣名にした。

伊達の大木戸、あけぬは銀のとがしの關それつら〳〵おもんみれば、大盡客衆の秋の月は、小判の雲に光り、小傳呼びましや長返事、驚かすべき夜半もなし。三番太鼓つ、いてん、天下は夜中八つ過ぎ、曲輪は戀の書中や、駕籠やろばかりぞ寢聲なり。

頃しも初冬亥猪の餅、小豆繩のべんがら縞、羽織の上に手拭帶び、頭巾鼻まで顏隱し、女郎買ふべき風にもあらず、さながら用なき體にもあらず、どちらへどうとも片づけて、思案に落ちぬ風俗。新町橋の橋上、橘辨慶が薙刀の、鞘拾うたる如くにて、うろ〳〵として立ちたりしが、ちよこ〳〵と立寄つて、

これ駕籠の衆、卒爾ながら物問ひませう。今宵九軒の井筒屋の客は、どこ衆の何とした人、まだ爰に遊んでか、どうでござる。

と尋ねける。

駕あゝされば、井筒屋のお客は、隱れもない八幡の住人、江戸屋の勝二郎殿、替名は鯉模、十萬兩遣うても、こちが百錢落いとも思

(1)頑固。偏窟。片意地。(2)家政を差配すること。禁戒する事。成敗する事。(3)町年寄の事務所。(4)質屋の屋號。(5)來をかける。(6)浮標「長持運送唯調度通用。一、太夫は大長持。一、天神は中長持。一、引舟は小長持。右大中小三通り有、おの〳〵女郎屋の定紋をしるし內には夜具並に料紙筥・硯箱其の外手箱等の物品々入。女郎極りたる揚屋へ女郎屋より持たせやる也。」(7)片ゆき。一方に偏する事。偏頗。(8)角は鐳鉱の事。その形が鼈類に似て居るからいふ。天保一分銀の俗稱。

思はぬ程の身代なれども、新七とやらいふ手代、かたむくろにせいたうし、一門衆・町所まで頼んで、士藏〳〵に封をつけ、一分の金も遣はせなんだげなを、惣兵衛といふ相手代、「若い旦那の氣を詰めさせ、煩はせてはならぬ」と新七を追ひだし、氣まゝにぐわんぐわと遣はせる。鯉が生簀を飛んで出て、日ごろ馴染の茨木屋の吾妻をとんと請けいだし、明日はすぐに八幡へ、今宵曲輪の名殘ぢやと、井筒屋で大振舞、何ぢやは知らず、井筒屋の庭から門まで、長持で通られぬ。今夜の物入、ざつと積つて二百兩。さても金は片いきな。ある所にはあるものか。わし等は夜晝あがいて、三百は儲けかねるに、よう飮んだとて一步取り、より笑うたとて二步取り、兩肌ぬいでこそぐられ、鼻の穴へ胡椒入れて、くしやみしても一角。いかな鯉でも鮒でも、一歲あかう。

と語りける。新七さてはと恨めしく、腹の立つにも主思ひ、むゝ、それは聞き及うだ富限者、ずんど若い人ぢやげな。仰山な酒

(1)棠大門屋敷には、大橋の腹に生れたとある。風流曲三味線には、揚卷といふ太夫の腹とある。
(2)大酒のみ。蛇は物を丸呑にするからいふ。
(3)お金持。身分のよい人々。
(4)單に脇とも云ふ。仕手の相手。
(5)側仕へとして抱へおく事。
(6)舞臺で演ずるに對して、座敷で演ずる能。
(7)猿樂で翁の曲に出る老人。黑い面をかぶつて舞ふ。
(8)高砂・猩々、共に能の曲名。亂れも能樂の語。舞だけあつて詞はない。斯道の傳授事。
(9)新七の女房。
(10)今は立賣堀と書く。新町の北。目もきよろ〳〵と馳と緣。
(11)新町の砂場に通ずる口。
(12)歸られるまで、間もないだらう。

飲みと聞いたが、今宵も酒であらうの。

駕あゝ〳〵、並びもない飲み拔け。親茂庵(もあん)というたも、命を酒に換へられた。鯉(1)殿の母ごせも、もと爰に勤めた人。どちらへ似ても蛇(2)(じや)の子孫。それでもよい(3)衆のしるしには、萬事に達した器用人。能の脇(4)師を手(5)いけにして、九軒で主(ぬし)の座(6)敷能、常住酒で足ひよろつき、三番叟(7)も高砂(8)も、皆猩々の亂れかと思ひます。

とぞ笑ひける。

女房(9)お半も手分けをして、見外(はづ)すまいの目もきよろ〳〵。鼬(10)堀邊さまよひ來て、夫を小かげへ咳拂ひ、招き寄すれば、新七合點、そつと寄れば耳を寄せ、

半なう、今まで西口(11)につけて居ましたが、爰へはまだ見えぬか。

とさゝけば、

新むゝよい〳〵、樣子は知れたぞ。まだ井筒屋にゐらるるげな。程(12)はあるまい、ぬかりやんな。人が見れば不審が立つ。

(1)新町の夜見世をひやかして歸る人人。(2)よね狂ひのよねを米と見ていふ。割がよい。(3)時節がら。
(4)爲の掛詞。曾根崎心中道行血死期の霜「星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の橋と契りて云々」鵲の橋とは七夕に牽牛、織女の兩星が相會する時、鵲が翼を並べて天川に架けるといふ想像の橋。
(5)太夫に附隨する遊女の事で、誹諧通言に「太夫は大船に表し、繫げる舟の心にてそれを廻す故引舟の名あり、勤めはせず內證なり」とある。太夫には必ず一人の引舟がつきものであつた。(6)まじりに。
(7)遊女に仕へて居る童女で、將來遊女となる者。(8)東口の大門ぎは。
(9)花車ともいふ。遊里で諸事のとりもちや、遊女禿等のしつけ監督をなす女。遣手の名が綱であるから、渡邊綱に思ひよせて、大門を羅生門といつたのである。(10)今の大阪西區江戸堀下通、京町堀上通、京町堀通の各五丁目の西端、百間堀河畔一帶の地の稱。(11)鈴木に鱸をかける。鯉、雜魚場、すゞき、皆緣語。

と、一つ所に立ちもせず、橋を越えたり渡つたり、忍び佇む女夫の姿、夜見(1)世戻りが氣を附けて、

やあこつてりと味な事、妓狂(よねくる)ひより、あの方の實入(2)(みい)りがよからう。

と云ふもあり、

時分(3)がら心中の下地か。又義太夫が口の端に、新町(4)橋を鵲の橋。

と、語りて行く人も、絕えてその夜も更けにけり。

新なう、あれを見や。中から提燈、引舟(5)まじくら(6)、禿(7)(かぶろ)が謠うて客送る。そりやこれにきはまつた。そなたは駕籠に取りつきや。

半こつちへ任せて置かしやんせ。

と、大門(8)ぎはに待ちかくれば、

遣手(9)(やりて)のつなぢや、羅生門あけてたも。

と云ふ。茨木屋の大盡鯉にはあらで、雜魚場(10)(ざこば)の人、

すゞ木樣(11)、明日駕籠の衆頼む。

駕合點。

(1)南無三寶を三枚肩にいひかけた。三枚肩とは駕籠一挺に舁夫が三人附くのをいふ。
(2)十分用意して機會を待つ事。藥鍊は松脂に油をまぜて煮たもの。それを弓の弦などに引く。
(3)あばたづら。
(4)當時の道化方の名人。
(5)遊女の事を君ともいふが、こゝはたゞ對稱代名詞。
(6)若い女。
(7)本當に。誠に。
(8)幇間などの用ひた自稱代名詞。
(9)太夫は遊女中の最上位のもの。始皇帝の故事を聯想して、松或は松の位などともいふ。天神は太夫に次ぐ遊女。勤銀が廿五匁であるから、北野の緣日に因んだ名。天職とも梅とも格子ともいふ。
(10)道頓堀は東口の南に當る。
(11)藝術つかひ。
(12)うまいものを澤山食うて悦ぶ者。
(13)大盡を大神と見て本社とし、幇間を小祠にたとへて末社といふ。八十末社はもと伊勢內宮に屬する八十の末社の事であるが、それを多くの幇間の意に轉用したのである。

と、北へ走れば新七夫婦、(1)なむ三枚肩見送りて、口をあいてぞ憫れたり。

新それ〳〵そこへ又提燈、今度はよもやはまるまい。

と、くぐり潛るを手ぐすね引き、女房しつかと引つ捉へ、見れば色は眞黒に、橫ぶとつたる(3)菊石頰、道頓堀の佐渡島傳八。(4)はつとしらけて立ちのけば、傳八も膽潰し、

これは君何し給ふ。人たがへとは存ずれども、(6)色に袖を引かれて、(7)しんぞ忝う思ほゆる。ほゝほゝ〳〵。(8)賤も昔は戀を研き、年中曲輪に入りびたり、(9)太夫天神に引きずり引張られ、それで顏が引きつつた西瓜のやうな顏なれど、色は黑實、ずんど風味のよい男。しんぞ一と切振舞ひたい。ほゝゝほゝ〳〵。

笑ひて南へ(1)歸りけり。

暫くあつて、「井筒屋の能が濟んだ」と、出入の者・(11)兵法遣ひ・座頭・(12)茶の湯者・古道具屋。大酒・食悦、(13)お影を蒙る八十末社、流石の曲輪、

(1)漢方醫の內科。(2)橫柄に構へる。威張る。(3)羽振。權勢。威光。
(4)心を合す。親しくする。ぐるになる。(5)羽交は左右の翼を打交へたところ。羽交につくはあとにつく事。
(6)筒落米の略で、米さしの筒から落ちこぼれた米をいふ。(7)胡麻化す。(8)いきは罵る接頭語すりはちほ、巾着切、盡とんぴ。(9)引き詰める。苦しめる。(10)曉かす。束縛する。
(11)追ひ出して了つた。(12)うろつく。(13)訴訟や何やと云ひがゝりさうだ、公事に關をかける。關は宮から出るから宮といひ續けたのである。(14)法廷。出る所の轉訛。
(15)藏內に居れなくして見せよう。
(16)御器でお椀の事。(17)歌舞伎芝居の外題で、福井彌五左衞門の作。春藤治良右衞門が弟新七と共に、非人となつて敵を狙ふといふ筋。「橋の下」はこの外題からの聯想。
(18)「公事の宮」の如く掛詞や緣語などを用ひて面白くいひなす事。(19)大袈裟な事をいふ。大言壯語する。

鬻籠切れて、雪駄片足の醉潰れ、遙かのあとよりのさ〳〵と、彼奴は手代の惣兵衞め、同道は佞人組、能の師匠の富川め、京の浪人軍四郎、醫者はすれども、(1)本道守らぬ目藥師なんど、中にも惣兵衞が(2)さ取つて、なんと、何れも、旦那のはゞ(3)を御覽じたか。あれ皆我等がさする事。兎角この惣兵衞と肌(4)を合せ、(5)羽交についてまはらつしやれ。一期の身代固めてやらう。はて旦那の身上で、一年に千兩二千兩は、つゝおでもあること。旦那を名代(6)に立てては、どうくるめうとも自由な事。かの新七のいきすりめ。お爲がほで旦那をひづめ、家久しい我等を押しのけ、一人威勢を振るはうとし居つたを、旦那へ吹込み、(11)まくして出してのけたが、聞けば大阪にうろたへて、此の惣兵衞と、公事の宮のどぬかすげな。あはれでんどへ出やれかし。五畿內をせいて見しよ。今のまに(13)ごきさげて、心からの非人警討。どこぞそこらの橋の下、新七はゐやらぬか。

と、(18)口合・惡口・(19)僭上張り、どつと笑うて通りけり。新七どうもこた

へられず。胸をさすり鎭めて見ても、律義一遍に眞直に、一筋な若い者、末の事も思はれず、切つてくれうと飛んで出る。女房だきつき、これこゝな人。女夫の者が世話燒くは、勝二郎樣へ御意見申す爲ではないか。あいつ一人切つたとて、お主の爲には何がなる。「新七が言譯なく、身のあつさに切つた」と、皆手前の踏みかぶり。無念を怺へてお爲になり、親旦那樣の御恩を送る心はないかいの。其のやうに短氣では、わしやしや心もとない。

と恥ぢしめとむれば。新七、

それも皆合點、理が非になるとは知つたれども、今の惡口聞かぬか。あいつが此の前親旦那の惡性金を十四貫目橫取して、曲事に逢ふ筈を、兎や角おれが精力で、沙汰なしに事濟んだ。其の時には、「命の親」と手を合せて拜んだ。それから十年立たぬまに、少しも爲になりさうな古い手代をそねみ出し、おそらく涼しい此の新七に、無い難つけて暇出させ。旦那の身代からにして、今のやうな雜言。のし

(1)苦しき。
(2)自ら招く不利益。
(3)勝二郎の父茂菴。
(4)遊蕩費。
(5)處分。處罰。
(6)骨折。盡力。
(7)憚りながら。
(8)潔白な。正しい。
(9)橫柄に構へる。

あがつたつら見れば、火に入る事も思はれぬ。

と、涙を流すぞ道理なる。

時に揚屋の上する女子・下男、門番起いて、

ちと門を賴みます。これはこつちの大事のお客、浮世小路までお歸りぢや。きつう醉うてござんす故、ことわり云うて、內からお駕籠に召させます。氣を通して下んせ。

と、云ふより早く門番、

皆までいふな、合點ぢやや。

と、くぐり開いて目を眠るも、日ころの金の威光ぞかし。夫婦すはや、と橋詰にて、駕籠のあとさきしつかと捉へ、

お駕籠待つて下され。

と引きとむれば、駕籠者、

やあこりや狼藉して、息杖の胸打をくらふか。

と振上ぐる。

(1)遊女を招いて遊ぶ家。
(2)揚屋などの座敷の世話をする仲居
(3)新町通ひの駕籠の立場。南は高麗橋筋、北は今橋筋の眞中にある細い小路で、東橫堀から西橫堀の間をいふ。
(4)大門の內から。
(5)駕籠を支へて息を休める杖。

新 狼藉は致さぬぞ。旦那のお爲に致す事。ぶたばぶて、叩かば叩け。
旦那へ一言申さぬ中は、駕籠をやらぬ。
駕 いや放せ。
新 いややらぬ。

とねぢ合ふ勢、駕籠を横に打ちあけて、鼾ながらの勝二郎、橋板をころ〳〵〳〵、川へ落ちんとする所を、お半ちやつと引起し、後ろを抱へて膝の上。一昨日からの醉さめず、女郎の小袖を打ちかけながら、舌もまはらぬ夢半分、

勝 太夫、爰まで送つてか。えゝかたじゆけなんきんの八幡、酒には醉はぬ。今のは兼平の能の手。木曾殿が泥田へ踏込まれた所。謠末(2)しら雪の薄氷、深田に馬を駈け落し、引けどもあがらず打てども行かぬ望月(3)の、駒のあたまも見えばこそ、こは何とならん身の果。いやはあ、なんと面白い事か。

と、ひよろ〳〵正體なかりけり。

(1)忝いを南京の鉢といひかけて八幡といひつゞけてある。八幡は弓矢八幡で誓の詞。忝い。誓つて酒には醉はぬの意。
(2)「こは何とならん身の果」まで謠曲兼平の句。
(3)信濃の地名。昔こゝから產した馬を朝廷に奉つた。逢阪の關の淸水にかげ見えて今や引くらむ望月の駒。

(1)夫。
(2)慾張者。
(3)悶著。ごた〳〵。もじや〳〵。
(4)さて〳〵といふ意味の感嘆詞。

半申し旦那樣、これはどうしたお身持ぞ。お前のお蔭で榮耀する、今夜の人も大勢あるに、お駕籠に一人附く者ない。これが江戸屋の勝二郎樣のお行儀とはいはれまい。わたしが男(1)の新七にお暇を下されば、お出入さへとめられたれど、眞實お爲になる者は、お家で新七ばつかり。御身上の害をなす惣兵衞めと新七と、思ひかへて下さんすは、お馴染とも思はれぬ。その上忘れはなされまい。前方わたし御奉公致したうち、「お寢間へ來い」の、「おそばに寢よ」のと、人頼みまで遊ばした。わたしは一つも年かさなり、「若いお主を唆かす、熊手(2)よ慾よ」と言はるるも口惜しし。奥樣お呼びなさるる時のもじやくじやもいかゞと、お暇を乞ひましたれば、「志を感じた、さりとは女子に奇特者。あの新七といふ者は、親茂庵不便をかけ、我が子の如くせられて、兄同然の新七と夫婦にして、一生見捨てぬ」お約束。その新七を追出し、かたきのやうになさるゝは、其の時から私を憎さに夫婦に遊ばしたか。憎まるゝ覺はなけれども、お心に

したがはぬ恨みを、杵[1]であたり杓子であたる御仕方か。たゞしは今にお心殘り、恪氣ゆゑの憎しみか。それならなほきたない氣。何がわるうて、新七が御意見は御意に入らぬぞ。たのもしうないお主樣や。

と、涙をこぼさぬばかりなり。げに酒の酔[2]本性忘れず。お半を突きのけ、

勝因緣話措き居らう。新七めが意見聞きたうない。おれが親仁はな、一年に八千兩九千兩づつ、三十年遣はれたれども、遂に浮名は立たなんだ。こちが身代で、五百兩や千兩遣うたら何ぢや。なあ、慮外ながら、それを新七めが、「遣ひ潰す」の、「身持がわるい」のと、一門・一家・町年寄[3]・庄屋[4]まで觸れあるいて、藏々に封をつけさせて、阿呆者にして吳れた。忝[5]いことの。何ぢや、そちに心が殘つて恪氣ぢやあ。おけよ、尤も初は惚れて居た。けれども今新七めがたべよごして、裏までかやしてくひさがいたものを、このはう所望にござ

(1)「杵に當り棒に當り」と同じく、何かにつけて當り散らす意の諺。
(2)「酒の酔本性たがはず」「生酔本性違はず」などと同意の諺。
(3)町毎に一人を置く。町内の公務を司る。
(4)領主が土民の中から命じて、郡代や代官の下に村方の事を統べしめた役。名主ともいふ。
(5)反對にいつたのである。

らぬ。あゝ、慮外ながら、新七めが口ゆゑに、揚屋[1]の届けも無沙汰になり、若い者の一分を捨てうとした。此の恨みは盡させぬ。勘當ぢや。さあ、駕籠やれ。

と、乘らんとするを、新七飛出で縋りつき、

お情ない旦那殿、何とて左樣に邪[2]にお聞きなさるゝぞ。「新七が御一分を捨てた」とは恨めしい。捨てまい爲の御意見。金[3]の事は申さぬ。千兩が萬兩でも、金ほどづつのお身に附くお慰みがあるにこそ。惣兵衞めが計らひにて、もがりごも[4]を太鼓[5]につけ、十兩の物入[6]を百兩に附け立て、九十兩は分けごりにして、たはけにして笑ひまするが、こなたは御存じござらぬか。吾妻殿の身請の金も、私お家にある時分、七百兩と申す金、惣兵衞に渡した。その上に此の度名物[7]のお家の道具、京三界[8]質に置き、二千兩餘の御借金が出來たげな。旦那には借金させ、手代の惣兵衞屋敷を求め、お出入の醫者・浪人、田地買うたり銀貸して、分限になるが御存じないな。御念比

(1)揚屋へのつけとゞけ。
(2)怠りがち。怠慢。
(3)千兩でも萬兩でも構はぬが、それだけの價値のあるお身につく慰みがある譯ではない。
(4)金品を强請する奴等。
(5)幇間。
(6)後出の金の鶏。
(7)界隈などいふに同じ。又遠く隔たつた土地の意にも使ふ。
(8)前出の京の浪人事四郎。

の醫者はあれど、よしあしを嗅ぐ鼻が利かぬ鼻かけ醫者が、入れ殘しの目藥でも、お目があかぬか情なや。此の新七めが親は、大和の貧乏人。幼少の時、藤田小平次[1]と申した狂言役者へ、奉公やら養子やらに參つて、女形を致したを、親旦那[2]のお蔭でお家へ參り、手代なみになされしが、流石育ちが恥しい。算用・算勘存せねば、何を奉公、御恩を送らうやうはない。律義を我が身の奉公にして、お爲にならうと存する一念、五臟六腑[3]にしみ込んで、お主を大事に存じまする。茂庵樣の御臨終、「勝が事を賴むぞ」。「お氣遣ひをなされな」と、請合うた甲斐もなく、斯樣にお身を持ちくづさせ、佛へ言譯何とせう。お墓所[4]へ參つても、顏振りて、戒名を碌に拜みも致されず、涙に沈み居まするわいの。それさへあるに此の盆から、お前からの思ひつけか、惣兵衞めが、「私が若旦那の勘當の者、お旦那の墓へは參らすな」と、お寺へきつと言付け[5]、さいた花も取捨て、手向の水まで打ちあけて、未來にまします旦那にさへ疎ませうといふ事か。

(1)伊勢の出身。京で嵐三右衞門と頭領した。棠大門屋敷「六方は嵐、實事は藤田小平次と、此の二役は何れの役者が勤むるも、是れを地盤にすといへり。磬れなるかな小平次。一生顏に紅粉を塗らず、裸にならず。不斷無付奮に、上下か羽織はずさづ、年中袴をかへす。實事をして見物に嫌といはれず。思へば〳〵上手なり。」

(2)新七が勝二郎の父茂庵に引取られた事は、棠大門屋敷卷二に、新七を藤田親貞、茂庵を與茂九郎として載せてある。

(3)腹の中。五臟は心肝脾腎脾の五つ六腑は大腸小腸膽胃三焦膀胱の六つ。

(4)顏をそむける。

(5)嚴重に。きびしく。

(1)出すぎた失禮な事。

(2)敷居。家の入口。

(3)駕籠舁夫をもいふが、こゝは下男の事。

(4)勝手むき。

お爲を思ふ新七が、左程お氣に入らぬは、水と火との相性か。餘りといへば曲がない。さうではない若旦那。

と、主の意見の恨み泣、詞を過ごし推參いふ[1]。涙は主の藥ぞや。勝二郎、大酒の上なほ〳〵氣にやさはりけん。

やあ、意見いふも所がある。「途中に駕籠より引きずりおろし、恥かゝせて意見せよ」と、親者人の遺言か。さあ此の慮外の言譯があるか、聞かう。

と怒らるる。

新 これ申し勝二郎樣、密かに御意見申さうも、門詰[2]も踏まされず、取次申す者はなし。よしお屋敷へ伺候して、六尺[3]どもが手にかゝり、ぶち殺されうば殺されう。主從の冥加は忘れまいと、朔日廿八日には、御門に禮して罷り歸り、さもなき時にも、月の中に二度三度、臺所の口まで參り、傳手[4]さへあらば、內證から申しあげんと存ずれども、さりとは人はつれないもの、古への傍輩も見ぬ顏し、目をか

けて引廻した丁稚・小者[1]・飯焚まで、詞をかける奴等もなく、馴染とて可愛や、白犬が見知つて尾を振つてしなだれる。犬に劣つた畜生ども、恨むまいとは存ずれども、凡夫心の淺ましさ、無念でならぬ、女房ども。

[2]

[3]

半えゝ口惜しい、新七殿。

新但しわれ〳〵僻言ならば、親旦那の魂魄[4]、冥途から蹴殺いて下さるしかし。

と、夫婦は橋にひれ臥して、聲をはかりに歎きしは、不便なりける心なり。

[5]

ゑひざめの氣はのぼる。ぐつとせいて勝二郎、

おゝ親父までもないこと。身が蹴殺いて見せんず。

と、飛びかゝつて引つぶせ、胴骨を散々に踏みつける。女房、

これはお情なし。

と取りつけば、

(1) 賤しい召使。
(2) 媚びて寄り添ふ。あまえる。
(3) 悟らぬ心。
(4) 「魂魄に冥途から蹴殺さるる法もあれ」などゝ、當時誓の詞に用ひた。
(5) 限り。

新そのまゝ措け、手向ひすな。お腹のいる[1]程踏ませませ。

勝おゝ踏まいで措かうか。かさねて斯樣な慮外をせば、したゝかにぶち殺さする。用心せよ。覺籠もて來い。

と打乘るも、腹立ち紛れ、譯もなく、後ろ向くやら前向くやら、縱に乘るやら横堀を[2]、

急げ〳〵。

と走らせし、若げの程ぞ笑止なる。新七は齒噛[3]をなし、

えゝ〳〵口惜しい、無念な。あま倒まの事にても、主に踏まれて恨はない。傍輩のいひなし故、踏まれたと思へば、腸が燃え返る。

と、橋板叩き欄干も、握りひしぐ許りにて、涙に眼も眩みしが、

よい、合點ぢや。思案あり。

と駈けいづるを、女房縋つて、

思案とはどうぞいの。短氣を出さずと待たしやんせ。

と引きとむれば、

(1) 憑る。氣が晴れる。滿足する。
(2) 西横堀の事で、新町橋東詰の南北に通ずる濱筋。横向くやらをいひかけてある。
(3) 不條理なこと。

(1)嘲り罵り意味を強めて云ふ時の感動詞。

(2)諺に「女夫喧嘩は犬もくはぬ」「夫婦喧嘩は犬もくはぬ」とある。

(3)番太郎の略で、自身番に附屬する小使。(4)獏にかける。獏は惡夢を食ふといふ支那の想像上の獸。

(5)町家の風俗。(6)衣裳を縫ふを縫針にいひかけ、針の緣に茨とつゞけた。(7)水祝即ち水あびせを聞かせたのである。水あびせとは、新婚の翌年正月に、親戚や友人が聟の家に會して聟に水をあびせて祝うた式。八幡、石清水、あびせる、井筒皆緣がある。(8)持たせてやるを遣手に遣手の名は杉であるから杉重といひかけた。(9)盛るを守口に。(10)佐太は守口の東北。(11)樂を點野(しめの)にいひかけた。點野は佐太の東北。たのしめ野には誰の占め野の意味もある。(12)焚くというたから鍋というたので鍋が茶屋は枚方のかんなべ山の茶屋か。(13)寛文年間の流行唄「吾妻請出せ山崎與次兵衛、請出せ〳〵山崎與次兵衛、そつこで請出せ三百兩」。

新しや、まだるい。最前に惣兵衛め、斬りそこなうたも女房ゆゑ。

短氣も短慮もいる事か。思案はこの胸にある。

半さあその思案が聞きたい。

新いや、これ許りは、まゝにして放せ〳〵。

半思案聞かねば放さぬ。

くらはするが放さぬか。

と、男思ひの女房と、主思ひの男と、誠あまりてつかみあひ、女夫いさかひ犬くはぬ、犬の悋氣におどされて、辻の番太が夢くらふ、ばくろう町をぞ 三重歸りける。

請出すといふその日より、衣裳をも皆町風に、縫針の茨木屋より嫁入とて、婿は八幡の石清水、あびせませんと、井筒屋の亭主は送る、傍輩の太夫・天神餞別を、持たせ遣手の杉重に、樽の名酒をもり口や、佐太の煮賣を見る事も、曲輪でならぬたのしめ野に、紅葉たけたけなべが茶屋、枚方・棹葉これもまた、吾妻請出す山崎見ゆる、そつこで乘物

(1)井筒屋太郎左衛門。

(2)例の弓矢八幡の略。

(3)面白からうをかる〳〵といひつゞけた。

(4)わつさりとしての意。さつぱり。爽か。陽氣。

(5)最初に据ゑる灸の事で、轉じて物事の最初をいふ。

(6)潮を踏むとは、世間の風波に揉まれて艱難すること。しほは機會。

(7)いかなる。

(8)お山見。お山が來たの意。けんじは見えること。

(9)昔の大砲。彈丸はもとは石、後には鉛。

(10)始皇帝の宮殿で、項羽が燒いた時その火が三月の間燃えつゞいた。

立てにけり。吾妻乘物の簾垂をあげ、

これ太郎樣、最早八幡も近いげな。兼て鯉樣、道まで迎ひに出やんす筈。そこをこちから先越して、によつと押しかけては、どうござんしよ。

太八幡、太夫樣、これはずんど洒落ませう。

吾そんならとんと菅笠で、供やら主やらごちや〳〵は面白。

かる〳〵飛びおりて、

あゝ氣が晴れた、わつさりと嬉しや。そばで山見たも、勤の皮切怺へたゆゑ。憂きしほふんだは身のやいと。

十四の冬より今年まで、それにしみたる風俗は、いかな家にも走り出て、お山見じと目をつける。上からくだる魚荷の戻り、あるきあるきの高話、

甲さて〳〵浮世は知れぬもの。江戸屋勝二郎と云うては、石火矢でも崩れまい長者の家と云うたれども、咸陽宮も滅び時、一時のまに

(1)ばかり。ほど。くらゐ。これしきのしきの如き。

(2)所拂、江戸拂、輕追放、重追放、中追放等の別がある。

(3)必ず打消の意味。どうして〳〵。何のいなともいふ。「いの」や「いな」は感嘆の助詞。

(4)歩合の低廉な事。割安。

(5)首を下げるを提重にいひかけた。

(6)餡餅の餡を案にいひかけて頭韻を合す。

(7)國繞。自分に關係のない他人の惡を嫉妬する事。

いとしぼや。あれも言はば金故。なま中持たぬ我等(1)しき、寢覺が樂ぢや。

といふあとから、

乙科は何ぢや知れぬが、勝二郎は追放(2)で、八幡は煮える。おりや見て來た。

甲百兩や五十兩は、あれでも取つてのかうか。

乙何(3)のいの。編笠さへ著せぬもの。請出された吾妻とやら、どうなる事ぞ。あつたらもの、安分(4)でこつちへ貰ひたい。

何のかのとの惡い沙汰、口々言うて通りけり。吾妻ふつと耳に立て、

太郎樣、今のはどうぞいの、いやな沙汰でござんす。

と、氣遣ひがれば、供の下女・駕籠の者まで色達へ、辨當持もく(5)ひさげちう、喉に詰まりし餡餅の、案(6)に相違の顏付なり。井筒屋も氣にかゝれど、氣落させじと、

これ〳〵、粹のやうにもない、あれは人の法界悋氣(7)。太夫樣を見知つて、氣遣ひかけて面白がるそねみで皆いふ事。ぎえん(1)直しに酒にせう。毛氈敷け。

と勇んで見ても、どこやらさま(2)があき樽の、底の心は澄まざりけり。

吾あれ〳〵、あそこへ泣き〳〵走つて來る人は、勝二郎樣のお草履取、佐五介ではないかいの。

と言ふ所へ、佐五介、息も切れ〴〵、

吾さてこそ噂に違ひはない。ちやつと樣子を話してたも。泣いて居なう太夫樣、ひよんな事が出來ました。私やなんと致しませう。

と、泣いて詞も無かりけり。

佐事の起りは皆惣兵衞め、旦那をいとしいいとしいとぬかいたは、おのれが慾。お金には御一門の封がついて自由にならず。結構な茶入・懸字(4)、お家の寶黃金の鷄まで、京で質に置くとて、「なんとや

(1)緣起の惡語。

(2)狹間。隙間。隙間があくをあき樽にいひかけた。樽、底、澄む皆緣語

(3)變な事。思ひがけぬ事。

(4)掛畫に對していふ。轉じて一般に掛物の事。

(1)文書の文言の右に署した書き判。
(2)誰が取つたやら分らぬの意で、よむとは金を數へる事。元來よみ人知らずは和歌で作者の知れない事をいふので公家に緣がある。
(3)朝廷方。
(4)惡事をする同類。すりは掏摸の意
(5)京都の刑場。
(6)斬罪に處した者の首を、獄屋の門の邊の木の上又は刑場の木柵の上に晒すこと。
(7)目的地。行き著くべき先。ござるは行く意。
(8)すべ。手段。方法。

ら申す、位高いお公家様の姫君を、勝二郎が嫁に呼ぶ其の物入」との言ひ立て。そのお公家様のお(1)袖判を僞判し、金の取手はよみ人知らず、大内方より御詮索、科人は惣兵衛一味のあひずり十人あまり粟田口にて獄門にかゝる筈。手代のわざとは言ひながら、名ざす所は勝二郎、「存せぬ」とは言譯立たず、金銀・財寶・山・田畠、京・大阪方々の家屋敷まで取上げられ、著のまゝでの御追放。どこをしやうどにござらうぞ。腹の内から今日まで、荒い風にも當らぬお身、さぞや途方があるまいと、思へばいとしう存じます。

と語れば、一度に手を打つて、悶れ果てたるその中に、吾妻一人の物思ひ、

とかく私が不仕合せの、

と、餘の事いはず泣き居たり。

井筒屋も溜息つき、

お笑止とも氣の毒とも、言うた許りでせうやうなし。太夫樣はまづ

(1)勝二郎から受取るべき吾妻の前借金の殘金。
(2)石清水八幡宮の神事。
(3)談判。つめ開き。相談。打合せ。
(4)茨木屋と證文をした上で、吾妻を引受けて、八幡にお供したのであるが。

(5)情ない。

(6)置屋又はその主人。
(7)譯が立つとは、埒があく。他人の非難のないやうに筋道が立つ。

お歸りなされませ。殘金二百兩(1)、八幡の馬(2)おりに請取る筈。惣兵衛とつういくつ致し、茨木屋をば私請合ひ、手形(3)の上で今日お供仕り、かやうのお難儀出來の所、うか〳〵八幡へ參つても、二百兩の金子、誰から請取り申さんやら、お笑止ながら、太夫樣を茨木屋へ渡しませねば、我等が手形消えませず。世間にばつと知らぬうち、早うお歸りなされば、私が爲と申し、太夫樣もお首尾よし。さあお歸り。

と言ひければ、吾妻わつと泣出し、顏をもあげず居たりしが、

むげない言ひぶんして下(5)が首尾がよい」とは、さうした吾妻ぢやないわいな。かはいゝ男の流浪したのを聞きながら、身の首尾を思ふやうな傾城ぢやと思うて下んすは、曲がない情ない、忘八(6)の譯(7)が立たぬとて、再び曲輪へ立返り、身の恥はさて置いて、勝二郎樣の恥辱は、これが何とすゝがれう。こなさんの請合は、わたしが命ある限り、微塵も難儀はかけますまい。新町ばかりが傾城町でもあらばこそ。京の島原・奈良・伏見、

茶屋・風呂屋[1]へも身を賣つて、見事に譯は立てませう。世に落ちようがどうしようが、勝二郎樣の女房になる程の吾妻ぢや。じめんづ[2]くに頼むからは、雫[3]もこれに僞ない。再び新町の勤をのがれ、勝二郎樣の一分立てて下さんせ。これ手を合せて頼みまする。ほんにほんに此のよな事、降り[4]湧かうとは夢にも知らず、伊勢兩宮へ太々神[5]樂、愛宕・清水・住吉樣へ金燈籠、八幡樣へ萬燈[6]、その外神々宮々へ、鳥居立てての何のとて、金のいる事厭はずに、神佛への約束も、今では違へる身となり果て、人間[7]どしの遠契約は、騙りのやうにも思はんしよ。それが悲しうござんす。

と、歎きわびたる口說きごと、眞實見えて哀なり。揚屋も流石たゞ者ならず。

太よい〳〵、二言と御意[8]なされな。義理づめになつて來た。茨木屋の手前は、此の太郎が請取[9]つた。手形一枚なされいでも、今の涙を手形にして、お前を爰で手放します。お身をどこぞへ片づけて、二

(1)湯女風呂の事。風呂屋には湯女が居つて密淫賣をした。その女を風呂屋者、湯女、猿、呂州などいうた。
(2)直接に應對する事。
(3)微塵も。少しも。
(4)降つて湧くと同じく、物事が突然に思ひけなかく起る事。
(5)伊勢の太神宮で行ふ神樂。
(6)多くの燈明。
(7)人間を相手の遠い將來の契約はあてにならなくて、神樣は人間を。
(8)おつしやるな。
(9)引受けた。請合うた。

百兩[1]お立てなされませ。契約おちがへなされても、此のはうからは尋ねませぬ。勿論催促仕らぬ。これから互の心底づく。

と、切れ[1]放れたる詞の末、

吾 それは定か、ありがたい。胸がちつとは開けた。

と、伏拜みてぞ泣き居たる。

時に向ふの堤の上、大勢人のわめく音。追放人の作法とて、八幡公文[3]所の役人數多、てんでに割竹大地を叩き、勝二郎を先に立て、兩手を引張り、聲をかけて追拂ふは、いま〳〵しくも三重凄まじし。憂き事知らぬ若子[4]樣の、氣を奪はれ性根を取られ、起きつころんづ足立たず。橋本の宿はづれ、三國[5]境の板橋にこそ著きにけれ。荒けなき聲々にて、

役人 さあ此處よりおつぱなす。京・大阪・淀・伏見、境をそへて住居叶はず。背くに於ては見あひ次第討[6]捨て。いづ方へもうせ居れ。

と、口々罵り歸りしは、硫黃が島に捨てられし、俊寛[7]僧都もかくやらん。往き來の人も目をあいて、泣かずに通る人もなし。役人歸れば駈

(1)辨償する。
(2)利慾の念を離れる。
(3)裁判所。
(4)若樣に同じ。
(5)雍州府志「三國橋、在洞峠麓西南、是則山城河内攝津之境界也」。
(6)斬捨てる事。
(7)平家物語にある法勝寺の執行。

けつけて、

吾　これ、私ぢや、吾妻ぢや。不慮な難儀が出來ました。さりながら大事ない。命が寶、袖乞・非人の身となつても、二人一緒に居る上は、堪能(たんのう)ではあるまいか。忘八(くつわ)への出入(でいり)も、爰なお人の男氣故、御苦勞かけずに埒明く筈。樣子は靜に物語り。悲しむ事もなんにもない。けく(5)で浮世が面白い。

と、笑うて見せて力をつけ、涙を隱せば、顏をあげ、

勝　委しい樣子は聞かねども、太夫が殘金埒あくことは、井筒屋殿の親切、なまなか禮は申さぬ。ゑゝ面目ない、此の勝二郎は下人の罰が當つた。大賢人の新七が、意見を用ひず勘當し、身の仇となる惣兵衞めにばかされ、新町橋で、新七を足にかけて踏んだる罰、忽ち當つて此仕合せ。身の先行(ゆくさき)のする事は、今生で思ひ切つたぞ。先の事は知らねども、まづは此の世の暇乞と、思うて損のいかぬ事。いづれもさらば。

と立出づる。井筒屋袖を引きとめて、

いづ方へお出なさるゝにも、當分の御入用、路銀の餘り、少分ながら御懷中。

と差出す。手をつけ一寸戴いて、

勝　志は千萬兩、金子は申し受けまい。親・祖父(おほぢ)の貯へを、冥加も知らず遣ひ捨て、金の罰が當つて金銀に疎まれ、手ぶり(1)になつたる我なれば、此の度屹度身を懲らし、一錢得難しといふ事を、我が魂に思ひ知らせ、貧苦の修行の稽古の爲、金銀とては貰ふまじ。さりながら、服部煙草(2)・煙草入、煙管の餘計あるならば、一本所望申したし。

太　あゝお安い事〳〵。煙管のらう(3)は細くとも、お心を太うして、心中など遊ばすな。

勝　いやるがくどい(4)。不足なうて死ぬることこそ、ほんの誠の心中なれ。金に詰つて心中する勝二郎でない證據、藥も少々貰ひたい。

(1)諺。
(2)神乞などと同じく、窮民、乞食の稱。
(3)滿足。十分。
(4)悶着、葛藤の意であるが、こゝは金錢の差引勘定。
(5)結局。却つて。いつそ。むしろ。
(6)將來の繁榮幸福。

(1)手ぶらに同じ。空手。
(2)大阪の北郊服部村から出る。
(3)最初ラオ國から舶來した竹を用ひたからの名。
(4)云ふのがくどい。云ふに及ばぬ。

(1)花色は縹(花田)色に同じ。薄い藍色。
(2)前さげに同じ。巾著の上に紐通しを附け、帯革といふのをつけて前腰へさげる腰さげ。
(3)腰帯　しごき。
(4)松の落葉五、五尺手拭「五尺いよこの手ぬぐひ、五尺手ぬぐひ中染めて、おれにいよこの臭りより、おれにくりより宿におけ云々」。
(5)加賀笠に同じ。加賀の國から産する。
(6)松の落葉四、菅笠頭「あづまから来る菅笠嬉し。おれが目あての菅笠嬉し。ほんに嬉し。お供に取つ付く伊達助が、よちらす〳〵、やれこりやよちらす、どつこいよちらす〳〵腰をよちらす紅葉笠、まん丸こうて著ようて、様が菅笠百萬貫」、様は對句又は他稱に用ひる代名詞。
(7)供する奴は、手を振り腰をよちらして歩いた。　(8)物日で、五節句などの祝日をいふ。(9)山崎にある寶寺
(10)鐘の聲に「来う〳〵」をかける。
(11)ござれに御座船。御座船は檳榔の事。　(12)八幡のやに矢をかけて、弓、弦と絲詰を出す。

太げにこれは御尤、懐中至寶の一包。藥屋は命堅い石見の椽。
と祝ひければ、遣手の杉が、太夫様へ花色繻子の前巾着、人參入れてお餞別。仲居の初は延紙二折、
一寸假寢もあるもの。
と、あぢな所へ氣をつくる。駕籠の乘の仲間から三尺手拭、抱帶として進上す。これはかの、「五尺いよこの手拭」と、歌に謡ひし手拭か。これは又加賀菅笠、締緒あらくと召しませとよ。げにも誠の志、「さまが土産の菅笠」と、踊に踊りし笠よなう。それは吾妻の花嫁子、これは吾妻が身請の果、腰をよちらす供もなき、紋日の夜床引換へて、かぶろもつかぬ草蒲團。夜見世の太鼓音絶えて、山崎寺の鐘の聲、はやこう〳〵と響けども、我が迎ひにはいつ來うぞ。
お二人まめで仲ようて、隨分無事で御座舟で、迎ひに參る男山、八幡の弓の弦切れず、たよりを待つぞ。
勝　待たるゝぞ。

(1)松の落葉六、淀川所作「春の夜の夢驚かすくだかけの、そのきぬ〳〵の物思ひ、又逢ふ事もいつかはと、深き心にかこち草、根引にせんといひかはす、身は捨て草の捨てられて流れしこの身は淀川の、河を便りに浮草の、波によらるるうたかたの、逢はぬは君がなさけなや、峽ましやそれは若草身を恨みぐさ、何のそなたに飽いたではなし、飽きも飽かれもせぬ中なれど、請出す金の蔓に離れて、描き我が身、せめて哀と思へかし。迄り返しさみしや閨の、今は枕に香ばかり殘る憂き思ひ、なほ怨めしき鐘の聲、下行く水の思ひ川、底の心を白糸の、亂れて物を思へとや。鳥が歌へば、もう往のとおしやるさのえ、月夜鴉はさ、いつも啼くよ。しようがえ、もう往のとおしやるさのえ、月夜鴉はさ、いつも啼くよしようがえ、暫しとまりて吳れよかし」。
(2)鶏。　(3)長く垂れた尾。　(4)かこちくどく種。　(5)根のまゝ引抜く事又太夫を松といふから、身請けする事をもいふ。　(6)山城國葛野郡。
(7)よしきり。仰々子。　(8)淀川の内八幡と山崎との間は河道が變遷するから狐川といふた。夫木集に「爲家」とにかくに人の心の狐川かけあらはれん時をこそ待て」。

さらば〳〵。
と、泣く聲ばかり耳に殘りて、面影は雲に消えけり。

あづま
勝　二郎　**初もめん**

春の夜の夢驚かすくだかけの、其のしだり尾のむすぼほれ、とくる思はいつかはと、言はで心にかこち草、根引にせんと言ひかはす、身は捨草の捨てもせで、浮名は流れの淀河や、何を賴りに水鳥の、波に搖らるゝ世の習ひ、疎きは人の情なり。廣き世界は廣けれど、京や浪花の住居さへ、せきとめられし水車、月の影さへくる〳〵と、彼方此方に汲分けられて、行けば丹波路戻れば大和、行くも戻るも二人連、女夫鳥のとぼ〳〵と、昨日の閒の花紅葉、今朝ふる霜に朽ちそめて、身をこがらしの森の下道。憂きしほ踏むもあぢきなき、馴れし故郷の草も木も、今の名殘をとゞめかね、待て〳〵と鳴く吉原雀、よしみ〳〵の言の葉に、ばかされ渡る狐河、仇に暮せし年月の、榮華は夢の盃の、

(1)讃に命が寳。(2)遊里。(3)枚方の西南に出口といふ所があるから、その地名を大門の出口にかけた。(4)古今序「男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくねるにも、猶をいひてぞ慰める」。同四秋上布留今道「女郎花憂しと見つつぞ行きすぐる男山にし立てりと思へば」。男山は勝二郎、女郎花は吾妻をさす。(5)八幡のやに矢。引返すも弓の緣。(6)「影見えて」まで諸曲組政の句。名にも似ずは朝日山から月が出るかういふ。朝日山は宇治川の東にあつて紅葉の名所。山吹の瀬は宇治川の内の名所。此の地に樵大臣の別荘のあつた時、川岸に山吹を多く植ゑたから名づくと。(7)光源氏。源氏物語の主人公。(8)夢の浮橋、夕顔、匂(宮)、浮舟、蜻蛉、紅梅、竹川、橋姫、手習、東屋何れも源氏物語の巻の名。(9)源氏五十四帖を天台止觀六十巻に擬へて六十帖ともいふ。(10)橋姫巻以下の宇治十帖。(11)路傍に生ずる芝草。(12)知らずをかける松の葉二、さらし「槇の島には晒す麻ぬの、腰がしわざは宇治川の、波か雪かと白妙に、いざ立ち出でて布さらそ云々」。(13)宇治橋の西北にあつた島。(14)濱千鳥。(15)無と泣。(16)山城國宇治郡。(17)千載集冬權中納言定賴「朝ぼらけ宇治の川霧たえ〴〵にあらはれ渡る瀨々の網代木」。網代木は網代に立てる木。網代は川瀨に網を引く形に竹や木を編み列ね、そのはてに簀を當てて魚を捕ふるもの。

醉醒枕、それは若草身を恨草。なんのそなたに飽いたではなし。飽きもせぬ中の、戀と命が寳寺。昔の里の寢覺には、伽羅で暖む床の內、起き分れ行く曉の、袖から袖に手を入れて、出口の風の寒からす。今の憂き身の旅寢には、じつと寄せたる肌と肌　吹きわけて吹く山嵐。籠に立てる女郎花、恪氣辛氣となまめきて、くねる心の男山、いとし男を古への、世に引返せ弓八幡の神に暇と伏拜み、東を見れば名にも似ず、月こそ出づれ朝日山。山吹の瀨に影見えて、渡つた〳〵光る君の渡つた、夢の浮橋六十帖を渡り詰め十帖と詠じた。一に一夜のお情の夕顔の若ばえ。二に匂焚きしめて浮舟にかげろふ。紅海・竹川・橋姫に手習、我が名ゆかしき東屋で、これ樣の忍び寢。世も忍ぶ人目も忍ぶ道芝に、鶯籠借るすべも白砂の、晒はすてふ槇の島。はんき千鳥も友を呼ぶ。我は伴なふ人とても、なき顏隱せ笠取山。隱すとすれど心なや。宇治の川霧たえ〴〵に、現れ渡る網代木の、河瀨の水

(1)濡れる。(2)見と水。(3)乾せもず。(4)いろはの句。(5)山城國宇治郡。(6)始めてを初名月にいひかけた。初名月は八月十五日の夜、月。芋名月ともいふから一口につゞけた。(7)山城國久世郡。淀の東。(8)田んぼ道。畔道。(9)長いを地名にいひつゞけてある。長池は山城國久世郡。大和街道の宿名。(10)高座坂とも拷問坂ともいふ。水津村の市坂から奈良に接する坂。(11)大和國添上郡。遊里である。(12)三十三番の札所の緣。(13)遊女九重の名をいひ出す爲におく序。詞花集春「古への奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな」。(14)もと佛教から出た語で、轉じて臣下又は門弟の內で、武勇才藝等の優れたもの四人の稱となる。源賴光には渡邊綱、坂田公時、薄井定光、卜部季武の四天王があつた。

に袖ひぢて、互に影をみづ鏡。

吾やつれさんしたぞ。

勝やつれたぞ。

唄離れ〴〵のあの雲見れば、〳〵、明日の別が思はるる。つらき我が身はいろはの文字よ、〳〵。袖に涙のゑひもせず。木の葉散りぬる木幡の里、徒歩でこれ程行〳〵事も、はつ名月や一口、堤づたひの長繩手、續く里々山々も、皆近づきの山なれど、今日の憂き身は心から、さぞ見ぬ顏ど袖覆ひ、袂を覆ひ笠覆ひ、空を覆へば冬の日の、いとゞ短くは や暮れて、夜は長池の水の泡、水の淀みに我もとて、淀みやすらひ明かさるる。

下之巻

奈良坂や木辻も戀の札所にて、女郎屋・揚屋三十三軒、昔の京の八重櫻、九重・薰・小紫・小藤を爰の四天王、續く勢こそ無かりけれ。哀

や吾妻は義理合の、金の契約もだされず、此の里一番名の高き、山城屋といふ忘八へ、中年[1]四年二百兩、命[2]がらりに身を賣りて、大阪の埒はあいたれど、又傾城とならざらし[3]、竪横[4]沙汰を聞きふれて、戀の大和[5]の色好み、吉野[6]の花も振捨つる、三輪[7]の索麵くひついて、買ふ人餘れど賣る日は足らず。うちにも龍田の藤といふ、しなだれ[8]男纒ひつき、揚屋も諸譯[9]吉田屋の、仁三郎を定宿にて、二階を一間あてがはれ、命ありたけ首尾ありたけ、金ありたけと勤むれば、四天王の名取をも、今の吾妻が下に見て、獨武者[10]とぞ流行りける。藤も在所に稀男、吾妻に深く染附[11]の、龍田や沖津[12]白波の、太鼓も連れず今日もまた、通ひ木辻[13]の吉田屋の、

藤　仁三内にか。やあ妓様たち歴々のお寄合ひ。おてき[14]様の待合、我等が座敷へもちと貸[15]して下されかし。

といへば、薫・小紫、

珍しい、藤様の、外の女郎を借らんすか。男の心の一筋に、わきへ

二度の勤の場合をいふ。
(2)一命をすべて捧げる事。
(3)爲ると奈良晒。
(4)いろ〳〵の評判を聞きつけて。奈良晒から竪横とつゞけたので、竪横はかれこれの意。
(5)山と大和。戀の山は戀の積つたのを山にたとへていふ。
(6)花より團子の類。
(7)大和國磯城郡。索麵と酒が名物。
(8)しなだるも纒ふも皆藤の緣。
(9)諸譯よしを吉田屋にいひかく。諸譯よしは色の道を解し、譯がわかつて粋な事。
(10)四天王に對して、源頼光の臣藤原保昌を獨武者といふた。
(11)龍田は紅葉の名所であるから、染付の龍田と續けた。染付は深く思ふ事。
(12)伊勢物語「風吹けば沖つ白波龍田山夜半にや君が一人越ゆらむ」。沖つ白波の立つを太鼓のたにいひかけてある。(13)來と木。(14)相手。相方。即ち客とその相手の遊女とを双方から互におてきといふ。(15)遊女の見立てをする場合に、遊女からは貸すといひ客からは借るといふ。

ふれぬは、そばから見ても憎うないものなれど、こなさんと吾妻様とは、あんまりで小腹が立つ。辛氣[1]の湧く程羨しい。見ぬがましぢや。戀のめん[2]〳〵稼ぎぢや。

と、ばら〳〵立つてぞ入りにける。仁三郎いそがしげに、しよこ〳〵と立出で、

やあ藤様、いつから爰に御鎭座[3]。手でもお叩きなされいで、夢にもしらがの[4]母者人、藤様のお出ぢや。吾妻様の御氣色も、今日はお快ささうな。申し、醫者の名もぎえんのもの。始は西の京の道偏と申す醫者の藥で、どうへん[5]にあつた所を、昨日から三條の元喜と申す醫者で、めつきり元氣が見えした。御祈禱を本服院息災法印を頼みませう。銚子々々。

と手を叩く。

藤　これは〳〵、吾妻が氣色よいとは、あたま[6]でよい事聞きそめた。さりながらあの病氣は、かの江戸屋勝二郎が昔を忘れぬ物思。根引

(1)じれつたくなる。業が煮える。
(2)諺に「色事は銘々稼ぎ」。即ち戀はしがちの意。
(3)大盡を大神に見立てていふ。
(4)知うずと白髮。
(5)どうもへんに通はす。
(6)最初。

にこつちへ取つたれば　氣が變つて達者になる。そこには氣遣ない事。これについても一刻も早う請出したい。四年の年を三年遣ひ、今一年の所を、元金の二百兩で請出さうといふからは、親方も不足ない所。ええ、親子の衆がぶせいなよそへ取られて此の藤が一分立たず、死なねばならず。今日は金を突きつけて、是非とも詫びて貰ふ思案。耳を揃へて懐中した。これ袖口から手を手れて、嘘か誠か、これ見や。

仁ごれ〳〵、ほう〳〵〳〵、可愛らしい小判女郎。これはきつい詮索。さて油斷とお恨みなさるれど、前髪もある私が親ほどの山城屋、算用だても申しにくし。母妙慶をやりまして、割つつ碎いつつはせて、さらりつと埒をあけ、只今お知らせ申さん。

藤と、硯引寄せ墨をすり、鹿の卷筆妻戀鹿、鹿は春日の藤様め、果報者め、金持め、あやかり者めと騒ぎける。

藤それは大慶、まづ吾妻に逢ひたい。呼んでたも。どこにぞ。

(1)置屋の主人。こゝは山城屋。
(2)吉田屋の仁三親子。
(3)ぶしやうに同じ。精を出さぬ事。
(4)ぶせいを仁三から。
(5)金などの全額を整へる事。
(6)女郎ではない。遊里であるから小判を女にたとへたまで。
(7)お華ね。爺めだて。
(8)ぶせいの事。
(9)道理を納得のいくやうに說明する事。
(10)鹿の毛で拵へた筆。奈良の名物。
(11)仕合せのよいものに似て、自分も幸福を得ること。

仁いつもの二階にござります。これ林之介、吾妻様呼びましや。吾妻様、太夫様、林之介。

と、呼ばつても返事もせず。

仁これはどうちや。又例の勝二郎といふ淀鯉を、思ひ出して泣いてかな。鯉がついて居るさうな。鯉なら煎餅蒔いて見よ。いや手拍子を打つて見よ。

心得、たん〳〵たんと手を打てば、心浮かねど身の勤、悲しい顏を見せまいと、わざとにこ〳〵わさ〳〵と、二階の口に立つを見て、

そりやこそ鯉が現れた。盃をさしみにせう。爰へちよくと御いり酒、うまい事ぢや。

とわめきける。吾妻二階に腰かけて、

これ仁三樣、たんと口があがつたの。あんまり鯉々いはんすな。鯉も瀧へのぼりつめ、今ではどうもおりはがない。惣じて鯉といはんす

(1)秀の名。
(2)淀川に産する鯉。
(3)心得たのたを、手拍子の音たんたんにいひかけた。
(4)わつさりに同じく、浮き〳〵と陽氣に爽かに。
(5)差すと刺身。
(6)猪口と一寸。
(7)お入と熬酒。熬酒は酒に醬油鰹節などを加へて煎じつめたもの。刺身や膾などの味つけに用ひる。
(8)わる口が上手になる。
(9)下りる攻合。

(1)八幡は牛蒡の名産地。
(2)牛蒡は人參や山の芋などと同樣、男の精力を增すから。
(3)構ふものか。
(4)萬歲歌「そばのたな見たりや、豆に小豆、大根かぶら、加賀のごんぼ毛ごんぼ、からしの粉山椒の粉」。
(5)遊女を根引にする事を引拔くといふからいひかけかのである。
(6)座を取持つて座興を添へる。
(4)遊里。
(8)仁三の母へ。

は、勝二郎樣ゆゑかいな。あのさんは八幡の人、八幡に鯉はあるまいが、合點がいかぬ。

と云ひければ、

仁それならば今日よりごんぼ[1]樣と申さうか。妓[2]樣にごんぼはいかゞ。やあそれも大事[3]か。加賀[4]のごんぼといふ事あり。そんならいつそう毛ごんぼ樣、追つつけ旦那の引[5]拔きごんぼ、目出たいごんぼ。

と座[6]を持てば、

吾えゝ、憎い口や、敲きごんぼにしたいぞ。

と、二階おりるも勇まねど、うはべばかりの笑ひ顏、云うて泣くよりなほつらし。藤もいよ〳〵機嫌よく、

今日は嬉しい事ぞろひ。第一そなたの氣色もよし。仁三親子の働きで、身請の埒があいたぞ。懷中した金子を里[7]に殘いて、そなたの身と兩替して、一兩日に吉日きはめ、龍田へお供仕る。さあ〳〵二階で酒々。吾妻はこれ[8]のお袋へ、よう禮云うてあとからおじや。仁三

(1)心の顚倒する程驚き惘れる事。當惑する事。
(2)いひたいがままの。
(3)女から。
(4)藤樣がまさか實際身請はしまいと思うて。
(5)身請を。
(6)藤樣。
(7)ぎよつとする。はつとする。甚しく驚く。
(8)藤樣が承知しない時は。

こつちへ。

と手を引いて、奥の二階へあがりける。吾妻はつとけ[1]でんして、

夢見たやうな事どもやな。根引にするの請出すのと、取[2]靜めもない僭上は、十人が十人で思[3]はれたさにいふ事。どこで帶さへ解かぬ身に、よもや[4]と思ひ、「頼[5]みまする」と僞りしを先[6]は正直、喜んで、はや談合がきはまつたか。さても胸[7]をついた事、誰にどうと談合せん。勝樣からは便宜もなし。さあ今でも出るといふ時には、泣き口說いても叶ふまい。そのきはにならぬ先、とんと打ちあけ云うたらば、義理詰につめられて、思ひ切らるる事もある。

と、梯子半分あがりしが、

いや〳〵、ひよつと云ひ出し、先に飮込[8]みない時は、勝二郎樣のお爲まで、取返しのならぬ事。あゝ云ふもいやなり言はねばわるし。罪深い事ながら、今の間にあのお人の身に妨げも出來よかし。此の病がつのれかし。今夜の夜(よる)が常闇と、明けずにあつて呉れよかし。身

請の時がのばしたい。

と、咎なき天に難をつけ、歎き恨むる世のつらさ。我が身ながらも淺ましやと、いんと伏して泣沈む、涙も梯子を傳ひけり。

(1)逼ふ心や格子前、耳にこたゆる謠の聲。

(2)一度は榮え一度は衰ふることわりの、誠なりける世の習ひ。住みどころ求むとて、吾妻の方に吾妻の方に、吾妻々々。

と、謠ひ忘れた顔つきで、我が名を呼ぶは知つた聲と、行燈の影から表を見れば、戀しゆかしの勝二郎。飛立つやうに懷しさ。表には人目あり、それから廻つてかう〳〵と、指で教へて招かれて、小暗がりをばそつと扱け、つつと通れば縋りつき、

吾なう、よう來て下んした。逢ひたうてならなんだ。

と、しつかと抱締め泣き居たり。(3)よい衆の果の流石にて、貧苦を貧苦と思はばこそ。

勝此のなりを見てたも。思へば〳〵(4)不算用。そなたの身を賣らする程ならば、三百兩もし(1)てやつて、(2)賣りへぎの百兩も手に持つたがよい筈。(3)大阪の親方へ二百兩渡さねば、井筒屋の太郎左衞門と、約束の義理が外るるとて、(4)差も引もなう、きつと堅う二百兩に賣らさいでもだんない事。此の鈍さから此のつら。何にも得はなけれども、(5)坂田藤十郎が(6)夕霧を、(7)ま一度見たいと思うたが、此の紙子で(8)手夕霧を仕る。(9)セリフ(10)太夫又逢ひに來たわいの。さあそなたも爰で泣きや。

と云へば、

吾あゝ泣く分は夕霧に負けはせまい。

と泣きければ、男も心しほ〳〵と、可愛や可愛や、物眞似に、誠の涙を紛らかす。奥二階より手を叩き、

仁かぶろ衆、吾妻樣呼びましや。

吾妻樣々々々。

と呼ぶ聲す。

吾それ人が來る、あゝ辛氣、どこへがな。これ〳〵炬燵へ隱れさん

(1)吾妻の思ふ心が勝二郎に通じたのか。逼ふのかと格子のかと頭韻を合せる。

(2)謠曲杜若の文句。「身のゆく〳〵」とある。一度は云々は、一榮一落是春秋の意。住みどころ求むは榮華の事で伊勢物語にある句。

(3)身分のよい人。お金持。

(4)利害損得の念に乏しい事。

(1)たくらみを成就する。一杯くはす。

(2)他人の物を賣つて、その代價の幾分を私する事。

(3)大阪の茶木屋。

(4)增減なく。

(5)大事ない。構はぬ。

(6)元祿時代の名優。濡れ事に長じ、特に傾城買に扮して名のあつた人。

(7)「夕霧名殘の正月」を大阪の芝木與次兵衞座で演じた。

(8)白い強い紙を繼ぎ合せて、柿澁を塗つて日に乾かす數回、色が赤くなつた後、晴天の夜に露干しにして、雨手で揉み柔らげて衣服とした物。

(9)手芝居で夕霧を演ずること。

(10)「太夫又逢ひに來たわいの」の一句は夕霧阿波鳴渡の相の山の中にもある伊左衞門の臺詞。

せ。

と、蒲團をあぐれば、勝二郎、

此の夏、爰の芝居へ竹本(1)が弟子が下つて、重井筒を語つた。さあこれから夕霧代つて重井筒火燵の段。セリフ(2)「北濱邊のよい衆は、火燵に水を入れまする」。紙子一枚の我等はとてもの事に、火あぶりになりたい。

と、蒲團取つて引つかぶる。仁三郎二階より障子をあけて、

申し〳〵吾妻様、只今暦を詮索すれば、明日は天赦(3)鬼宿日、萬事揃うた大吉日。銀はお身につけてなり、なに不足ない上は、善は急げ、明日の朝、目出度う曲輪を出します筈。その用意なされませ。飲まうぞ〳〵、大きな物で飲んでくれう。

と、障子引立て入りにけり。火燵よりむくむく起き、

勝今のは何ぞ。曲輪を出すとは善か惡か、氣遣な。聞きたい。

と氣をせけば、

(1)竹本義太夫。

(2)重井筒中之卷「北脇邊のよい衆は大方火燵に水を入れるげにござる」。

(3)天赦日で鬼宿日に當る日。天赦日とは一年中の最上の吉日で、春は戊寅、夏は甲午、秋は戊申、冬は甲子の日。鬼宿日は鬼宿に當つて、その星の守護するといふ日で、婚禮の外は何事にも吉日。

(4)謎。

さあされば、それ故胸を痛める事。先度の文にも云ふ通り、龍田の藤が事いの。作病(つくびやう)おこしつ振つて見つ、色々飽かるる工面(くめん)して、のくやうに仕かけても、煩惱(1)の犬かして、爰の妙慶挨拶(2)にて、請出す談合きはまると、聞くから胸が騷ぎ出し、今に心が落着かぬ。どうしたものであらうやら、最早智慧(3)にも能はぬ。

と、泣くばかりこそ力なれ。勝二郎も泣出し、

さても〳〵、惡い事も續けば續くものかな。五年以前に在所を出で、無量のつらさに逢うたれども、諦めつ慰めつ、心で埒をあけたるが、命かけたそなたを、人の物になす悲しさ。二百兩といふ大敵には、弓鐵砲も叶はぬ。

と、齒をくひしばり嘆きしが、

とかう云ふ間に夜が更くる。もう分別はない所。そなたも死にや、おれも死なう。

と、若い同志は氣(1)を嗜み、死を先立てて涙を隱す、歎きの色こそ哀な

(1)諺に「煩惱の犬は追へども去らず」又「煩惱は家の犬、打てども去らず」とある。

(2)周旋。仲裁。

(3)よい智惠でも施すべき方法がないよい思案もない。

(4)わるびれない。

れ。吾妻死に身と胴(1)を据ゑ、

これ申し勝二郎様、死ぬる覺悟にきはまらば、死なずにのがるる思案あり。こなさんはまづお歸り、内を仕舞うて、夜中すぎ八つ(2)の時分に又ござんせ。金調へて置きませう。其の金持つて丹波へのき、來年私が年前(3)に迎ひに來て下さんせ。心安うて出らるゝ事。早ういんでござんせ。

と呼けば、勝二郎、

それは至極(4)の才覺。その金は借るか貰ふか、どこから出る。

吾はてそれは構はんすな。わるいやうにはしませぬ。早う往んでござんせ。

と、せがめば頷き悦んで、

勝これぞほんの丹波越え。

と、不道化(5)(6)云うて忍び出る、氣の愚さも育柄(そだちがら)、憂き事知らぬ證(とが)かや。

吾妻はほんの出來心。ふつと云うたは云うたれど、これからが大事の

(1)覺悟する。
(2)丑の刻即ち午前二時。
(3)年季があく前。
(4)非常によい工夫。
(5)逐電。亡命。江戸時代の欠落。京の人は多く丹波に逃げたからいふ。
(6)いふべからざる時にいふおどけ。

思案。炬燵の櫓を談合柱。おなかの寄へ(1)だく〳〵と、胸に踊るをさすりさげ、

二階の客を刺殺せば、明日の難儀をのがるる德。金を取れば、勝二郎樣のお爲になる、これが德。これ程よい事あるものか。足もとによい思案、こけてあるのが見えなんだ。殺してのけう。

と思ひ立つ、目の前ばかり背中(2)を知らぬ女の智慧こそ果敢なけれ。夜は何時ぞ、臺所は夜中を告ぐる鼠もあり。更けゆくまゝにこはげだち、膝の慄ふを踏締め〳〵、梯子の口から覗いて見れば、客はゑうて前後も知らず。仁三郎がうはき(3)酒、いき倒れては性根つかず。

吾さあしすまいた。

梯子三つ四つ上(つぶ)つて見て、

やあ、こりや何で殺さう、刃物がない。帶を解いて締殺さうか。いやゆるりとする間はあるまい。煙草でふすべ殺さうか。ゑうて先へこちが死なう。何としてよからうぞ。鋏でも剃刀でも、金物がな。

(1)湧き返るさま。
(2)諺に「背中に目はない」。
(3)浮かれて飲む酒。
(4)成就した。しおほせた。なしとげた。

と、座敷中を差足し、うろ〳〵うろ〳〵尋ね廻り、

吾や、思ひついたぞ、火熾の火箸、火に焼いて喉笛を通さば、刀も同然。

と、蒲團をあげて手を入れ、

あつや〳〵。

と懐の、袱紗に持ち添へ、(1)陸奥の唐紅の錦木や、枝珊瑚樹と焼けつけたり。

嬉しや、さめぬ間に。

と、立上らんとする所へ、仁三郎が母妙慶、

吾妻様、まだ起きてか。

と、にいろ〳〵来れば肝潰し、袖の蔭に押しかくし、

吾はあ、かみ様か。わたしもはや休みまする。冷めぬ間にこな様も、目のさめぬ間に暖かに、熱うして寝やしやんせ。

と。うろたへ挨拶あとさきなり。妙慶更に氣もつかず、

お前は果報な妓様や。曲輪で繁昌しつめて、間もなう根引の松(3)。千年も萬年も藤様との御中さめぬやうに遊ばせ。其のいとしらしいお氣立では、さめまい〳〵。明日お目にかゝりませう。

と、時儀をのべて立歸れば、火箸は氷となりてけり。

吾えゝ、いはれぬ長口上、焼直さん。

と、蒲團をあげても、火熾もつめたし。

えい、阿呆らしい、なんぼさめぬと云やつても、炭火までさめ切つた。

と、吹いつあふいつ氣をせく所に、二階より仁三郎、酔ざめの長あくび、客の脇指持ちながら、目をすり〳〵梯子をおり、

やあ吾妻様愛にか、さてゐひました。

と下(した)にゐる。吾妻脇指に心づき、

それは藤様の腰の物。こなさんもまづ氣(4)の通らぬ。客の刀物預るとは、渡りなみの客の事。藤様とは女夫になり、明日請出さるる今宵

(1)錦木は陸奥國希婦の里の名物。

(2)役に立たぬ。

(3)無粋な。

(4)世間普通。通り一遍。

となり、心中はせまいし、そのまゝ置いていかんせ。

と、云へどもふら〳〵居眠りながら、

仁はて、一夜でもお客のうちは、弓矢の禮儀はづされぬ。

と云ふ中に、脇指の柄(つか)を膝(1)におさへて、

吾いかう更けたに、やすまんせ。

と、云へども柄には氣もつかず。

仁明日御見(3)(ごけん)なりませう。鹽茶(4)を飲んで寢てくれう。

と、脇差の鐺(5)(こじり)を持つて立つ程に、柄は殘れど下は見ず、目はそら鞘(6)をぶらさげて、ぶらぶら勝手へ入りにける。

吾あゝ〳〵あり難い、神佛のあて(7)がひか。

と、戴き〳〵ひつそばめ(8)、立つて見ても後ろより、又誰ぞ來るやうで、危さこはさ右左、足もすわらぬ行燈(あんどう)の、我が影にびつくりして、わな〳〵ぎし〳〵ぎし〳〵鳴る音も、耳にこたへ胸にしみ、氣を抑へ息をのみ、やう〳〵惱みのぼりつき、溜息ついたる女業。我

(1)吾妻の。

(2)仁三は。

(3)お目にかゝりませう。

(4)番茶に鹽を少し加へて立てたもの。酔をさます効がある。

(5)鞘の末端の飾。

(6)刀身よりも不相應に長い鞘。目は空ざまとかけてある。

(7)讓り與へ。

(8)人の見えぬやうに屈す。

が身ながらも興さむる。藤が臥したる北枕(1)、いとしや科もない人をと、恐しながら背中(2)に腹、胸先に打ちまたぎ、切先さしあてどう〳〵乘る。

吾これ〳〵〳〵、聲立てまい。こなたに恨も罪もない。假にも惚れて吳れた人、殺したうはないわいな。殺さるゝこなたより、殺す我が身が悲しい。

と、涙は及に傳ひしが、

なう、生けて置いては請出して、女夫になるが情ない。わしには大事の男がある。その男と緣切れる、戀路の仇となる故に、今刺殺す。懷の小判を、貧(3)な男にやりたい。殺生の罪盜みの罪、男の爲に作る心。すこしは恨を晴れてたも。

と、又はら〳〵と泣きければ、得心やしたりけん、叶はじとや思ひけん、目を塞いで返事もせず。さあ只今とぐつと刺し、とゞめまでは手も弱り、其のまゝ捨てて、懷の小判を兩の袂に入れ、梯子おるれば後ろ

(1)死人は北枕に臥す。

(2)諺「背に腹は替へられぬ」。

(3)勝二郎の事。

より、つかみ立つたるその寒さ。寒風膚も縮み胴ぶるひ、半死半生の
手負(1)、のり返つてうんと云ふ、聲に驚き梯子より、ばた〳〵どうど
落縁(2)の、隅にかゞんで慄ひ居る。手負は惱み苦しみて、續いて梯子こ
ろび落ち、うめく聲に妙慶親子、家内の男女、我も〳〵と駈出で〳〵、
はあ、南無三寶、藤樣を切つたは、切り手があらう。
と、こゝかしこ尋ね探して縁端に、人こそと引出せば、
これは〳〵吾妻殿、それ取放すな、縛れ、括れ。
と立騒ぐ。
いかにも、切るも私が切り、金も私が取つたからは、氣遣しやるな、
にげはせぬ。
と、尤も器用な白狀。
まづ〳〵龍田の一門衆(5)、兄御の方へ注進を拔かるな。
と、追々人を走らせける。
勝二郎は、約束の時分過ぐると、紙子に股引、直に丹波の旅出立にて

(1)疵を負うた人。藤樣。
(2)伸返る。そり返る。
(3)他の所より一段低い緣。落ちるにかけてある。
(4)潔い。立派な。
(5)藤樣の一門衆や兄樣。
(6)事變を急いで報告する事。

來て聞けば、「吾妻が客を切つた」と町のもやつき(1)。つゝと入つて、
勝これ〳〵亭主、身は江戸屋勝二郎といふ吾妻が男(2)。何科なりとも
同罪にして吳れ。
と座敷にどうど坐しければ、吾妻は泣いて目もあかず。
無分別な事をして、思ふが仇となりました。
と、顏をさげてぞ居たりける。町の役人龍田より走り歸つて、
手負の兄御只今これへ御出。
と、云ふを見れば古への手代新七、木綿布子も物さびて(3)、
御免あれ。
と座敷に入り、主從顏を見合せ、互にはつと驚く中、勝二郎赤面し、
面目なや恥しや。そちに顏は合されぬ。
と、兩袖顏にあて、うづくまりてぞ隱れける。
新七恨みの兩眼に涙を浮め、大聲あげ、
えゝ、聞えませぬ旦那殿(4)、我等に顏を隱さるゝは、面目ないか恥し

(1)混雜。さわぎ。ごた〳〵。
(2)夫。
(3)古くなる。
(4)譯が分らぬ。會得されぬ。

い。これその恥しがりが遅かつた。五年以前に、新七を恥しいと思
召さば、御身代は潰れませぬ。まづ斯うあらうかと存じた故、様々
の強意見。新町橋でお足にかけられ、踏まれながらも御意見は、親
旦那の御恩の送りたさ。女房お半は、お身の上を苦に致し、氣病を煩
ひ、去年の春、遂に空しうなりました。彼ももとは御家來、お主
を苦にして相果つるは、下人たる者の本望、聊か悔みも致さばこそ。
親旦那のお蔭で、少しの元手・家屋敷、在所龍田の親どもも、飢え
こゞえぬ程なれども、「いや〳〵お主は流浪の身、家來の安樂道な
らず」と、家屋敷・田地まで賣代なし、ありがね十八貫目、御覽の
通り、我が身には碌な布子も着ぬ體ながら、親旦那の十七年忌は、
内證でお前から遊ばすと申しなし、恐らく江戸屋の追善と、笑はぬ
程の法事を致し、御出世の願ひの爲、京都公家方、折々の附届油斷
もなく、殘る金二百兩、いとしや吾妻殿、新町の殘金ゆゑ、此所に
勤と聞き、御兩人の氣を思ひやり、弟の藤五郎が請出す分で、沙汰

(1)心配の結果起つた病。
(2)賣りあげて金錢とする。
(3)憚りながら。さすがに。
(4)死者の冥福を祈る爲に、忌日などに行ふ供養。
(5)勝二郎と吾妻。下のお二人も同じ。

なしに　お二人一緒に置きましたらば、貧苦の中のお樂み、高いも
低いも親たる身の悦び云ひ子の悦び、お前の御機嫌よい顔を、草
葉の蔭の親旦那に、見せましたい志、御奉公のしをさめと存じ立つ
たる所に、藤五郎は吾妻殿の手にかゝつて死んだか。でかいた〳〵。
此の新七はお主のため、心ざし(1)の奉公はしたれども、一命の奉公は
その方に劣つた。兄にまさつた忠の者。これ〳〵御亭主、只今申す
通りに虚言はない。兄が「言分(いひぶん)ない」といふ證文を致すからは別條は
あるまい。それとても是非處の作法、下手人を取るならば、水(2)いら
ず、すに此の新七、女房は死ぬる、親はなし、一人の弟は相果つる、雲
の内を尋ねても、お主より外世の中に、大事の人はなきものを、隔
てて下さる旦那殿、恨めしう思ひます。
と、どうど伏して泣きければ、吾妻を始め亭主親子、町内近所の者ま
でも、誠の心を感じつつ、皆々涙を流しけり。勝二郎飛んで出で、
あゝあやまつた〳〵。やかうな身となり果てたも、そちを踏んだ下

(1)命に對する志で、頭で色々工夫してする奉公。
(2)近親の者ばかりの事。

人の罰と、かねがね悔み嘆いた。藤五郎を弟と知らいで、吾妻が殺したも我ゆゑぞ。主ゆゑ身上潰し、その體となつたを見て、此の勝二郎が、いかに畜類なればとて、見ても聞いてもゐられうか。死ぬるにも死なれもせず、とてもの情に、その方がこの足にかけ、以前そちを踏んだやうに、勝二郎を踏んで呉れ。一つの罪ものがるる爲。さりとては新七、某を踏んでたも。

と、足の下に背中を向け、手を合せて泣きければ、吾妻は絶つて、弟御のかたきはわし。刺殺して下さんせ。どうも生きてはゐにくい。

と、嘆きくやむ聲々。新七は飛びしさり、

あゝ勿體ない冥加(1)ない。新七と思召すが定ならば、御夫婦心を全うして、出世を見せて下されば、踏殺されても大事ない。

と、三人顔を差寄せて、聲をはかりに泣き居たり。

かゝる所に、八幡の神主紀太夫より、御吉左右の早飛脚、(2)いきり切つて案内す。

(1)「冥加な」に「い」を附けたもの。冥加に叶ふこと。ありがたい。
(2)よいたより。喜ぶべき通知。
(3)勢のありたけを出す。

そりや吉左右とは喜ばし。

と、狀箱開くも疾し遅しと、封じ目切つて拜見す。

何々江戸屋勝二郎事、家來新七數年の歎き感じ思召され、關白左右の大臣御憐みによつて、八幡の本地もとの如く返し與へらる。おつけ歸宅あるべき。

と、讀みも終らず八拜九拜、悦び踊り飛上り、(1)跳ねのぼりたる淀鯉の瀧の壺より涌き出づる、(2)白銀・黄金の鷄寶、(3)ときは勝閧悦びごき、五幾内五箇國神々に、まづ願ほ(4)どきに 三重悦びの、幣帛(5)をあげ神樂をあげ、まゐり納むる八幡山、此の浪花津の惠方(6)神、民安全こそ目出たけれ。

(1)跳ねのぼる、鯉、瀧の壺、湧きいづ皆緣語。
(2)水の泡にたとへる。
(3)時と閧。
(4)願の叶うたお禮まゐり。
(5)神に奉るもの。ぬさ。みてぐら。
(6)惠方は吉方の意。歲德神の司る方である。此の年八幡の八幡宮が大坂の惠方に當つたからかくいふ。

曾根崎心中

曾根崎心中

大阪平野屋忠右衛門の手代で且那である徳兵衛と、天満屋の遊女お初とが、元禄十六年四月七日に心中した事實を材料としたもの。

この作は同年五月七日に竹本座に上場された。その後享保十八年二月に、「お初天神記」と改題して豊竹座で興行される前に、巣林子自身一度之を增補した事がある。

曾根崎心中

げにや安樂世界より[1]、今此の娑婆に示現して、我等が爲の觀世音、仰ぐも高し、高き屋にのぼりて[2]民の賑ひを、契りおきてし難波津や、三つづつ十と三つの里、札所々々の靈地・靈佛、めぐれば罪も夏の雲[3]。熱く[4]ろしとて鴛籠をはや、おりは[5]の乞目三六の[6]、十八九なる顏世花[7]、今唉出しの初花に、笠はきずとも召さずとも[8]、照る日の神も男神[9]、よけて日まけはよもあらじ。賴みありける巡禮道、西國三十三所にも、向ふと聞くぞありがたき。

一番に天滿の大融寺[10]、此の御寺の名も古りし、昔の人も氣[11]のさほるの

(1)諸曲田村「げにや安樂世界より、今この娑婆に示現して、我等が爲の觀世音、仰ぐもおろかなるべしや」安樂世界は安樂淨土、極樂淨土。娑婆は梵語 saha 忍土・忍界と譯す。現世、人間界。(2)仁德帝の御製と稱せられる「高き屋にのぼりて見れば煙立つ民のかまどは賑ひにけり」此の歌は日本紀竟宴和歌藤原時平の「高殿に昇りて見れば天の下四方に煙りて今ぞ富みぬる」の訛傳であらうと。(3)三十三所の札所と難波の一名三津の里とをかける。(4)無と夏。(5)あつくるしの訛。あつくて鬱陶しい。(6)駕籠の下りぎはを、双六のおりはにかける。おりは双六の打ち方の名。(7)自分が出てほしいと希望する賽の目。戀目卽ち戀を含んだ目もとにかける。(8)かほ花に同じ。かきつばたの事。顏の美しい事にたとへる。(9)お初の名をかける。(10)日輪も男神であるから、美しいお初に同情して、日まけしても黒くなる事はあるまい。(11)大阪の三十三所の觀音めぐりをすると、西國三十三所めぐりの御利益に匹敵する。(12)北野にある。(13)氣が利く。粹が利く。察しがよい。とほるに融をかける。融は源氏、嵯峨帝の皇子で、河原院を東六條に營み、每月難波の潮二十斛を汲み、日に壇を煮させて、鹽釜の景に模す。世に河原左大臣といふ。

(1)擢るをかける。(2)弘誓は佛が衆生を濟度しようとする弘大なる誓願。その濟度する事を、船が人を渡すに譬へて弘誓の船といふから櫓拍子とつゞけたのである。(3)乘をかける。玉鉾は道の枕詞であるが、こゝは道の意に用ひて法の道の意につゞけ、天滿祭を昔鉾流しの神事といつたからその意味を聞かせてある。ゑい〳〵は櫓を押す掛詞。(4)木札の誓を轉陀落に移して頭註を合せ、巡禮歌の「普陀落や岸打つ波は三熊野の那智のお山に響く瀧つ瀨」を讀みこむ。(5)天滿天神二橋の間の南岸の八軒屋の地。(6)岸打つ波が白く、夜も白んで二番鳥が鳴く頃、第二番の札所長福寺に來る。この寺は天滿西寺町にある。(7)枕詞であるがこゝは太陽の意。(8)西天滿にある。第三番の札所。この神明宮の境内に別に觀音堂がある。(9)第四番札所。天滿西寺町。(10)自分に無關係な戀に綾蛸する事を法界悋氣といふから、それを法界寺にかけたのである。この寺は天滿西寺町にあつて五番の札所。(11)天滿東寺町にある。六番の札所。(12)粋である。(13)此方と東風。(14)合と袷。(15)蠑をかける。超泉寺は大鏡寺の東隣で七番の札所。(16)同じく天滿。第八番。(17)同じく天滿。第九番。(18)雲の羽衣は夕立を受けて蟬の羽とつゞけ、蟬の羽は薄き、薄きは下の暑きを起す。

大臣の君が塩釜の、浦を都に堀江漕ぐ、汐汲船の跡絶えず、今も弘誓の櫓拍子に、法の玉鉾ゑい〳〵。大阪巡禮、胸に木札のふだらくや、大江の岸に打つ波に、白む夜明けの、鳥も二番に長福寺。空に眩き久方の、光にうつる我が影の、あれ〳〵走れば走る。これ〳〵又とまればとまる。振のよしあし見る如く、心もさぞや神佛、照す鏡の神明宮。拜みめぐりて法住寺。人の願ひも我が如く、誰をか戀の祈りぞと、仇の恪氣や法界寺。東は如何に大鏡寺。草の若芽も春過ぎて、遲れざきなる菜種や罌粟の、露にやつるる夏の虫。おのが妻戀優しやすしや。あつちへ飛びつれ、こつちへ飛びつれ、あちやこち風ひた〳〵〳〵、羽と羽とをあはせの袖、染めた模樣を花かとて、肩にとまればおのづから、紋に揚羽の超泉寺。さて善導寺・栗東寺。天滿の札所殘りなく、そなたにめぐる夕立の、雲の羽衣蟬の羽の、薄き手拭暑き日に、貰く汗

(1)汗の玉を玉造にかける。玉造には豊津稻荷があつてその境内の觀音が十番の札所。この稻荷の夏祭は六月廿九日であるから、闇はことわりといふて、後撰集の雀輔の歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」を含めてある。(2)法華經「一切衆生悉是吾子」。(3)伯母をかける。小橋は騎兵第四聯隊營舍附近。興德寺はその東寺町にあつて十一番の札所。この邊は丘陵で眺望が宜しい。(4)泡をかける。波、池、消ゆ皆緣語。金葉集冬源兼昌「淡路島通ふ千鳥の啼く聲に幾夜寢ねざめぬ須磨の關守」。(5)本當に。誠に。(6)景をかける。慶傳寺は小橋東寺町にあつて十二番の札所。(7)來うをかける。遍明院は俗に野中の觀音といつて十三番。(8)植に上をかける。(9)長安寺は十四番、誓安寺は十五番共に上寺町八丁目にある。(10)山城國乙訓郡の羽束師の森をかける。(11)古今集二春下、僧正遍昭「よそに見て歸らん人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも」。(12)谷町筋玉木町にある。和勝院といふ。十六番。境内に紫藤の棚があるから俗に藤の棚といふ。(13)谷町九丁目。(14)行くと生くとをかける。(15)生玉中寺町にあつて十八番。(16)菩提樹の實は珠數に用ひるからかく續ける。この寺は生玉中寺町にあつて十九番。(17)天王寺の境内にあつて二十番。(18)同じく天王寺の境内にある。二十一番。七千餘卷は一切經の數。(19)時鳥を經よむ鳥といふ。又鶯の啼き聲が法華經と聞えるから鶯の異名ともする。こゝは酉の時をいふ爲におく。酉は午後六時。

の玉造。稻荷の宮に迷ふとの、闇はことわり御佛も、衆生の爲の親なれば、これぞ小橋の興德寺。四方に眺めの果しなく、西に船路の海深く、波の淡路に消えずも通ふ、沖の潮風身にしむ鴎、なれも無常の烟に咽ぶ。色に焦れて死なうなら、しんぞ此の身はなり次第。さてげによい慶傳寺。緣に引かれて又いつか、此處に高津の遍明院。菩提の種や上寺町の、長安寺より誓安寺。のぼりやすなすな、くだりやちよこちよこ、上りつおりつ谷町筋を、步みならはず行き習はねば、所體くづほれ、あゝ恥しの、もりて裳裾がはら〳〵〳〵、はつと返るを打掻合せ、ゆるみし帶を引締め〳〵、しめてまつはれ藤の棚。十七番に重願寺。これからいづく生玉の、本誓寺ぞと伏拜む。珠數に繫がん菩提寺や。はや天王寺に六時堂、七千餘卷の經堂に、經讀む酉の時ぞとて、

(1)平家物語五月見の事「抑この女房を待宵を召されける事は、或時御前より、待宵歸るあした、何れか哀まされると仰せければ、かの女房、待つ宵のふけふく鐘の聲聞けば歸るあしたの鳥はものかはと申したりける故にこそ待宵とは召されけれ」。(2)こんは鐘の音、金堂は南大門の内にあつて二十二番。以下こんこん堂に講堂や……かげもかゞやく……しん清水にしばしとやがてやすらふと頭顱を合せてある。(3)金堂の北にあつて二十三番。(4)仁王門の西にあつて二十四番。(5)しんは蠟燭の心とつゞく。新清水寺は天王寺の西安井天神の北にあつて二十五番。(6)西行法師の歌「道のべに清水流るる柳かげ暫しとてこそ立ちとまりつれ」。(7)名所圖會「祖坂の清水、一心寺門前の西にあり……小坂清水ともいふ」。(8)無明は一切諸法の眞理を知る事能はざる煩惱で、酒は本心を晴ますからいふ。(9)西行の歌「風に靡く富士の煙の空に消えて行くへも知らぬ我が思ひかな」。(10)蘐草の異名。單に思ひ草ともいふ。(11)人を忍ぶと忍草とをかける。道草はこゝでは道草をくふ事。(12)信仰をかける。二十六番。下寺町。しぐれの松のしも寺町に信心深き心光寺と頭韻を合す。(13)二十七番同じく下寺町。(14)二十八番。同じく。(15)二十九番同じく下寺町。(16)滿つをかける。三津寺は島の内三津寺町筋にある。(17)阿彌陀如來の右の御手にかけてある五色の糸。それに縋つて淨土に導かれてゆく。(18)大福院。三十一番。(19)摸は夢を食ふと俗說にいふ。(20)久本寺、長久寺共に法華寺。(21)武家屋敷。

(1)よその待宵きぬ〳〵も、思はでつらき鐘の聲、(2)こん金堂に講堂や、萬(3)燈院にともす火は、影も輝く蠟燭の、(4)しん清水に暫しとて、やがて休らふ逢坂の、(5)關の清水を汲上げつ、手に掬びあげ口すゝぎ、(6)無明の酒のゑひさます、木々の下風ひや〳〵と、(7)右の袖口左の袖へ、通る烟管にくゆる火も、道の慰み暑からず。(8)吹きて亂るる薄けぶり、空に消えてはこれもまた、行くへも知らぬ相思ひ草、(9)人忍ぶ草道草に、日もかたぶきぬ急がんと、又立出づる雲の脚。時雨の松の下寺町に、信心深き心光寺。覺らぬ身さへ大覺寺。(10)さて金臺寺・大蓮寺。めぐり〳〵てこれぞはや、三十番にみつ寺の、大慈大悲の賴みにて、かくる佛の御手の糸。(11)白髮町とよ黒髮は、戀に亂るる妄執の、夢をさまさんばくら

(1)諸「神と佛は水波のへだて」。(2)津村の御藏宮。三十三番。(3)蓮の古名。下の草の蓮葉なを起す。新古今集釋教歌「なほ顧めしめぢが原のさしも草我れ世の中にあらむ限は」。この歌袋草子四には清水寺觀音御歌とある。(4)輕薄。(5)梵語 Bodhi 道又は覺と譯す。(6)心の内とつゞけてある。(7)火とかける。(8)年季を積んだ。(9)小柄の華奢な美男。(10)少しは酒の飲める人。(11)百をかけて一つに對し、雛に對して桃の酒といふ。桃の酒とは日本後紀に「三日桃花を取りて酒に浸し、これを飲めば病を除き顏色を潤す」とある。春、雛、桃、柳皆緣語。(12)僻くに德兵衛の德をかける。(13)名を取るの意味で、下に埋木と起す。名取川は陸前國にある。(14)埋木の木とつゞけて生醬油と德兵衛の家業を聞かせたのである。(15)奴が袖も生醬油で煮しめたやうになつて居る有樣。それに濃厚なる戀の意味を含めて居る。(16)戀の情に心の使はれる事を奴にたとへていふ。(17)行くをかける。(18)一時假に設けた出店の茶屋。(19)丁稚の通稱。前に戀の奴というたその奴の名である。(20)久本寺、長久寺共に法華寺。(21)武家屋敷。

うの、此處も稻荷の神社。(1)佛神水波のしるしとて、蔓並べし新御靈に、(2)拜みをさまるさしも草。(3)草の蓮葉な世にまじり、三十三に御身を變へ、色で導き情で教へ、(4)戀を菩提の橋となし、渡して救ふ觀世音。誓ひは妙に三重あり難し。

立ち迷ふ浮名を餘處に漏らさじと、(5)包む心の内本町。(6)焦るる胸の平野屋に、(7)春を重ねし雛男。(8)一つなる口桃の酒、柳の髮もとく〳〵と、呼ばれて粹の名取川。(9)今は手代と埋木の、(10)生醬油の袖したゝるき、(11)戀の奴に荷はせて、得意をめぐり生玉の、社にこそは著きにけれ。出茶屋の床より女の聲、

ありや德さまではないかいの。これ德さま〳〵。

と手を叩けば、德兵衛合點して打頷き、

これ長藏、おれはあとからいの程に、そちは寺町の久本寺樣・長久寺樣、上町から屋敷方まはつて、さうして内へいにや。」德兵衛も早

(1)それは、あのそれなどいふ時のそれで感嘆詞。忘れずともは、忘れずにの意。もは感嘆詞。
(2)道頓堀には芝居や見世物があるから、そこへ寄つて道草を食ふなと。
(3)贅澤をいうて。
(4)人は勿論鳥獸その他の形又は音聲を眞似る見世物。
(5)其處へ出て行く。
(6)駕籠舁夫。
(7)諺に「梨の礫」又「梨も礫も打たぬ」といふ。
(8)德兵衛の。
(9)德兵衛の馴染の茶屋。
(10)百度詣又は百度參に同じ。諺に「お百度を踏む」とある。
(11)德兵衛の鄕里。
(12)とんと。
(13)こなたさまの畧。

戻る」といや。それ[1]忘れずとも、安土町の紺屋へ寄つて錢取りやや。
道頓堀[2]へ寄りやんなや。
と、影見ゆるまで見送り、〳〵、簾垂をあげて、
德 これお初ぢやないか。これはどうぢや。
と、編笠をぬがんとすれば、
初 あゝまづ矢張被て居さんせ。今日は田舍の客で、三十三番の觀音樣をめぐりまし、爰で晩まで日暮しに、酒にするぢやと贅[3]言ひて、物[4]眞似聞きにそれ其[5]處へ。戻つて見ればむづかしい。駕籠[6]も皆知らんした衆。やつぱり笠をきてゐさんせ。それはさうぢやが、此の頃は梨[7]も礫も打たんせぬ。氣遣なれど、内方[8]の首尾を知らねば便宜もならず。丹波屋[9]までは[10]お百度ほどたづぬれど、あそこへも音づれもないとある。はあ誰やらが、おゝそれよ。座頭の太市が友達衆に聞けば、「在所[11]へいかんした」といへども、つん[12]と誠にならず。ほんに又あんまりな。わしはどうならうとも聞きたうもないかいの。こな[13]

(1)内と接頭語の打。
(2)諺「盆と正月が一緒に來やう」。「盆と正月が一時に來た」。
(3)淨土宗で十月六日から十五日まで十夜の間別時念佛を唱へる事。
(4)六月晦日の大祓。
(5)無茶苦茶。闇とみつちやの結合語。上方では痘痕をみつちやといふから皮袋を添へたのである。
(6)譯をいへば實は自分は京へも上つて來たのである。
(7)命が續くと續狂言とをかける。
(8)洒落などいうて居る暢氣な場合ではない。
(9)この句の下に、いつもは包まずいのふのにの意を含める。
(10)杉原紙。

さまそれでも濟もぞいの。わしは病になるわいの。嘘ならこれ此の痞へを見さんせ。
と、手を取つて懷の、うち[1]怨みたる口說き泣き。ほんの女夫に變らじな。男も泣いて、
おゝ道理々々。さりながら、言うて苦にさせ、何せうぞいの。此のぢうおれが憂き苦勞、盆[2]と正月その上に、十夜[3]・お祓[4]・煤掃を、一度にするとも斯うはあるまい。心の内はむしやくしやと、やみらみ[5]つちやの皮袋。銀事やら何ぢややら、譯[6]は京へものぼつて來る。ようも〳〵德兵衛が命[7]は續きの狂言にしたらば、哀にあらうぞ。
と、溜息ほつとつくばかり。
初 はて、輕口[8]の段かいの。それ程[9]にない事をさへ、わしにはなぜに言はんせぬ。隱さんしたは譯があろ。なぜ打ちあけては下んせぬ。
と、膝にもたれてさめ〴〵と、涙は延紙[10]を浸しけり。
はあて、泣きやんな。恨みやるな。隱すではなけれども、言うて

も埒のあかぬ事。さりながら大方まづ済みよつたが、一部始終を聞いてたも。おれが旦那は主ながら現在の叔父・甥なれば、念比にも預る。又身ごもも、奉公にこれほども油断せず。商ひ物も文字平假名ちがへた事のあらばこそ。此の頃裕をしようと思ひ、堺筋で加賀一疋、旦那の名代で買ひがかる。これが一期にたつた一度。此の金も、すわといへば、著替へ賣つても損かけぬ、此の正直を見て取つて、内儀の姪に二貫目つけて女夫にし、商ひさせうといふ談合。去年からの事なれど、そなたといふ人持ちて、何の心が移らうぞ。取りあへもせぬその内に、在所の母は繼母なるが、我に隱して親方と談合きはめ、二貫目の金を握つて歸られしを、此のうつそりが夢にも知らず。あとの月からもやくり出し、押して祝言させうとある。そこでおれもむつとして、「やあら聞えぬ旦那殿、私合點致さぬを、老母をたらしたきつけ、あんまりなされやう。お内儀樣も聞えませぬ。今まで、樣に樣をつけ、あがまへた娘御に、金をつけて申し

(1)少しもと指頭を示して語るさま。
(2)女殺油地獄下之卷に「一生夫の錢金、文字ひらなかちが「ぬ身が云々」とある。一文半錢の意。
(3)大阪の町の名。
(4)加賀絹。
(5)旦那の名義で掛で買ふ。
(6)所謂數金である。
(7)相手にもしない。相談に乘らぬ。
(8)旦那。
(9)迂濶者。間抜け。德兵衛自身の事。
(10)先月。
(11)ごた〳〵し始める。もやは月の緣。
(12)是非。
(13)だます。
(14)無理に承知させる。
(15)敬ふが上に敬ふ事。
(16)崇める。

(1)男が立たぬ。一分が立たぬ。
(2)音ひの詞。
(3)德兵衛の拒絶の理由。
(4)くされあふともいふ。縺り繋がるに厭るの意をかねる。男女が猥りに馴れあふ事。
(5)辨償。返濟。
(6)八日は灌佛であるから。
(7)まくし出すともいふ。追ひ出すこと。
(8)どんな事があつても。如何なる變動があつても。
(9)「譯は京へも上つて來る」とあつた事。
(10)在所の人々全體。
(11)「骨が舍利になつても」といふ諺がある。
(12)水に曝された貝。舍利にかける。
(13)お前。

受け、一生女房の機嫌取り、此の德兵衛が立つものか。いやと言ふからは、『死んだ親父が生き返り申す』とあつてもいやでござる」と、詞を過す返答に、親方も立腹せられ、「おれがそれも知つてゐる。蜆川の天滿屋の初めとやらと腐りあひ、噂が姪を嫌ふよな。よい、この上はもう娘はやらぬ。やらぬからは金を立て。四月七日までに屹度立て。商ひの勘定せよ。まくり出して大阪の地は踏ませぬ」と怒らるる。某も男の我。「おゝそれ畏まつた」と在所へ走る。又この母といふ人が、此の世があの世へ返つても、握つた銀を放さばこそ。京の五條の醬油問屋、常々金の取りやりすれば、これを賴みにのぼつて見ても、折しもわるう銀もなし。引返して在所へ行き、一在所らりと埒があくはあく。されども大阪に置かれまい時には、どうして逢はれうぞ。例へば骨を碎かれて、身はしやれ貝の蜆川、底の水屑とならばなれ。わが身に離れどうせう。

と、咽び入つてぞ泣きゐたる。お初も共にせく涙、力をつけて押しと

どめ、

さて〳〵いかい御苦労。皆わし故と思ふから、嬉しがなしう忝し。

さりながら、心たしかに思召せ。大阪を堰かれさんしても、盛み家

燒の身ではなし、どうしてなりとも置く分は、わしが心にある事な

り。逢ふに逢はれぬ其の時は、此の世許りの約束か。さうしたため

しの無いではなし。死ぬるをたかの死出の山。三途の川は堰く人も

堰かるる人もあるまい。

と、氣強う勇む詞のうち、涙にむせていひさせり。お初重ねて、

七日というても明日の事。とても渡す金なれば、早う戻して親方様

の機嫌をも取らんせ。

といへば、

徳おゝさう思うて氣がせくが、そなたも知つた彼の油屋の九平次

が、あとの月の晦日、「たつた一日いる事あり、三日の朝は返さう」

と、一命かけて頼むにより、七日まではいらぬ金。兄弟同事の友達

の爲と思ひて、時貸に貸したるが、三日四日に便宜せず。昨日は留

守で逢ひもせず。今朝尋ねうと思ひしが、明日ぎりに商ひの勘定も

仕舞はんと、得意まはりで打過ぎたり。晩には行つて埒あけう。あ

いつも男磨くやつ。おれが雜儀も知つて居る。如才はあるまい。氣

遣しやるな。やあお初。

謡初瀬も遠し難波寺。名ごころ多き鐘の聲、盡きぬや法の聲ならん。

山寺の春の夕暮來て見れば、先なは、

徳これ九平次、あゝ不敵千萬な。身ども方へは不屆して、遊山ごこ

ろであるまいぞ。さあ今日埒あけう。

と、手を取つて引きとむれば、九平次興ざめがほになつて、

九なんの事ぞ徳兵衛、この連衆は町の衆。上鹽町へ伊勢講にて只今

歸るが、酒も少し飲んで居る。利腕取つてどうする事ぞ。粗相をす

るな。

(1)嘆をすると共に流れる。
(2)非常な。大變な。
(3)嬉しみのある悲しさ。
(4)水を堰くやうに、大阪から追はれる。
(5)放火犯。
(6)徳兵衛を生活させておく。
(7)精々死んで冥途に行くだけの事だ 死出の山とは十王經に「閻魔王國境死天山南門、亡人重過、兩其根過、破像割脩、折骨消償、死而重死、故曰死天、從此亡人向入死山」とある
(8)極惡極惡でない人が、死んで冥途に行く途中にあるといはれて居る川三つの瀨があつて、生前に作つた業によつて渡るに別がある。
(9)いつそ。どうせ。
(10)あせる。急ぐ。
(11)先月の廿八日。

(1)同然。同樣。
(2)當座の貸し。
(3)捉かりはあるまい。
(4)以下謡曲三井寺の句。
(5)大阪天王寺の事。
(6)新古今集二春下龍因法師「山寺の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」。
(7)無法至極。
(8)物見遊山などいうて、出あそぶこと。
(9)日次紀事「伊勢講、俗間三人或五人、常合心約其日、聚其家、謀其事謂講、其日多用三首日及十六日、今月今日其所聚家稱頭人、是首長之謂也、頭人輪轉設酒食饗講中之人、每其講日、各出銀或錢、聚飲而置之、爲他日參宮之路費」。
(10)右手。
(11)輕卒な事。あやまち。

と笠を取れば、

徳いや此の徳兵衛は粗相はせぬ。あとの月の廿八日、銀子二貫目時貸に此(1)の三日ぎりに貸したる銀、それをかやせといふ事。

と、いはせも果てず九平次、かつら〳〵と笑ひ、

氣がちがうたか徳兵衛。(2)われと數年語れども、一錢借つた覺えもなし。聊爾(4)な事をいひかけ、後悔するな。

と振放せば、連も笠をはらりとぬぐ。徳兵衛はつと色を變へ、

言ふな〳〵九平次。身(5)が此の度の大難儀。どうもならぬ銀なれども、

「晦日たつた一日で身代立たぬ」と嘆いた故、日ごろ語るはこゝらと思ひ、男づくで貸したぞよ。「手形も要らぬ」と言うたれば、一念の爲ぢや、判しよう」と、おれに證文書かせ、お主が捺した判があ(8)る。さういふな九平次。

と、血眼になつて責めかくる。

九むゝう、なんぢや。判とはどれ見たい。

(1)今月。
(2)お前。
(3)懇意にする。
(4)粗忽。
(5)俺。
(6)男としての意地で。
(7)證文。
(8)左右。かれこれ。

徳おゝ見せいで置かうか。

と、懐中の鼻紙入(1)れより取出し、

徳お町衆(3)なら見知りもあらう。こりやこれでもあらがふか。

と、開いて見すれば、九平次横手(5)を打ち、

なるほど判はおれが判。えゝ徳兵衛、土にくひつき死ぬるとても、こんな事はせぬものぢや。此の九平次は、あとの月の廿五日に鼻紙袋を落して、印判共に失うた。方々(6)に張紙して尋ぬれども知れぬ故、此の月から、これ此のお町衆へも斷り、印判を替へたわやい。廿五日に落した判を、八日(4)におされうか。さてはそちが拾うて、手形を書いて判を据ゑ、おれをねだつて銀取らうとは、謀判(5)よりも大罪人。こんな事をせうよりも、盜みをせい徳兵衛。えゝ、首を斬らせる奴なれど、懇ろ甲斐に許しておく。銀になるならして見よ。

と、手形を顔へ打ちつけ、はつたと睨む顔付は、げんによもなげにし(8)ら〳〵し。徳兵衛くわつと胸せいて、大聲あげ、

(1)鼻紙袋。畳紙又は布帛、革などで作り、鼻紙、藥、貨幣などを入れて懐中する。
(2)町内の人々。
(3)深く感じ又ははたと思ひ當つた時などに、我知らず兩手を打合す事。
(4)二十八日。
(5)にせはん。
(6)平生懇意にしたよしみに。
(7)思ひがけなささう。けんによはけんねの訛り。けんねは懸念。
(8)知つて素知らぬ顔をする事。

さてたくんだり〳〵。一杯くうたか無念やな。はて何とせう。此の銀をのめ(1)〳〵と、只おのれに取られうか。かうたくんだ事なれば、でんどへ出てもおれが負け。腕先で取つて見せう。こりや平野屋の(2)徳兵衛ぢやぢやないか。男ぢやが合點か。おのれがやうに友達を騙つて倒す男(3)ちやない。さあ來い。

と掴みつく。

やあ(4)洒落な子稚上りめ、投げて呉れん。

と胸倉取り、ぶちあひ捻ぢあひ敲きあふ。お初は跣足で飛んでおり、あれ皆樣頼みます。わしが知つたお人ぢやが、駕籠の衆はゐやらぬか。あれ徳樣ぢや。

と身をもがく。詮方なくも哀なり。客はもとより田舎者、

怪我があつてはならぬぞ。

と、無體に駕籠に押入るゝ。

初いやまづ待つて下さんせ。なう悲しや。

(1)棒ですくめる。又棒づくめか。棒のあるたけを持ち寄る事。

(2)生かして。

(3)皆さん。

(4)いひがかり。

(5)後に立て。

(6)廿八日に判を据ふておきながら、廿五日に落したと僞つて届け出たこと。

(7)さかねだりともいふ。ねだらるべき人が逆に他にねだる事。

(1)おめ〳〵。

(2)出る所の義。公儀。こゝは奉行所。

(3)他人に金銀上の損害を與へる。

(4)しやら臭い。生意氣な。

(5)お初と共に三十三番をまはつた田舎の客。

(6)お初に。

と泣く聲ばかり、急げ〳〵と一散に、駕籠を早めて歸りけり。徳兵衛はたゞ一人、九平次は五人づれ、あたりの茶屋より棒ずくめ、蓮池まで追出だし、誰が踏むやら叩くやら、更に分ちはなかりけり。髪もほどかれ體もとけ、あなた此方へ伏しまろび、

徳やれ九平次め、畜生め、おのれ生けて置かうか。

と、よろぼひ尋ねまはれども、逃げて行方も見えばこそ。そのまゝそこにどうど坐り、大聲あげて涙を流し、

何れもの手前も面目なし恥しし。全くこの徳兵衛がいひかけしたる(4)で更になし。日頃兄弟同然に語りし奴が事といひ、「一生の恩」と嘆きし故、明日七日此の金が無ければ、我等も死なねばならぬ命代りの銀なれども、互の事と役に立ち、手形を我等が手で書かせ、印判するゆゑ、「その判を前方に落せし」と町内へ披露して、却つて今の逆ねだれ。口惜しや無念やな。此の如く踏み叩かれ、男も立たず、身も立たす、え、最前に摑みつき、くひついてなりとも死なんもの

を。

と、大地を叩き齒がみをなし、拳を握り嘆きしは、道理とも笑止(1)とも思ひやられて哀なり。

德はて、斯う云うても無益(むやく)の事。此の德兵衛が正直の心の底の涼しさは、三日を過さず、大阪中へ申譯はして見せう。

と、後(のち)に知らるる詞の端、

何れも御苦勞かけました。御免あれ。

と一禮のべ、破れし編笠拾ひ著て、顏(2)もかたぶく日影さへ、曇る涙にかきくれ〳〵、すご〳〵歸る有樣は、目もあてられぬ三重(3)

戀風の身に蜆川(4)流れては、その空背貝(うつせ)現なき、色の闇路を照らせとて、夜ごとにともす燈火(6)は、四季の螢よ雨夜の星か。夏も花見る梅田橋(7)。旅の鄙人(ひなびと)(8)。地(ち)の思ひ人。心々の譯(9)の道、知るも迷へば知らぬも通ひ、新色里(10)と賑はしし。無惡(11)やな、天滿屋のお初は內へ歸りても、今日の事のみ氣にかゝり、酒も飮まれず氣もすまず、しく〳〵泣いて居る所

(1)氣の毒。
(2)傾くは上下にかけてある。
(3)惨然として。
(4)身にしむにかける。
(5)貝殼。下のうつつなきにかゝる。うつつなきは本心を失ふこと。
(6)遊里の軒行燈。
(7)蜆川にかゝる。花と梅と緣。
(8)大阪の市中からこの廓に通うて來る戀人。
(9)色の道。戀の道。
(10)曾根崎新地の事。
(11)不便。

へ、隣の妓(1)や朋輩の、一寸來ては、

なう初樣、何も聞かんせぬか、德樣は何やら譯のわるい事あつて、たんとぶたれさんしたと、聞いたがほんか。

といふもあり。

いや、わしが客樣の話ぢやが、踏まれて死なんしたげな。

といふもあり。「騙りを言うて縛られて」の、「僞判して括られて」の、と、碌な事は一つもいはず、問ふにつらさの見舞なり。

初あゝいやもう言うて下んすな。聞けば聞くほど胸痛み、わしから先へ死にさうな。いつそ死んでのけたい。

と、泣くより外の事ぞなき。

かゝる(2)所へ、此の里馴れぬ人體(にんてい)に、家來に提燈ともさせて、此處か其處かと立覗く。下女の玉立寄りて、

これ親父樣、どんなお顏が物すきぞ。若い衆と同じやうにうろ〳〵せずと、まあこちへはひらしやんせ。

(1)遊女。夜寢の義。

(2)以下「物打ち案じゐる所へ」まではお初天神記の文句である。
(3)下女の通名のやうになつて居る。

と引きとむれば、

むゝ、天滿屋といふ茶屋は、此處ではないか。

と尋ぬれば、

玉あゝなるほど〳〵、お尋ねの天滿屋。十四五から三十までの、丸顏・面長望み次第。戀知りの初樣とて、町一番のぼつとり(1)者。お目にかけん。

と纏りつく。

さればその初といふ女に用の事ある間、一寸呼出して。

と言ふや否、

玉むゝ、さてはもうお馴染か。幸ひ只今おひまあり。いざおはひり。

といひければ、

いや〳〵左樣の者でなし。逢うて一こと言ふ事あり。頼む。

といへば、

玉さてはお客のお連樣か。そんなら疾うから言うたがよい。これお

(1)柔かにしなやかに愛敬があつて美しい人。

(1)のつべりに同じ。平たく長くしまりがなくて美しい。

初樣。客樣のお連樣が。

と傳へれば、初は彼處に立ちいでて、

誰さんぢや。

と差覗けば、

むゝ、お初とはお身の事な。そなたが內に居るからは、德兵衛めも來てゐる筈。此處へ早う呼んで下されい。

初いゝえ、德樣はまだ見えませぬが、まづこなさんは誰樣ぢや。

おゝ、身ごもは德兵衛めが叔父親方平野屋久右衛門といふもの、そなたを見るも恨めしい。あの正直な德兵衛めをば、ぬつ(1)べりとした顏をして、どのやうにだましたやら、今日此の頃は平生の魂が入れ替り、錢金を湯水のやうに、夜々(よるゝ)通ふのみならず、今日は晝から得意衆へ、商ひにまはるというて內を出て、今になりても歸らぬ故、久右衛門が引きずりに參つた。よい加減にして戻されよ。さなくばお爲が惡しからう。

と、にが〳〵しくいひければ、お初はじつと聲を沈め、

さてはお前は旦那様か。内方の入譯(1)も話で聞いて居ますれば、わしが憎いはお道理。それ程の事辨へぬわたしでもなけれども、思ひ切るにも切られぬは、二人が因果と思召し、堪忍して下さんせ。さうした中の事なれば、再々見えはしますれど、よしない金は遣はせませぬ。必ず恨みて下んすな。それについてはお前へ立つる二貫目の銀も、御手(3)にありしをば、友達　義理合にて、油屋の九次平めに用にたつてやらんしたを、今日生玉で逢はんして、「戻して吳れ」とあつたれば、「借らぬ」とあらがふのみならず、「言ひかけする」の「騙りり」のと、德樣一人を四五人して、ぶつたり踏んだりしをつたを、わしもお客と行き合せ、くひつきたうは思へども、お客の手前を憚りて、樣子を見さして戻りしが、もしや怪我は無かつたかと、これのみ案じゐまする。

と、泣く〳〵語れば、久右衛門大きにせいて、

(1)細かい事情。
(2)無益な。
(3)德兵衛の。

(1)公衆の面前で。

なに、九平次めが德兵衛を踏みたるとや。德兵衛事は久右衛門が家來ながらも甥ぢやとは、誰知らぬ者ないところに、よし理にもせよ非にもせよ、あの生玉のでんど(1)にて、九平次めに踏ませては、此の久右衛門が立つものか。もう德兵衛にもあひますまい。これから直に九平次が宿へ踏込み、おのれまづ摑みついてもくいついても、存分言はで置かうか。

と、走り行くを引きとゞめ、

お腹の立つのは御尤。併し先にはたくんだ事。此の上粗相のある時は、御損の上の恥になる。どの道にも、德樣がおつつけこれへ見える筈。逢うて共々談合して、往て下さんせ。

といひければ、

むゝ、すれば是非とも德兵衛が、これへ來るにきはまつたか。然らばあうての上の事。暫く此處を貸し給へ。

と、見世の先に腰かくれば、

初いやのう、此處は商ひ見世、内へはひつて待たしやんせ。お妻さま、お吉さま、此のお客をば小座敷へ通しまして。

と聞くよりも、

あい。

と答へて二人の妓、

さあござんせ。

と取りつけば、

久さあ、參れなら參らうが、これお初殿、構(1)へて身どもは金は拂はぬぞや。必ず念(2)をつかうた。

と、言ひすて奥にぞ入りにける。

お初は見世につく〴〵と、物打案じゐる所へ、表を見れば、夜の編笠德兵衛(3)、思(4)ひわびたる忍び姿、ちらりと見るより飛立つばかり。走り出でんと思へども、おうへ(5)には亭主夫婦、あがり口に料理人、庭では下女がやく(6)たいの、目が繁ければさもならず。

(1)決して。
(2)念を押した。
(3)解くにかける。
(4)屈託した。
(5)勝手方から奥の間をさしていふ語。
(6)いやな事。面倒な事。迷惑な事。

初あゝいかう氣(1)が盡きた。門見(かさ)て來う。

と、そつと出で、

初なう、これはどうぞいの。こなさまの評判色々に聞いた故、その氣遣さ〳〵、氣狂のやうになつて居たわいのう。

と、笠の内に顔さし入れ、聲を立てずの隱し泣き、あはれせつなき涙なり。男も涙にくれながら、

聞きやる通りのたくみなれば、言ふ程おれが非に落ちる。その内四方八方の、首尾はぐわらりとちがうて來る。最早今宵は過されず。

とんと覺悟をきはめた。

とさゝやけば、内よりも、

世間にわるい取沙汰ある。初樣内へはひらんせ。

と、聲々に呼入るる。

初おゝ〳〵あれぢや。何も話されぬ。わしがするやうにならんせ。

と、裲襠(2)(うちかけ)の裾に隱し入れ、這ふ〳〵中戸の沓脱より忍ばせて、縁の下(した)

(1)根氣が盡きた。
(2)かいどり。婦人の通常の禮服。帶をした上に打掛けて着る小袖。

屋にそつと入れ、あがり口に腰打懸け、煙草引寄せ吸付けて、素知ら
ぬ顔して居たりけり。(1)座頭まじくらごつと來たり。かゝるところへ九平次は、わる口仲間二三人、
やあ妓樣たち、淋しさうにござる。何と客になつてやらうかい。何
と亭主久しいの。
と、(2)のさばりあがれば、
主それ煙草盆、お盃。
と、(3)ありべかゝりに立騒ぐ。
いや。酒は置きや。飲んで來た。さて話す事がある。これの初が一(4)
客平野屋の德兵衛めが、身が落した印判拾ひ、二貫目の似せ手形で
騙ふとしたれども、理窟に詰まつて擧句には、(5)死なず甲斐な目にあ
うて、一分はすたつた。向後此處らへ來たるとも油斷しやるな。皆
にかう語るのも德兵衛めがうせ、(6)まつかいさまに言ふとても、必ず
誠にしやるなや。寄せる事もいらぬもの。どうで(7)野江か飛田もの。

(1)まじり。
(2)のさ〳〵と横柄な態度で家にあがる。
(3)一通りに。常の通りに。
(4)第一の客。唯一の客。
(5)死なぬがまだしも甲斐があつて仕合せであるとの義。殆んど死ぬ程の目。
(6)まつかへさまの訛。全く反對なるさま。正反對。
(7)野江も飛田も共に刑場。そこへ送られる人間。

と、誠しやかにいひ散らす。緣の下には齒をくひしばり、身を慄はして腹を立つるを、初はこれを知らせじと、足の先にて押鎭め、抑へ靜めし神妙さ。亭主は(1)久しい客の事、よしあしの返答なく、
主さらば何ぞお吸物。
と、紛らかしてぞ立ちにける。初は涙にくれながら、
さのみ利根(1)にいはぬもの、德樣の御事、幾年馴染み心根を、あかしあかせし中なるが、それは〳〵いとしぼげに、微塵譯はわるうなし。(3)賴もしだてが身のひしで、だまされさんしたものなれども、證據なければ理も立たず。此の上は德樣も、死なねばならぬ(4)しなるが、死ぬる覺悟が聞きたい。
と、獨りごとになぞらへて、足で問へば打頷き、足首取つて咽笛撫で、自害をするとぞ知らせける。
初おゝ其の箸〳〵。いつまで生きても同じ事。死んで恥を雪がいでは。

(1)德兵衛の事。
(2)利口に同じ。賢げに。さかしげに
(3)頼み甲斐ありげに振舞うたのが自分の災難。ひしは災難。禍。
(4)事情。有樣。

と言へば、九平次ぎよつとして、

お初は何をいはるるぞ。何の徳兵衛が死ぬるものぞ。もし又死んだらその後は、おれが懇ろしてやらう。そなたもおれに惚れてちやげな。

と言へば、

こりや、忝かろわいの。わしと懇ろさあすんと、こなたも殺すが合点か。徳様に離れて、片時も生きてゐようか。そこな九平次のごう(2)ずりめ。阿呆口を叩いて、人が聞いても不審が立つ。どうで徳様一緒に死ぬるぞやいの。

わしも一緒に死ぬるぞやいの。

と、足にて突けば、縁の下には涙を流し、足を取つて押戴き、膝にだきつき焦れ泣き、女も色に包みかね、互に物はいはねども、膽と膽とにこたへつつ、しめり泣きにぞ泣きゐたる。人知らぬこそ哀なれ。九平次も氣味わるく、

相場がわるい、おじやいのう。こゝな妓衆は異(4)な事で、おれらがや

(1)わざと反對にいふ。
(2)いきずり、いけどうずりなどと同じ。どうは意味を強める接頭語。
(3)模様がわるい。風向がわるい。
(4)變人。

うに金遣ふ大盡は嫌ひさうな。阿(1)佐屋へ寄つて一杯して、ぐわらぐわら一分をまき散らし、そしていんだら寝よからう。あゝ懐が重たうて歩きにくい。

と、わる口だらけいひ散らし、わめいてそとへ出でけるを、お(2)初はどうもたまられず。

死にに行く身の道連れに、おのれだまして殺さう。

と、心一つに思案して、ずつと立つて引きとゞめ、

只今言うた惡口は、勤する身の義理なれば、さのみ心にかけさんすな。(3)ありやういへば憎うない。こな男め。

ともつるれば、九平次は振返り、

こりや又(4)あぢな挨拶ぢやが、そんならわれらに逢ふ心か。

初はてさて愚鈍の男や。

と、手を取りゆけば連れごもは、

九平次爰は引かれまい。今宵も明日もあさつても、揚げづめの大々

(1)料理屋の名。
(2)以下「わる口いうて歸りける」までお初天神記の文句。
(3)本當いへば。
(4)うまい。

(1)艤が坐つて容易に歸らぬ事をたとへていふ。
(2)氣を利かす。粋を利かす。
(3)主人以下下男下女に至るまでその家に居る人々。
(4)仕舞ふ。
(5)見じにかける。
(6)丑の刻即ち午前二時。
(7)白い無地の衣服。
(8)黒小袖を白無垢の上に打ちかける。
(9)徳兵衛。

盡、お船がすわつた。我々は氣を通すぞ。
と聲々に、わる口言うて歸りける。亭主夫婦は喜びて、
さあ九平次樣、一時もはや〳〵二階へお越しあれ。初もおそばへは
ひつて寢や。早う寢ややと言ひければ、
初そんなら日那樣、内儀樣、もうお目にはかゝりますまい。さらばでござんす。内衆もさらば〳〵。
と、徐處ながら、暇乞して閨に入る。これ一生の別とは、後にこそ知れ氣もつかぬ、愚の心不便さよ。
主それ釜の下に念を入れ、肴を鼠に引かするな。
と、見世をあげつかざさしつ、寢るより早く高鼾。いかなる夢も短夜の、八つになるのは程もなし。初は白無垢死出立、戀路の闇の黒小袖、上に打ちかけさし足し、二階の口よりさし覗けば、男は下屋に顔出だし、招き頷き指さして、心に物を言はすれば、梯子の下に下女寢たり。

(1)お初が。
(2)上から二段目。
(3)夜あけまでとぼしておくあかし。
(4)二人が下女に。
(5)這ひまつはるにつけたまでで別に意味はない。玉は美稱。かづらは蔓草で繰るもの故、苦しきに繰るをかけてある。
(6)闇のうつつといふいひ方は古今集戀三に「うば玉の闇のうつつは定かなる夢にいくらもまさらざりけり」とあるによる。うつつなやは本心がないの意。
(7)かけがねともかすがひともいふ。
(8)戸の下方に事をつけた戸。
(9)巻くにかける。槇のまは接頭語、杉や檜の事。
(10)「虎の尾を踏む」諺。
(11)以下「そなたこなたへ走りゆく」までお初天神記の文句。

吊行燈(つりあんどう)の火はあかし、いかゞはせんと案ぜしが、棕櫚箒に扇をつけ、箱梯子の二つ目より、煽ぎ消せども消えかぬる、身も手ものばしはたと消せば、梯子よりどうど落ち、行燈消えて暗がりに、下女はうんと寢返りし、二人は胴を慄はして、尋ねまはる危さよ。亭主奥にて目をさまし、
今のは何ぢや。をなごでも、有明の火も消えた。起きてとぼせ。
と起されて、下女は眠そに目をすり〳〵、丸裸にて起き出で、「火打箱が見えぬ」と、探りあるくをさはらじと、あなた此方へ這ひまつはるる玉かづら、苦しき闇のうつつなや。やう〳〵二人手を取合せ、門口までそつと出で、かき金ははづせしが、車戸の音いぶかしくあけかねしつつとあけ、かち〳〵打てばそろ〳〵あけ、合せ〳〵て身を縮め、袖と袖とを槇の戸や、虎の尾を踏む心地して、二人續いてつつと出で、顔を見合せ、あゝ嬉しと、互に息をほつとつき、

初さるにても九平次めを殺してのきよと思うたに、こちらに心のせくまゝに、生けておいたが悔しさよ。

と、お初は涙に振返れば、

徳あゝなう、それも迷ひなり。かう死ぬる身の約束ぞ。人にも世にも恨みなし。急ぎ給へ。

と手を引いて、彼處を走り出でて行く。斯くとは死らずやう〳〵と、下女は火ともし、

これはさて、門の戸があいてある。皆氣のつかぬ。

と懸金を、締めて寝間へぞ入りにける。

暫くあつて男一人。あわたゞしく走り來り、天満屋の戸を打叩き、油屋九平次様、急用ありて手代茂兵衛が參つた。いひつけで給はれ。

と呼ばはる聲、九平次が寝耳へ入りて打ち驚き、梯子せはしくおりけるを、あとに續いて久右衞門、聞くとも短らず、戸を押しあけ

九むゝ茂兵衛か。何の用にてあわたゞしい。どうぞ〳〵。

(1)どうした〳〵。

(1)返答する時の發語。
(2)各町。町ごと。町内で毎月家々の印を檢査する。
(3)町内の年寄役。
(4)飲みこめぬに同じ。
(5)急用の時引續いて幾回も使を遣す事。
(6)出過ぎる。出しやばる。いらぬ事をする。
(7)無駄にして了うた。ごまかして了うた。

といひければ、

茂(1)されば、今日(2)町(3)並の判形(4)觸れて參りし故、お前のお歸り知れぬと思ひ、懸硯の二重目な印判持つて參りしに、(5)お宿老殿が仰せられしは、「此の印判は、先月の廿五日に落したとて、町々に貼紙せしその印判が、懸硯にあつたとは飲(6)みこまぬ。何分にも九平次に逢うて、容子を聞かんまゝ、急いで呼びに遣せ」と、内へ人橋(7)かゝる故、方々尋ね參りし。

といへば、九平次聲慄はし、

やれ、いき過ぎた出酒張者。おのれにかゝり九平次が、もう一分がすたつたり。その印判を失うたと、いふばつかりで、德兵衞めに預つた二貫目を、どうと〳〵砂にしおほせたに、内にあつたと知られては、銀を取らるゝのみならず、どうも言譯立たぬこと。こりやまあ何としたものの。

と、あたま掻いても濟まぬ事。

九道々思案して見(1)よ。

と、出でんとするを久右衛門、かひなを取りて引戻し、

九平次待たれい、用がある。やらぬ〳〵。

とせり(2)かける。九平次ぎよつとしたりしが、騒がぬふりにて、

これや久右殿、飲みつけぬ茶屋酒過ぎての酔狂か。さもあれ、男の利腕を取るは、どうぞ。

と突きのくれば、久右衛門聲をあげ、

あゝ、言ふまい〳〵。様子は篤と聞きぬいた。蠑(3)を踏んだる返報に此の合口(4)を振舞はん。

と、ずばと抜けば、二人(5)の者、

やれ、狼藉者、人殺し。

と、聲々に呼ばはれば、亭主・女房・男ども、駈寄つて取捲けば、久右衛門聲をしづめ、

卒爾召されな、各々。全く狼藉者ならず。

(1)見よう。
(2)迫つて詰めかける。
(3)徳兵衛。
(4)鍔がなくて、鯉口と縁と合ふやうに拵へた短刀。
(5)九平次と茂兵衛。

と、彼處にごうど押(1)しなほり、

久こりや南人の奴ばら、久右衛門がひまやるまで、一寸(2)でもにじつたら、胴腹をゑぐるぞ。

と、ねめつけられて二人(3)の者、もぢ〳〵として居たりけり。久右衛門亭主に向ひ、

身どもは平野屋久右衛門にて、徳兵衛が親方、誠は叔父と甥との中、商賣方(3)にも精を出し、心ざまもたまなか(4)故、身どもは子とて持ちませず、女房が姪とめあはせ、あと繼がせんと相談きはめ、敷銀(5)として二貫目を、はや親里へ遣はせしに、徳兵衛めはこの内の初と、とやかく契約の義理が立たぬといふ事か、差極(6)りし談合を、打破りて得心せず。そこも身どもが料簡して、若げは誰しもある習ひ、それほど思ふ中ならば、行く〳〵は我が思案にて、夫婦にせんと心底に思ふも甥の不便さゆゑ。女房は、「姪を嫌はれし」と、やけ腹立ち(7)に打當てて、「二貫目の銀取つて來い、戻せ〳〵」とせ(8)つかれて、此の程

(1)正しく坐す。
(2)動く。
(3)甥の徳兵衛は。
(4)細かな事に意を用ひて實直な事。
(5)前に徳兵衛の繼母がそつと握つて歸つたとあつた。
(6)わかぎともいふ。若い時代の無分別。
(7)やら腹立ちともある。矢鱈に腹を立てる事。
(8)八つ當りをする。
(9)督促されて。

在所へ參りしが、二貫目の銀在所から、なるほど取りて歸りしを、
かげから聞けば、女房へは一錢も戻さぬ故、「遣ひ捨てた」の「(1)げじ
いた」のと、(2)ねすらるるのを苦にしてか、今朝町へ出て暮るるまで、
待てども〳〵歸らぬ故、面目なさに家出をもしたかと思ふ不便さに、
一分立てて取らせん爲、女房に隱し、二貫目の銀をばそつと懷中し、
此處へ來りてお初にあひ、話を聞けば九平次めが、今日生玉にて、
德兵衛を散々に打擲したる由、腸が煮え返り、二三度も駈出でしを、
お初が(3)たつて袖に縋り、「(4)とかくに一應德兵衛に逢はせん」といはれ
し故、うつら〳〵と小座敷に、(5)ねぶりおとぎに居たりしに、非道は
天命、只今(7)かれめが駈來り、九平次にぬかした事、のちの證據に各
各も、いつくと聞いてゐて下され。「月並の判形に、懸硯の二重目
の印判持つて參りしに、お宿老殿が、『この判は、先月廿五日に紛失
したといふ判が、內にあるのはいぶかしい』と、人橋かけて呼びに
來る」と、さあおのれ斯うは言はなんだか。

(1)こつそり自分のものにする。着服する。
(2)いやみを云ふ。あてこする。
(3)強ひて。
(4)とにかく。
(5)眠りながら人のお話相手になる事。
(6)非道をすれば天命によつて罰せられる。
(7)茂兵衛。

茂いや〳〵、左樣はいひませぬ。
久なんと實正言はぬか。
と、合口を差しつくれば、
茂あゝなるほど、左樣にいひました。
久それを聞くとここの和郎(一)が、顏色がちがうて『その印判を落したと
いうた許りに、德兵衛めに二貫目といふ銀(2)をまんまと砂にしてのけ
た』と、(3)まつこのやうにぬかさぬか。
と、合口喉に閃かせば、
茂はて、さういうたにしてほし(4)かしか、さう言ふにしてやろ。
と、そろ〳〵立つてのく所を、久右衞門大聲あげ、
やれ盜人め、いきずりめ。よし二貫目の銀子にて、おのれが身代立
たぬなら、なるほど銀はおのれにやる。あのひ(5)がいすな小男を、お
のれが大きなく(6)はびらで、ようもやうも踏みをつたな。殊に所も所
がら、あの生玉のでんどにて、額(7)に毛拔もあてる身が、つら恥かい

て何として、人中へは出られぬ筈。戻らぬこそ道理なれ、自害をしたか、淵川へ身を投げたには極つた。命のかたき金の仇。憎いとも無念とも、おのれがあたまのぎり(1)〳〵から、爪先まで斬り刻んでも、これが腹がいるものか(2)。

と、つかみ付き掻きしやなぐり(3)、ぶてど叩けど世の中の、理に勝つ力あらざれば、とかうも言はず九平次は、うぢ(4)〳〵してこそ居たりけれ。

亭主は見かね、立ちよりて、

なるほどお前の御尤。併しながら徳様のお聲を最前聞きました。お初もこゝへ出ぬからは、まだござる(5)に極つた。御機嫌直しに呼びませ。

と、小座敷・奥の間・あそこ・こゝ、尋ねてもゐず。二階から下女の玉は走りおり、

お二人ともに見えませぬ。お両様の寝どころに、書いたものがござんした。これ見給へ。

(1)目に物見せてやる。ひどい目にあはせてやる。
(2)それともと同じく、或は父の意味であるが、こゝはそれと同時にの意。
(3)天満屋の亭主自身の事。
(4)お初。下の生きた金もお初の事。
(5)諺に「盗人におひを打つ」又略して「盗人におひ銭」とあるをかける。

と差出せば、亭主取りあげ、

南無三寶、二人の者が書置ぢや、最早心中に出たものぞ。やれ男ども女ども、手分けをして追つかけよ。まだそこらには居ぬ事か。懐さがせ棚さがせ。探せ〳〵。

と聲々に、さわぎ惑へば久右衛門、九平次を引つ捕へ、

徳兵衛がかたき、おのれをば代官殿へ連れて行き、只今思ひ知らすべし。それともにまづおの〳〵は、片時も早く駈けつけて、最後をとめて給はれ。

と、頼む身よりも頼まるる、こちは大事の奉公人、殺すといふは正真の、生きた金をば盗人に、甥御恨めしつれなしと、互に泣いつ泣惑ひ、そなたこなたへ走りゆく、哀さつらさ淺ましさ。あとに火打の石の火の、命の末こそ三重短かけれ。

(6)知死期が正しい。人の生年月日によつてその死期を知る事であるが、こゝは死に際の意に用ひてある。

道行血死期の霽(6)

(1)以下松の落葉五辛崎心中の文句を用ひる。(2)徒然草「仇し野の露消ゆる時なく鳥邊野の煙云々」。仇し野は墓地の名。(3)消ゆは霜の緣語で命が一歩ごとに縮まつて行く形容。(4)人生は夢であるのに、二人が今死にに行くのは、恰も夢の中に夢を見てゐるやうなもの。(5)二人は曉の七つ即ち午前四時を期して死んだのである。(6)寂滅は无明煩惱の境を離脱する事で、さういふ境涯に到つて樂境があるといふ事を寂滅爲樂といふ。(7)辛崎心中にこの一句はない。雲は無心で浮遊し、北斗星は冴えて水の面にうつる。(8)辛崎心中には「渡せる橋を鵲の」とある。鵲の橋とは七夕に女夫星があふ時、鵲が翼を亜べて天川に渡すといふ橋。(9)以下「言の葉草や繁るらん」まで辛崎心中には、「道行く人の聲高く、京や大阪の心中の言の葉ぐさのとりどりを」とある。(10)無と情の掛詞。痴話口説の最中。(11)心もくれるといふに吳織(あやはどり)をかけたまで。(12)「あやな」は「あやなし」の語幹。「や」は嘆詞。條理が立たぬ。漢織をかけてある。(13)以下「いらぬものぢやと嘆けども」まで、辛崎心中に「歌ふも舞ふも法の聲」とある。(14)松の落葉五心中江戸三界、「どうせ女房に持ちやさんすまい。いらぬものぢやと思へども、どうした事の緣ぢややら、忘るるひまもないわいな。それを振捨て行かうとは、やりやしませんぞ。手にかけて殺しておいて行かんせな。放ちはやらじと泣きければ云々」。

(1)此の世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、仇(2)しが原の道の霜、一足づつに消(3)えて行く、夢(4)の夢こそ哀なれ。あれ數ふれば曉の、七(5)つの時が六つ鳴りて、殘る一つが今生の、鐘の響の聞納め、寂滅(6)爲樂と響くなり。鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見あぐれば、雲(7)心なき水のおも、北斗は冴えて影うつる。星の妹背の天の川。梅田(8)の橋を鵲の、橋と契りていつまでも、我とそなたは女夫星、必ず添ふと縋り寄り、二人が中に降る涙、河の水嵩(みかさ)も增るべし。向(9)ふの二階は何屋とも、覺束(10)なさけ最中にて、まだ寢ぬ火影聲高く、今年の心中よしあしの、言の葉草や繁るらん。聞くに心も吳織(11)(くれはとり)、あやなや(12)昨日今日までも、よそにいひしが明日よりは、我も噂の數に入り、世に謠はれん。謠はば謠へ、謠(13)ふを聞けば、

どうで女房にや持ちやさんすまい。いらぬものぢやと思へども、げ(14)

(1)いつも、今日こそ心がのび〳〵して樂しかつたと思ふ時か今日までになかつた。(2)「今日が日まで」は辛崎心中に「今日までも」とある。(3)この一句辛崎心中「思ひの色につらかりしに」。(4)この一句辛崎心中「忘るゝひまもないわいの」。(5)以下「行かんせな」まで辛崎心中にない。丹波與作上に「江戸三界へいかんして、いつ戻らんす事ぢややら、殺しておいていかんせの、放ちはやらじと泣きければ」とある。(6)辛崎心中「泣きゐたり」。(7)この一句辛崎心中にない。(8)死んだ昔の人。(9)以下「せめて暫しは長からで」まで辛崎心中に「月のかげさへとゞまらで」とある。(10)いつもは假令短くても、せめて今夜は長くあつてほしいのに、長くなくて。(11)無と夏。心なしの夏の夜。(12)追はへる(追ふの延)の訛。鷄の聲が命を追ひかけて死を促す。(13)辛崎心中に「つらや辛崎の濱で死なんと手を引いて志賀の小波小夜鴉」とある。うしは憂しと牛との掛詞。牛天神といふ事があるから。(14)梅田には墓地があつたからいふ。(15)辛崎心中「厄なれば。(16)手向ける事。(17)この一句辛崎心中「なほ〳〵一つ蓮ぞ」。しは瓢辭一つ蓮は一蓮託生。

に思へども歎けども、身も世も思ふまゝならず。いつを今日とて、(1)今日が日まで心ののびし夜半もなく、思(2)はぬ色に苦しみに、どうした事の緣ぢややら、忘(4)るるひまはないわいな。それに振捨て行かうとは、やりやしませぬぞ、手にかけて殺しておいて行かんせな。放ちはやらじと泣(6)きければ、

唄も多きにあの唄を、時(7)こそあれ今宵しも、謠ふは誰そや聞くは我、過(8)ぎにし人も我々も一つ思ひ。

と縋りつき、聲(9)も惜しまず泣きゐたり。いつ(10)はさもあれ此の夜半は、せめて暫しは長からで、心も夏(11)の夜の習ひ、命追(12)はゆるとりの聲。明けなばうし(13)や天神の、森で死なんと手を引いて、梅田堤の小(14)夜鳥、明日は我が身を餌食ぞや。

初誠に今年はこな樣も、二十五歳の厄の年、わしも十九の厄(15)年とて、思ひあうたる厄祟り、緣の深さのしるしかや。神や佛にかけおきし、現世の願を今こゝで、未來へ回(16)向し後の世も、なほ(17)しも一つ蓮(はちす)ぞや。

と、爪繰る珠数の百八に、涙の玉の數添へて、盡きせぬ哀盡きる道、心も空も影暗く、風しん〳〵たる曾根崎の、森にぞ辿り著きにける。彼處にか此處にかと、拂へば草に散る露の、我より先にまづ消えて、定めなき世は稻妻か、それかあらぬか。

初 あゝここは、今のは何といふものやらん。

德 おゝあれこそは人だまよ。今宵死するは我のみとこそ思ひしに、先立つ人もありしよな。誰にもせよ、死出の山の伴ひぞや。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

の聲のうち、

德 あはれ悲しや。又こそ魂の世を去りしは。南無阿彌陀佛。

と唱ふれば、女は愚に涙ぐみ、

今宵は人の死ぬる夜かや。淺ましさよ。

と涙ぐむ。男、涙をはら〳〵と流し、

二つ連れとぶ人魂を、よその上と思ふかや。まさしう御身と我が

(1)珠數の玉は百八ある。百八煩惱に象つたのである。涙の玉の玉は珠數の玉をかねて居る。

(2)以下辛崎心中に「波打寄する辛崎の、松の木蔭につき給ふ」と結んである。しん〳〵たるは靜まり返つてひつそりした樣。

(3)こはい。恐しい。

(4)夜間、地から空中に飛び行く燐火で、青白く赤みがつて尾を引く。死んだ人の魂だといはれて居る。

(5)他人の身の上。

(1)袋草紙四見人魂歌「たまは見つ主は誰とも知らねども結びとどめつ下がへのつま三返誦之、男女左右のつまを結びて三日を經て解之云々」。

(2)源氏物語桐壺卷「暮ぬ行く奴もがなつてにてもたまのありかをそこと知るべく」。

(3)棕櫚に結びついた松の意。結ぶは系の緣。

(4)二枚綸草紙の道行に「これこそ曾根崎天神の、松と棕櫚との連理の森」とある。

(5)一つの木の枝が他の木の枝と相連なつて、木理が相通ずること。それを男女間の永久に變らぬ睦まじい契りにたとへる。

(6)露と下のおくとは緣。

(7)解く。

(8)棕櫚は幕に用ひるから玉幕とつゞけ、下に掃ふと受けた。玉幕の玉は美稱。

(9)二人が別々の處で死んでも、心中といふ名は捨てまい。

魂よ。

初 なに、なう、二人の魂とや。はや我々は死したる身か。

德 おゝ常ならば、結びとめん繋ぎとめんと歎かまし。今は最期を急ぐ身の、たまのありかを一つに住まん。道を迷ふなたがふな。

と、抱き寄せ肌を寄せ、かつばと伏して泣きゐたる、二人の心不便なる。涙の糸の結び松、棕櫚の一樹の相生を、連理の契になぞらへ、露の憂き身のおきどころ、

さあ此處にきはめん。

と、上著の帶を德兵衛も、初も涙の染小袖、ぬいでかけたる棕櫚の葉の、その玉幕今ぞげに、浮世の塵を掃ふらん。初は袖より剃刀出だし、もしも道にて追手のかゝり、割れ〳〵になるとても、憂き名は棄てじと心がけ、剃刀用意致せしが、望の通り一緒で死ぬる此の嬉しさ。

といひければ、

おゝ神妙賴もしし。さほどに心落着くからは、最期も案ずる事はな

し。さりながら今[1]はの時の苦患にて、「死に姿見苦し」と言はれんも口惜しし。この二本[2]の連理の木に、からだをきつとゆはひつけ、潔う死ぬまいか。世にたぐひなき死にやうの手本とならん。

初　いかにも。

と、淺ましや淺黄染[3]、かゝれ[4]とてやは抱帶、兩方へ引つぱりて、剃刀取つてさら〳〵と、

初　帶は裂けても主樣と、わしが間はよもさけじ。

と、どうど座を組み二重三重、ゆるがぬやうにしつかと締め、

德　よう締まつたか。

おゝ締めました。

と、女は夫の姿を見、男は女の體を見て、

こは情なき身の果ぞや。

と、わつと泣き入るばかりなり。

あゝ歎かじ。

(1)最期。

(2)松と棕櫚。

(3)淺黄染の抱帶。あさましやあさぎ染、かゝれとてやはかゝへ帶と頭韻を合せる。

(4)心中の用にとて締めたのではない抱帶、即ちしごき。

欠

欠

が告ぐるとは曾根崎の森の下風音に聞え、取傳へ、貴賤群集の回向の種、未來成佛疑ひなき、戀の手本となりにけり。

おふさ
徳兵衛

重井筒

心中重井筒

寛永元年三月廿九日に、紺屋徳兵衛と重井筒屋藤十郎の抱お房とが、高津の大佛殿勧進所で情死した事件によつたもの。但し十二月十五日の夜の出来事だともいはれて居る。

この作が始めて上場されたのは寛永元年四月十六日といはれて居るが、又同四年であると説いてゐる人もある。

心中重井筒

上之巻

唄(1)夜さ來いといふ字を金紗(2)で縫はせ、裾に清十郎と寢たところ、裾に清十郎と鼠色(3)、京の吉岡紙子染、やぼてり(5)がきか、うすがき(6)か。

三正月前のきは〳〵(7)に、旦那殿はそとが内。御神酒過してうか〳〵と、山衆(8)といへば目が見えず、内に居やんす内儀様、こちとばかりに打任せ、誂物も節季をも、どう仕舞はんす事ぢややら。(10)下心のわるい旦那殿。

喜やい三太、そりやなんぢや。茶屋(11)へいきやろが、山衆を買やろが、旦那は旦那、こちとは紺屋(12)の手間取。何事もさらりつと淺黄(13)にいうて居よいやい。

(1)當時の流行唄。五十年忌歌念佛下之巻にも見える。(2)金絲。(3)鼠を掛けてある。(4)雍州府志「西洞院四條吉岡氏人始染二黒茶色一故謂二吉岡染一。」紙子とは厚い白紙を繼ぎ合せて柿澁を塗り、數回日に乾した後、一夜露ばしをして、揉み柔らげて衣服にしたもの。それを染める事を紙子染といふ。(5)濃い澁色。(6)薄柿色。薄い澁色。(7)年の末、節季、節句など、支拂時をいふ。(8)お山。お山は遊女の惣名。妓衆ともいふ。(9)われ〳〵。自分たち。(10)心得。(11)色茶屋。卽ち揚屋。(12)手間賃を取る雇人。(13)あつさり。紺屋であるから例の掛詞。

三おゝ、喜兵衛のいやる事なれど、わが身はもとを知るまいが、地體旦那の下染はの、重ね井筒屋といふ南の茶屋の弟で、これへは入婿。乳呑子紋を持ちながら、人のみる茶も構ふにこそ。お内儀は結構者、柳・媒竹にやつてちやが、隠居の親父がわせると、家内はしみこほり山染になるわいの。あのやうにほついては、聽て身代は木賊色でおろすやうになつてのけう。

と笑ひける。

酒濱に、水もつくかや我が宿へ、歸り紺屋の德兵衛、いそがしげに立歸り、

これ庄助・喜兵衛、埒があかぬの〳〵。これにまだかかつてか。いつぢやと思ふ。今日は師走の十五日、中の島のそうぶつ物も、昨日限りの約束。谷町の蒲團もまだ持つて行くまいな。兄貴から跳ねの、重ね井筒の暖簾も、遲いというて腹立ぢや。女房どもはどこへいた。えゝどんげな。一言おれが言はねば、もうそれ程間があく。

(1)お前。(2)本染をする前に、他の色で染める事。こゝは種姓、生立ち。(3)大阪島の内。南の風呂などいふ南も同樣。南水漫遊に「坂町道頓堀邊より指て島の内を向ひ側といひ、ただ南とばかり呼ぶは島之内に限りたり」とある。(4)乳呑子を小紋にいひかげる。小紋は細かい模樣。(5)見る。海松茶。海松茶は海松色(黒みある綠色)のやうな茶色。(6)お人よし。(7)共に染色。柳色は白つぽい萌黄。媒竹色は媒竹のやうな赤黒い色。夫に遜らず忠實に立働くこと。(8)吉文字屋宗德。(9)來る。(10)堅く氷る。鄙山染にかける。(11)金錢を浪費する。(12)木賊で物を研ぎおろすやうに、身代をすりへらすであらう。木賊色は黒味ある萌黄色。(13)了はう。(14)酒びたりに精氣も盡くかや。つくは濱と盡。(15)來ん。(16)仕事が捗取らないなあ。(17)附物にする物。盆と正月の仕着せ。(18)德兵衛の兄。(19)紋所の名。兄の家は重ね井筒といふ屋號の茶屋。(20)鈍氣。(21)間が捗ける。

いひつけも見まはしも、ぬ。

口は一つ目は二つ、これでは水も飲まれ

と、いうたところは見事なり。下人どもはいつもの事、

お内儀樣は、「鉾屋町の姉樣へ、一寸いつてこう程に、お前に問うて、蒲團地も持つていけ」との事。

と言へば、

德そんなら喜兵衛持つていきや。庄助は提灯持つて女房どもを迎ひにいけ。それ坊主めに怪我さすな。負うて歸れ。

といひつくれば、

あい〳〵。

言ふもそこ〳〵ながら、皆々表に出でにける。亭主も辻まで行くかと見えしが、三十許りの女房と、何やらささやきつぶやきて、連立ち內に入りければ、女は亭主と座を組みて、おいへ樣顏して居たりける。年季の三太すつきりと合點せず。じろ〳〵見るを德兵衛、

(1)暮しが立たぬ。(2)男の子。こゝは小市郎。(3)德兵衛。(4)適當な位置に坐つて。5おかみさん顏。女房氣取。(6)年季奉公。(7)さつぱり。とんと。

これ三太、此處へ來い。つつと寄れ。

と、膝元に呼付け、

こいつはずんど(1)利口者で、言ふなといふ事いはぬ奴。それで人が可愛がる。近づきになるしるしに、何ぞやつてたも。(2)

と言へば、彼の女、

さうやらして、目元が利發に見えまする。なんと(3)顔見世見やつたか。札買(4)やる錢やらうか。但し何ぞ餘のものがほしいかいの。

と言ひければ、

三いえ〳〵、わし等芝居が見たけりや、六軒町の兄御樣から、なんぼいかうとまゝぢや。わしや銀がほしい。

と言ふ。

女むゝ、銀持つて何かやる。

三あの銀貰うてからその銀で、よそ〳〵のお山が一つ買うて見たいとやらるゝぢや。

(1)ずつと。至極。
(2)給へ。
(3)顔見世芝居。毎年十一月一日から始まる。
(4)木戸札。
(5)自分の事を。他人のやうに云ふ。

と身をすくむ。

女これはでかいた。やすい事〳〵。して誰ぞ惚れたのがあるのか。

さあいへ〳〵。

と、問ひかけられて恥しがり、

わたしが惚れたのは、いろはの內にある。

といふ。

女やあ、そんならいろは(1)茶屋か。

三いえ〳〵、(2)太左衛門橋筋に。

女なんぢや、太左衛門橋筋にいろはとは。ちりぬるをわか、よたれそつねな。

と吟じ返せば、

三それ〳〵その次の、(3)らむ・うげんだ。

とぞ答へける。

これは(4)上物・上目利。

(1)元祿時代道頓堀の濱側に板圍をなし、內に床几を構へて茶屋を出す。四十八軒あつたからいろは茶屋と呼んだ。
(2)太左衛門橋は道頓堀にかけた橋。戎橋と中橋との間。
(3)共に茶屋女の名。或は「らむ」は「うん」をいひ出す口拍子で、うげんだは、當時のお山形役者山下右源太の事か。
(4)上等の物。上手の鑑定。

(1)豆板銀。江戸時代に鋳造した豆狀の銀貨。
(2)奮發する。
(3)銀をやる人よりも。貰ふ三太郎の方が粋人であらう。
(4)かなりの年齢の人がら。

と、豆板一粒はつ、とはずみ、

徳やい、今此處へ銀持つて來る人がある。此のをなご衆を「お内儀樣か」といはうほどに、必ず「いゝや」と言ふなるぞ。さて此の事を、女どもにも傍輩にも、徳塵も言ふ事ならぬぞ。合點か。

と言ひければ、三太郎うなづき、

勿體なや〳〵、言ふ事ではござりませぬ。もしも重ねて言ひたい心が出來た時々に、お前へそつと斷りませうほどに、又銀を下さりませ。

と、阿呆な顏でも損をせぬ、やる粹よりは粹ならん。

時に表に、

頼みましよ。紺屋の徳兵衛殿はこなたか。

と、年ばいなる仁體なり。

徳やあ、治右衛門樣か、おはひりなされ。

治御免。

(1)子まで生んだ間柄。
(2)深いこみ入つた事は申しませんが。
(3)銀三貫目は金五十兩に當る。當時は概ね銀六十匁を以つて金一兩に替へた。
(4)治右衛門は口入である。口入とは金錢貸借の間に立つて世話する人。
(5)入聲。
(6)證文。

といひて通りける。

徳あれ女房ども、内々の治右衛門樣、そなたの判なら銀貸さうとおつしやる。お目にかかつて置きや。

といへば、いひ合せてや彼の女、

これはまあ〳〵御懇親な。尤も家も商賣も、私の物とは申しながら、子なかなした中なれば、もう今では屋財・家財、皆主の物でござりまする。かうお目にかゝる上からは、わたしが請合、深い事こそ。此の家屋敷相應に、三貫目や五十兩は貸してやつて下さいやせ。

と、つま〳〵合せる辯舌に、口入くうた顏つきにて、

治あゝ〳〵、これには及ばぬ事ながら、徳兵衛殿は入家と聞く、かう致せば後の爲、又も用を聞かう爲。さあ判をなされよ。

と、手形を出せば徳兵衛、懸硯引寄せ、

徳これそなたの判。

女　さらばまづ私。

と、互に印判明白なり。

治　丁銀四百目、包みの通り、吟味なされ。

と受取り渡し、(1)(2)

もう暮れまする、お暇申そ。

徳　ちとお盃致しましよ。

治　重ねて〳〵、預けます、さらば。

といひてぞ帰りける。

徳　さつと済んだ、芽出たし。

と、銀懐に押入れ、

これ三太、このをなご衆を送つて、一寸往つて来る程に、門も締めて火もとぼせ。そのうちお辰が戻つたら、「湯屋へ往つた」とだましておけ。必ずなんにもぬかすな。

と、口をとめたる紺屋糊、(3)(4)(5)

(1)江戸時代の銀貨。海鼠形で、常是や寛の字又は大黒の像等の極印がある。挺銀とも書く。
(2)一方で受取り、一方で渡す。
(3)早速。
(4)徳兵衛の妻。
(5)紺屋で模様や紋を染出す時、白抜きにする所に塗る糊。とめる、糊、猶様のとく（解）は縁語。

女　徳様、早う。

と出でにけり。

所帯持つても、色はなほ捨てぬぞ道理、紺屋の妻、月も冴えゆく夜嵐(1)

に、

妻　あゝ、提灯もよいわいの。

宵寝まどひの小市郎、竹が背中にふら〳〵と、寝風引かすな大事の子、(2)

萬年町に帰りしが、問ひもせぬに三太郎、(3)

旦那様はたつた今湯屋へ。

といへば、

おゝ〳〵、どうで湯か茶か飲みにであろ。法界の男ぢやと思へば済(4)

む。

と、恨みながら、小市郎が目さますを、暖簾の奥の小座敷に、やうやう賺し寝入らせて、我も著る物着換へんと、押入あくれば、こりやなんぢや、懸硯あけ廣げ、夫婦の印判取散らせり。「これは〳〵」とい

(1)流石紺屋の妻だけに、所帯持ちになつても、色はなほ捨てないのが當然。即ち月の夜に提灯などを持ちあるくは不粋な仕方。
(2)宵惑ひ。宵にねぶたがる事。寝風は、ふら〳〵と寝るにかける。
(3)徳兵衛はこの町に住む。今の谷町六丁目空堀邊の舊町名。
(4)世間の廣い男。

はんとせしが、あたりを見まはし、押ししづめ、

こりや三太郎、そちに大事の物やらう。火をとぼして奥へ來い。

と、いふより早く、

三あい〳〵〳〵、さらばし(1)こだめ參らう。

と、小行燈さげて入る有樣、下女・手間取は見送りて、

內儀樣と旦那の中、あちらへさゝへこちらへ言ひ、兩方で物を摑みをる。あいつは鋸(2)商ひ。

と、鋸屑のいひ甲斐なき、そねみも下(3)の役ぞかし。

此の家の隱居吉文字屋の宗德、代々傳はる紺(4)屋の形と、共に禿げたる頭をおろし、額(5)に絕えし古毛抜、くひかねぬ世も算用づく。此の家屋敷・家職をば、妹娘に鉾(6)屋町、姉にかゝりて隱居分、薪の始末燈心を、日暮れて一人によつと來る。內の者ども、

あれお辰樣、鉾屋町の隱居樣のお出。

と言ふ聲に、

(1)どつさり貰はう。しこだめはしこたまともいふ。
(2)鋸は押すと引くとで木を切るから兩方から利を得ること。
(3)つまらぬ。役にも立たぬ。「鋸屑もいへばいふ」の諺を含む。
(4)お辰の父。德兵衞の男。
(5)紺屋で染物の形を染め出すに用ひる厚紙に譯を引いた型紙。
(6)額際にも毛抜を當てて角額にしたのは、當時の若時の風俗。下の「くひかぬ」は毛抜の緣。
(7)お辰。
(8)遣る。
(9)お辰の姉に世話になる。
(10)薪を儉約して、土器から燈心を出せば損だから引くを日暮れてにかける。燈心に戸を締めをかける。

辰おう。

と言うて立出づる。宗德尖り聲にて、

入婿殿はどこへぞ。節季・師走內をあけて、出るとても出すものか。これ二人目の婿ぢやぞや。あの孫の小市郎に、父親三人持たしやんな。

と言ふ顏の不興なれば、優しくも女房は、夫の惡性おしつゝみ、

なんのよそへいきやりましよ。方々のそうぶつ物、內との者の手は足らず、今朝早々から仕事して、風引いて頭痛するとて奥に寢てゐられます。お前は何しにお出。

といへば、

いやこれたゞは來ぬ。たつた今、そなたが歸つたそのあとへ、「堀江の口入治右衞門といふ者ぢや。こなたの娘御・婿殿兩判で、銀四百目貸しました。若い人の事なれば、後日の念に一寸知らせておきます」と、言ひおいて歸られた。聞くとおれは目がまうて、一服の藥

(1)年末。
(2)德兵衞が出ようとしても、お前が出すといふ法があるか。
(3)不機嫌。
(4)放蕩。浮氣。淫奔。
(5)家內中の者。

を飲みさいて來た。四百目といふ銀を、何にするとて借つたぞ。(1)くひ込んだか、(2)へこんだか。女夫の中の榮耀づかひか。えゝおとまし(3)や。身代はえ持つまい。おれらが談義參りして、一文投げる賽錢さへ、進せうか進せまいかと、(4)曇算おいて見て、たとへ算が合うても、五度に三度は投げずに仕舞ふ。そばにゐる(5)同行衆が、ぐわらぐわら投げる時には、錢を一文つまんで、肩へ手をかう振上げ、投げる顏で(6)塩の長次郎、錢は手にとまつた。かう氣轉を利かせねば過ぎにくい身代。四百目は何にした。いきはを聞かう。

(1)商賣に損をして資本を減らす。
(2)損失する。失敗する。
(3)貧窮づかひ。虚榮の出費。
(4)うとましの訛。いやらしい。厭はし。
(5)說教聞きに行く。
(6)賽や煙管などを疊の上に落して、その落ちた所から疊の緣までの綱目を數へて、丁半の數によつて吉凶を定める。
(7)同じ道の修行者たち。主に淨土眞宗でいふ。
(8)元祿時代の手品師塩屋長次郎。
(9)行方。用途。

(10)なじる。咎める。
(11)三太郎。
(12)心があせる。

(13)島の内の重井筒の主人、即ち德兵衛の兄。

ときめらるる。女房、さては(11)丁稚めが話に違ひなしと、思ひあたれば姨ましさ、いつそ言うてのけうか、いや〳〵それもむごい事、どうかかうかとせきくる(12)間に、まづ先立つは夫のかはいさ、

あゝ、親父樣、なんぞと思へば仰山な。わしら女夫が何に借錢しませうぞ。その銀はな、南の(13)兄御の方に、曲輪から出たよい奉公人を抱へて、手附銀がやりたいが、世間共に銀詰り、あのあたりは利も

(1)私どもが金を調達する事は出來ませぬし、印判を押して借主となる位の事は、親戚一門のしるし。
(2)南の兄御はお辰の義兄で他人であるから。
(3)私どもからも、兄御に用や無心を頼んで世話になる事もある。
(4)非常な手違。

高し、殊に兄御は病中なり、わし等が判では貸す人あるとの賴みやう。銀こそはなるまいし、判つく程は一門がひ、殊にわしと他人なれば、なほしも義理はかゝれず、又用・無心もあるものと、それで判を押しました。内との者も聞くぞかし。千里萬里もちがうたか。あんまりな親父樣。

と、陳ずる心の優しさよ。德兵衛は女房の歸らぬ先にと足早く、門口に立ちけるが、内には舅のわめき聲、南無三寶と入りもせず、暫く樣子を伺ひける。舅なほも納得せず。

おゝ女夫が言合せ、親をだまして身代潰せ。寢てゐるも嘘ぢや。どこへうせた。

と詮索す。

辰はて、なんの、留守なら留守といはいでは。あれ暖簾のあちらへ。

と指させば、宗德は暖簾打上げ、孫の事は氣もつかず、老眼の何見て

か、

むゝう、まづ職人には似合はぬあの髪つきが氣に入らぬ。頭痛のする寢やうでない。又喰ひ酔うたか。春は早々まくし出しや。あのやうな婿なら、二十人や三十人は、今の間に取つて見しよ。三日と一人寢させはせぬ。

と、つぶやき〳〵雪駄穿く。内のものども、

もうお歸りなされますか。送りませう。

といひければ、

宗やあ、道ならちと送つて、それいひ立てに夜食くはうといふ事か。

と、かごの戸あくれば徳兵衛、もがりの蔭に隠れしを、それとも知らで歸りしは、危かりける次第なり。

入れちがうて徳兵衛、つゝと通つて、羽織を後ろへひらりと投げ、實事の格は見覚えたり。女房の膝元にむんずと居て、

こりや最前からの次第、かご口に聞いて居た。留守のおれを「寢てゐる」と、親父の手前は、男をかばふやうなれど、職人に似合はぬ髪つきな男を、身が代りに寢させたは、念が入つて忝い。入聟の事なれば、家屋敷・家財にも、器粟程も疵はつけまいが、うぬが命に疵つける。たつた今、間男を引きずり出して見せうぞ。

と、奥に飛込み、何かは知らず、わつと叫ぶ胸倉摑み、宙に引つさげ躍りいで、ごうご引つするゑよく見れば、こはいかに、坊主あたまの小市郎。盆に買うたる踊のかづら、奴あたまを振りながら、

かゝ様こはい。

と泣き居たり。徳兵衛も仕舞つかず、詞なければ、女房は宵より積る憂き涙、一度にわつと叫び伏し、消え入る許りに泣きけるが、

なう徳兵衛殿、むごうござるつらいぞや。不義せうものと見すゑたら、なぜ附き張つてもゐもせいで、元日から元日まで、よういきごころもある事ぞ。こなたの留守の言譯に、ふつつりと事は缺く。隱居樣の聲と聞き、そばにあつたを幸に、此の子に著せて間を渡した

(1)追ひ出せよ。

(2)私を逐る事を口實として、夜食を振舞はせようといふのか。

(3)紺屋の物干。竹の枝を少し殘して切つたものを竝べ、その枝に染物を干す。

(4)歌舞伎の語で、攪き役ともいふ。立役を勤める役者の藝。格は仕方。

(1)月代を深く廣く剃りこみ、兩鬢と後頭とに殘した毛で、髷を短く結ぶ。江戸時代武家の中間や俠客の髪風。

(2)どう取繕うてよいか分らぬ。

(3)ぢつと家に居て見張つても居らずに。

(4)年中。

(5)物の絶えてなくなる事。

(6)間にあはす。その場を取りつくろふ。

も、わしが智慧ではあるまい。氏神様のなされたとありがたう思へども、恨み受ければ是非もなし。女房の口から推參ながら、いはゞこなたは人でなし、房[1]と挨拶[2]切れぬげな。よそほかでもある事か。兄御の内の奉公人、躾意見もすべき身が、客衆とやらのかい[3]になり、身代の妨と、嫂御[4]のねすりごと[5]、聞きづらや聞きにくや、あゝそれも道理、又あと[6]の月の騷動に、一家が寺へのいての時、見舞に行つて見屆けた。餘のお山衆は押しのけて、房一人を大事にかけ、こゝらで心底見せがほに、けば〳〵[7]しい仕方ども、そばに居るは知つた衆、こなたよりわしが顔、阿呆らしう見えたやら、まぶられ[8]て歸りしぞや。それにあんまり踏みつけた、先刻に房を連れて來て、「女ども[9]」の「女房」の、印判までを引探し、納戸[10]・戸棚も見せ曝し、これが嬉しからうか。男と男の恥よりも、隱しても隱したい女同志に恥を見せ、男は寢取られ、寢間・帳臺[11]は見探され、阿呆の數々讀盡され、これでも男のかはいゝは、さても如何なる因果ぞや。今日の

(1)德兵衛の兄の家の抱へ女。
(2)關係を絶つ。緣を切る。
(3)邪魔。妨げ。
(4)德兵衛の兄の妻。
(5)あてこすり。いやみ。
(6)先月の騷動。何があつたか分らぬが、火事でもか。
(7)際立つ。目立つ。
(8)まもられるの轉。見つめられる。
(9)女房。
(10)衣服什器などを入れて置く部屋。
(11)主人の常の居間。

事が隱居に聞え、わしは親に叱られながら、科を負うて居る心、人間らしい氣があらば、三十日の一月を、せめて三日は碌々[1]に、寢物語もあれかし。

と、心一杯理をせめて、情も深く口說き泣く、千々の思ぞ哀なる。德兵衛一念發起[2]して、

はつあ、あゝ過つた〳〵。惡人とも業人[3]とも、盜人とも騙りとも、我ながら重罪人[4]、今までもそなたに恥。止めう〳〵と思ひしが、これほどの瀨戸[5]がなうて、うか〳〵[6]と盡した。我一人思ひ切れば、そなた・子供・隱居のため、兄の身上・わが身の爲、房めが後の爲もよい。そこを知らぬ身でもなし。明日[7]は伊勢の御緣日、今宵[8]の月に蹴殺され、三世[9]の諸佛の御罰を受け、二人[10]の親に冥途から、睨み殺さるる法もあれ。ふつつと思ひ切つたぞ。今日の女も房ではない。人置[11]の娘を一角[12]で賴んだ。證據には、其の銀ここにあり。

と取りいだし、

(1)ろくにの重言。十分に。
(2)善心に立返る事。
(3)業ざらしの人間。
(4)一に十罪人ともある。
(5)塲合。機會。
(6)うか〳〵と阿呆の數々を盡した。
(7)明日は十六日で伊勢大神宮の御緣日。
(8)以下「法もあれ」まで誓ひの詞。
(9)過去・現在・未來。
(10)德兵衛の亡き兩親。
(11)雇人の周旋業者。
(12)角は額銀の略で、扁額の形をして居るからの名。一角は一歩に同じ。

(1)往来。交際。
(2)無にした。
(3)すつかり。全く。
(4)いつその事に。どうせの事に。
(5)勿論。なんとしても
(6)おろし生薑をまぜて燗した酒。

明日すぐに返辯し、向後房(1)とは通路せぬ。今まで心を無下(2)にした。恨みもつらみも赦して呉れよ。

とて、手を合せてぞ泣き居たる。女房につこと打笑ひ、

えゝ、忝い〳〵、「挨拶切つた」、「捨てた」のと、幾たびか聞きたれども、銀まで見せての誓文。(3)さんと心も落着いて、今日から本の女夫。皆悦んでたもや。

とて、嬉し涙を流せしが、

(4)とてもの事に、年寄つて、一夜の心も休めたし。太儀ながら隠居へいて、今の誓文一通り聞かせまして下されかし。これはわたしが御無心。御恩に受けう。

とありければ、

(5)何がさて、譲り受ければ我が爲にも親同然。つい一寸いて來う。

辰 そんならさうして下さんせ。(6)生姜酒して待ちませう。それ生姜おろしや、釜の下(1)を焚けを竹にいひかける。

竹は女中の名。

(2)えだるともつの樽とも柳樽とも人形樽ともいふ。柄が兩角のやうに上に出た朱塗の樽。

(3)こゝは詞の意。

竹は手樽(2)を振つて見る。酒の通ひ路引換へて、夫は北へと出でけるが、辻にてふつと思ひ出し、

南無三寶、義理に詰つた女房の臺詞(3)、尤もと胸にこたへしより、房が大事をはつたりと忘れたり。「入相限りに待て」、「待たう」。此の手筈が違うては、生死(しやうじ)の出來る銀。いや〳〵、親父は明日の事。一寸逢うて。

と立戻る。

あゝさうもなるまいか。たつた今誓文だて。殊に銀も手放したり。まづこちらを仕舞うてのけうか。はあ可愛や。房が「ごうぞ銀の首尾なつて、鶏卵酒(たまござけ)飲むやうにしたい事ぢや」と嘆きしを、「氣遣すな」と勇めしが、氣の弱い女なり、こちらはまゝよ。

と又立歸り、

思へば〳〵女ども、「生姜酒して待ちます」と、手づから生姜おろし

(1)つくばるともいふ。うづくまること。
(2)斯うせうに生姜とかける。
(3)卵の縁。
(4)黄身にかける。
(5)涙の玉と卵。
(6)霜の白いと卵の白身。
(7)月が西に渡ると橋の渡りぞめ。
(8)道頓堀にかけた橋。今の相合橋。
(9)娼家の二階窓の竹格子。格子に孔子をかける。
(10)孔子。
(11)論語里仁篇「子曰徳不孤必有隣」
(12)心一つに含む苦といふ意味に、孕句即ち連歌や俳諧などの宿構の句といふ事をかけてある。脇は外の者の意で、脇に脇句の意を含めて孕句の縁から續けた。
(13)二人ともに房の傍輩のお山。
(14)火渡し、火文字草ともいふ。數人環坐し、紙撚又は線香に火を點じたるを持ち、順次に文字ぐさりの歌を詠み、或は尻取り又は同音の頭にある物の名などをいうて廻し、言ひつまつて、火が指に迫つて苦しむのを負けとする遊戯。

たる志も不便なり。

と、辻を越えては又立戻り、辻に立つたり(1)つくばうたり、行くも歸るも定まらず。どうせうか斯う生姜酒(2)、熬りつくやうに氣がなつて、胸掻きまはす鶏卵酒、とは涙(5)の玉子酒、心二つに打(3)ちわつて、君が方へと走りゆく、あ霜(6)の白みに三重

火慰斗。

中之巻

月は早、渡り(7)ぞめして中橋(8)や、六軒町の小夜格子(9)、唐土(10)の聖の曰(のたまは)く、「色の徳(11)には隣あり」、向ひ雨側輝かす、軒の燈火目印に、昨日も今日も明日の夜も、重ね井筒の釣瓶縄、手繰り來いとのよすがかや。中に不便や、房は憂き身の品々を、心一つ(12)にはらみくの、脇が勇めば力なく、片目で笑ひ片目には、涙を包む火鉢のもと、人待つ宵の火なぶりや。小夜も小六も浮き〳〵と、引裂紙の捻(ひね)り元結(もとゆひ)で火廻(14)しを、

(1)上州日野から産する。
(2)緋色の無地の衣服。
(3)引舟女郎即ち太夫に附添ふ遊女。
(4)丸火鉢。
(5)花山院都巽「鳥をさいた見さいなさい鳥さいた見さいな。ひとひの日は又ひとつひよ鳥ひえの山のひのきの枝に人は知らじとひる寝する鳥をさいてくりよと思うて〳〵云々」
(6)竿の先にとりもちを塗つて、鳥を刺し捕へる人。
(7)丙午の女は男を殺すといふ俗説がある。

日野絹(1)。
房様なんと。
房わしは獨寝。
あゝいま〳〵し。
緋無垢(2)。
冷酒。
引舟(3)。
火桶(4)。
雲雀。
鶫(ひよどり)。
比叡(5)の山の檜の枝に。
そりや鳥(6)さしが。
房鳥でないぞや、身は丙午(7)。
又房様のいま〳〵し。男殺そといふ事か。こちは祝うて姫小松。

(1)日本歳時記「今夜(除夜の事)鰯の頭柊を軒にさす事、かぐ鼻といふ鬼の人をくはんとするを防ぐ術なる由埃嚢抄に見え云々」。
(2)鰯。ひしこいわしともいふ。
(3)葱の女房詞。
(4)生意氣。開いた風。
(5)二瀬女の略。勝手向と夜の伽と二頭に渡るからの名。

緋縮緬解く人目の隙に、鬼も來るなと柊や、
雛子。
(2)ひしこ。
(3)ひともじ。
えゝしやら臭い。
(5)ふたせ・仲居も小さし出で、炊婦は來て、
火吹竹。
料理人まで、
冷し物。
鴛籠の彦兵衛、
膝頭。
柄杓。
緋緞子。
蟆。

(1)播津東成郡平野の産。房中の具。
(2)房中の具。好色伊勢物語「好色男ありけり。下女しげる者の許に、菱紬といふものをやるとて、思あらば六さい宿に寝もしなんひしつむぎをば袖にしつゝも」。
(3)淫藥の名。
(4)肥後の名産。蓮芋のずゐきを乾したもの。房具。
(5)前に引裂紙の捻り元結とあるからこゝはその事。

(6)火葬場。
(7)遺骨拾ひ。
(8)冗談。ふざけ。

平野蒟蒻。
(2)菱紬。
(1)平野屋ずゐきやう。
肥後ずゐき。
さあ〳〵(5)紙燭が皆になる。なんと房様、さあどうぢや。どうぢや〳〵。
と詰めかけられ、
あゝ姦しい、息が出ぬ。物がいはれぬ、許してたも。
息が出ずば(6)火屋へやれ。
そんなら火箸で焼いてのけ。
南無三寶、火が消えた。さあ房様の灰(7)寄せぢや。
と、ごつと笑ひしてんがうも、明日の哀となりにけり。
火廻し半ばへ飛脚屋が、(8)
何も御用はござりませぬか。やあ房様、「京へ上す銀もあり、御状も

ある」との御事。遣はされませぬか。

と問ひければ、

あゝよう寄つて下んした。まだ文を書きませぬ。まちつとしてから来て下され。

飛それなら明日の便りになされませ。今宵は仕舞でござる。

と云ふ。

房尤もなれども、今夜のぼして明日の間に合はせねば、きつう叶はぬ大事の用。無心ながらまそつとして、ま一度寄つて下さんせ。頼みまする。

と詫ぶれども、返事もせずに出でにける。房は心も心ならず、日の暮までの約束が、初夜過ぎ四つのかねてより、思うた壺へ當りしと、門に出て北を見つ、濱まで歩み西東、足も冷えて鐵釘を、胸に打たるる幾瀬の思ひ、

房やあ、北から人が走つてくる、そりや徳様よ。

(1)まちつと。
(2)徳兵衛が日没までにお房に届けるとの約束。
(3)戌の刻即ち午後八時。
(4)亥の刻即ち午後十時。かねてに鐘。
(5)狙ふ所。見込む所。
(6)徳兵衛の居る萬年町は房の居る六軒町からは北に當る。
(7)道頓堀の河岸。
(8)多くの。

(1)非常に。甚だ。
(2)落着しない。
(3)今の詫。
(4)來たところで。
(5)ぼんやり茫然。
(6)計畫。
(7)一生涯京の親元へ置かれて、徳兵衛とは夫婦になれぬ。
(8)委しく徳兵衛が知つての上であるから。
(9)ぬかり。手落ち。
(10)おかみさん。こゝはお辰。
(11)さしがね。干渉。邪魔。

と走り寄る。見れば以前の飛脚なり。

お房様か、どれ〳〵御狀は。舟が出ます。

房おゝ道理々々。此の銀は京のわしが親里へ、明日の日なかに渡さねば、いかう詰らぬ銀なれども、今に先から來ぬわいの。定めしいんまに來う程に、まそつとしてから來て下され。

飛いや、最早來られませぬ。來てから、今夜は出されませぬ。

と、言ひすててこそ歸りけれ。

房は一人とほんとして、

今夜の首尾をちがへては、一代京へ繋がれて、連添ふ事も限りとは、根掘り知つての上なれば、如才のあらう筈もなし。皆おか様のさしこみと、思ふも地體こちの無理。身一つ胸を据ゑたれば、いつそ悲しい事もなし。

と、内へ歸ればあるじの内儀、

房は今まで門にか。此の寒いに物ずきな。惣じて此のぢう浮かゝ〳〵

しやる。ちつと心を締めやや。

とありければ、

房さ(1)れば、あんまり餘處が賑かさに、格子(2)祝に出ました。

と、言捨て二階へあがる體。氣がかりなれば目を放さず。折々心をつけたるが、房はそれとも白(3)紙の、障子の月を明りにて、剃刀出だし合せ砥に、か(5)らましかば斯くとだに、ま一度顔見て死にたいと、思へば引かるゝ後ろ髪、手もわな〳〵とぞ顫ひける。主人見つけて後ろより、

房、それは何しやる。

はつと驚き振返り、

房はあ、内儀様の。何ぢややら、喫驚としました。あんまりよい月影に、額たれう(6)と思うて。

と紛らかせば、打笑ひ、

内おゝよい所へ來て仕合せや。幸ひ旦那殿「髭剃つて呉れ」とあ

(1)返事する時に發する語。
(2)南水漫遊「倡家の女郎に格子祝といふ事をなすは、馴染の客も知る知らぬ客の呼出しもなくて淋しき夜は近邊などちよと歩行ば、必その夜に客來るとて、往古の女郎は、かゝる事をなしたりと見えて云々」。
(3)知らず。
(4)刀や剃刀などを磨きあげる時に用ひる砥石。
(5)斯と掛。下に「いはざりしものを」と補つて見る。
(6)たるは剃るの忌詞。小さい剃刀を額たれといふ。

(1)肩が凝つた。

(2)お客商賣屋。

(3)興味。面白味。愛想。

(4)情なく邪魔する。

(5)思ふやうに捗の行かぬものである よ。

る。ちとその剃刀貸してたも。

と、引つたくり押し包み、暫しは顔を打ちまもり居たりしが、

あゝ一昨日の媒掃に、たんと肩がつかへた。そろ〳〵揉んでたもらぬか。

房あい。

と後ろにまはりしも、さては氣色を見取られしと、悲しさこはさいや増して、更に別ちもなかりけり。流石それやの女房とて、世間話に氣をゆるませ、

内これなう房、いつぞ〳〵と思ひしが、序にそなたに意見がある。我も始は勤めの身。素人のいふ事と一つに聞けば曲がない。心靜めて聞いてたも。曲輪や此處の奉公は、樂みなうては勤まらず。無下なうせくではなけれども、それにさへ猶は懸引あり。必ず妻子ある人と、末の約束せぬ事ぞ。男の間男同然にて、思ひばかいかぬものぞとよ。德兵衛様とも今は挨拶切つたとある。おゝ〳〵仕合せ〳〵、

目出たい事。お辰様を離別させ、添うてそなたの本望ならず。(1)いとしい人の身のひし、一門中の憎しみ受け、そなたを鬼よ蛇(じゃ)よといふ。又園はれて世を忍び、後家同然に暮しても、これが何の手柄ぞや。若木の花は一盛り、老木の枯葉色失せて、變るは男の心ぞや。餘(よ)のお山乘と違うて、十の年から子飼にて、「豆腐取つて來い」、「八百屋へ走れ」、「駕籠呼んでおじや」、掃き掃除、戸棚の鍵まで預けしは、小さいからの馴染だけ、我が子のやうに思はれて、よい客もがな出世させ、下女の一人も連れさせたう思ふはこちと許りかは、皆親方は同じこと。譯((2))もない事しいだして、むごい目見せてたもんなや。爲のよい事あるならば、今でも「暇を呉れ」といや。慾を離れたこれ證據、損ざいうて僅の事、不便な目を見ようかと、案じ過しがせらるゝぞや。思ひも寄らぬ憂ひをかけ、必ず泣かせてたもんなと、涙も聲もしめ〳〵と、殘る方なき恩の程、房は顏もあげもせず、

(1)いとしい徳様の難儀。ひしは災難、禍、不利益。

(2)つまらぬ事。途方もない事。

あい〳〵。

としやくり泣き、(1)延紙(のべ)の幾重を絞りけり。

客かあらぬか表にて、

ようござりました。

と云ふ聲す。

誰様(たれさま)ぢや。

(2)とすまして聞けば、

いかう冷えるが、兄貴の氣色變る事もないか。

と云ふ。

内はあゝ、人(ひと)ごと云はば莚敷け。徳兵衛様さうな。

と、聞くより胸もさわ(4)〳〵と、飛びもおりたき心なり。時に丁稚が門口より、

向ひの肥後屋から、房様ちや(5)つと送らつしやれ。お客は堺の。早う〳〵。

(1)のべがみ。竪七寸、横九寸程の、七九寸とも異名のある小形の杉原紙。鼻紙などに用ひる。

(2)耳を。

(3)「人事いはば目代(めしろ)置け」といふ諺の轉訛。

(4)落著かぬさま。房の心。

(5)早速。

と呼ばはれば、料理人不審を立て、

(1)問ひもせぬお客の斷り、合點が行かぬ。房樣はおひまが入る。ならぬ。

といふを、房聞いて、

あれはなせに。

と問ひければ、

内おゝされば(2)いの。あの宿で德兵衛樣にあやつたゆゑ、それで「やるな」といひつけた。

房ゑゝ、内儀樣の、譯もない。それはあつて(1)過ぎた事。今は挨拶切れた上、德樣は此處になり、なんの氣遣。堺の客は正月(4)を賴まねばならぬ人。ひらにやつて下さんせ。(5)

と云ふも誠と思はねごも、

内おゝそれもさう。これなう、房を送ろぞや。

と呼ばはれば、下にて料理人、

(1)驅籠屋はお前が肥後屋に歸る途中だから、そこへも一寸寄つて、驅籠を賴んで呉れ。島の内の遊女は一寸隣へ行くにも必ず驅籠に乘つたと。

(2)「心得た」の洒落。

(3)節季の商賣だからしつかり授かるな。

(4)酒の女房詞。

(5)是非。どうぞ。

(1)されば(前出)に同じ。さればいなともいふ。「あの宿」は肥後屋。

(2)挨拶の昔の事。

(3)正月は紋日の多い時で、客も物入りが多かつたが、遊女も自然全盛を競ふ爲に物入りが多いから、その費用を強めず客に賴んでおくのである。

そんなら道ぢや。(1)驅籠へも一寸寄つて呉れ。

丁(2)心得太郎兵衛の婆々樣。

と、わめいて使は歸りける。

内さあ身仕舞して、早う行きや。

房いや、夜もいかう更けまする。つい此のまゝ。

と、連立ち二階をおりる間に、驅籠を庭にぞ舁寄せける。

房德兵衛樣、遊んでお歸りなされませ。

といへば、こぼけた顏付にて、

誰ぢや、房か。(3)際の商ひ、跡をつめや。

と餘處〳〵しう、口にはいひて魂は、一つ驅籠なる番鳥(つがひどり)、飛立つ許りに見えにける。色を悟りて女房、

これは夜更けて御大儀な。まづお上りなされませ。いかう冷える、さゝ一つ。(4)それ燗つきやや。

とありければ、

徳あゝ揩きや〳〵、もう歸る。此の頃酒があたつて、今も今女ごも、「生姜酒をたべさせう」と、手づから生姜おろすやら。それがいやさにやう〳〵と、これへ逃げて參つたに、又酒を飲めとや。やれ逃げん。

と、出るところを女房飛びおり、立塞り、

なんの無理に進ませう。茶でも一つ參りませ。

徳いや〳〵、此の頃は茶があたります。今も今、さる方で生姜茶を呉れたを、やう〳〵と逃げのびた。是非返して。

といふ所へ、兄の主人寮間より出で、

やゝ徳兵衛、ようぞ〳〵。夜が寢られぬに、夜と共に話さう。さあ此處へ。

と呼びかくれば、病人といひ兄の命、異議もいはれず不返事に、もちもちしてぞ上りける。

兄なんと、中橋架けたの。棚干渡すばつかり。春は町中渡りぞめ。

(1)徳兵衛の出鱈目ごと。

(2)夜通し。終夜。

(3)氣乘りしない返事。

(4)一七〇頁に「渡りぞめして中橋や」とあつた。この橋は貞享年中の架橋であるから、此の頃は改築になつて渡りぞめがあつたのであらう。

氣色も大第に快し。寒あいたら本服せう。(1)これといふが、此の夏の(2)西國の御利生。や、三十三所の風景、一々語つて聞かせん。さあ碌にゆるりと居や。

と、果しも知れぬ長話。徳兵衛心(4)もだ〳〵と、かはいや房を今まで待たせ、又宿屋(3)でもあこがれん。早う立ちたさ氣はせいて、

いや申し、今宵は我等伊勢講(6)、講中待つて居らるべし。罷り歸る。

と立たんとす。

兄まづ待ちや。今まで誰が待つものぞ。まそつと話しや。

とこどめられ、

徳いや舘屋町の隱居へ齋(7)に參る約束。是非お返し。

といひけれども。

兄はて、齋は明日の事。平に。

といふに詮方なく、

徳女ごもが懷姙、何時に產致さうも知れず。お戻しなされ下され。

(1)こんなに快復したのも。

(2)(2)西國三十三所觀音廻。

(3)胡坐をかいて、ゆつくり居れ。

(4)悶え惱むさま。

(5)肥後屋でも、房が自分を待つて居つて、心落着かずに居るであらう。

(6)太太講に同じ。

(7)僧家の食事。こゝは僧侶の食事の相伴。

(1)町々の四辻に置いた番屋で、町内の家主が交代で詰めて、非常を警戒する。

(2)例の出鱈目。

といへども兄は聞入れず。

徳のがれぬかたの自身番(1)、見舞ひたう存ずれども、これではお返しなされまい。あいたたあいた。あいたしこ〳〵。冷える加減か俄に痼氣が起つた。歸つて養生致したい。

兄はて、譯もない。夜氣に當つてなほ痛まう。藥でもやらうか。

いやもう藥も通らぬ。駕籠に乘つて歸りたし。あいた〳〵。

と呻(うめ)けども、内儀推(すゐ)してそとへとては出すにこそ。小座敷の炬燵に、火をたんと入れさせて、

内泊つてござれ。

と強ひければ、

徳いや〳〵、今年の炬燵は、いかう人に當ります。今も今、女どもが生姜(2)炬燵をしかけて、やう〳〵詫びごと致した。

と、心は先へ抜け殻の、何をいふやら譯もなし。

内此處になりとも寢せませ。

(1)正氣がついた。痼氣が直つた。

(2)上に重きとあるに對せしめる。輕口は地口や口合の類で、いひかけや縁語、同音異義の語などを用ひて、語調輕く滑稽めいて面白くいひなすこと。

(3)無し。

(4)紛らかし。

(5)内には兄夫婦、外では房が、一方では引きとめ一方では待つ、恰も駒を諸手綱で引合ふが如くである。

(6)本心がない。

(7)夜の蒲團。

(8)「らつち(滿次)がない」に同じ。順序がない。次第がない。亂雜である。

(9)古今戀四「大ぬさの引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」の歌から出たので、大勢の手に觸れたの意。

と、蒲團打著せ表には、内儀手づから錠おろし、内との者も目くばせし、そろ〳〵わきへのく樣子。

徳むゝう、氣(き)がついた。

と反(そ)らさぬ顔、

いや〳〵寒いにいのうより、暖かにして泊つたが、まづ此方の徳兵衛。

と、重き心を輕口(2)に、蒲團かぶつて行くふりも、涙(3)くろめし 三重(4)まぎらなり。

内と外とに引合(ひきあひ)の、心の駒の諸手綱、房が思の通ふかや。夢とはなしに現(6)なや。顔を並べて見るやうで、いだきつけば小夜蒲團(7)、涙に濡れてひや〳〵と、髪(かもじ)ほどけて身にさはる。其の夜の心地しみ〴〵と、身に引纏ひ寢て見ても、一人ころりは、ゑゝ、らつち(5)がない。心の内はむしやくしや枕、いつそ明けてものけよかし。

徳あゝ大幣(9)の此の蒲團、小六も寢つろ、小夜も寢つらん、房も寢よ

う、引く手あまたに、どこの誰めと寝くさつた。ぶちたい踏みたい叩きたい。ゑゝ〳〵(1)〳〵、踏むな蒲團に科もない。今は踏んでも叩いても、房に逢はれぬ、逢はせぬか。

と、炬燵にとんと腰も抜け、譯も涙に我が身ながら、男のやうにもなかりけり。

戀の寝端(ねばな)の屋根つゞき、いつか思ひは山口屋の(4)、物干づたひ忍び來る。

徐處の戀かと羨しく、見れば雨戸の戸袋を、そつと踏まへる足元も、

顫ひ〳〵目もくれて、(7)

房やあ、此處にかいの。

徳房か、これはどうぞ。

とばかりにて、炬燵を中に手を取りて、たゞ泣くより外の事ぞなき。

涙の中にも男の顔、じろ〳〵と見て、

房あゝいとしぼや。(6)氣を揉まんす故にやら、顔にたんと痩が來た。其の苦は誰がさするぞいの。皆わし故と、それは〳〵忘るる事もあるに

(1)寝やがるなどと同樣、寝るを罵つていふ。
(2)「君が來ぬとて枕を投げそ、投げる枕に答もなや」、「りんき心に枕な投げそ、枕げそ枕に答はよもあらじ。」
(3)無。
(4)やまぬ。
(5)慄ひと顫。顫といふから目。目もくれては、目も暗くなつて見えなくなる。
(6)いとほしの轉訛。

(1)請人。保證人。
(2)辨償する。
(3)債權者が私を。
(4)二重廻も二重判も同意。お房を重井筒に賣つて置きながら、それを抵當に他から金を借りたこと。
(5)屠後屋。
(6)本當の夫でなくても、夫と賴んだ馴染の男をかくいふ。

こそ。さりながら、もう苦にして下んすな。斯ういへばどうやらすねて云ふに似たれども、微塵もさうした心もなし。わしが京の父樣。よしない者の(1)請に立ち、「明日ぎりに銀立てねば、わしをやる」との判ぢやげな。わしは此處へ身を賣つて、先から連れに來た時は、二重賣、二重判、牢舍は鏡にかけた事。ならぬ事をくど〳〵と、思ふは愚痴の至りなり。先立ち死なんと劍刀を、手に取りは取りたれども、内儀樣に見つけられ、え死にもせず居る間に、こなさんの聲はする、向ひがはより呼びに來る。嬉しや、先で何事も談合せんと、今まで待ちばうけになつたれども、一目あへばこれ本望、末賴みない契なれば、これ限り〳〵と、逢ふ度ごとの觀念、今更溜めていふ事なし。貞女を立つるお辰樣のさげしみも恥しい。仲ようして下さんせ。互に生れかはつたら、本妻定めぬその先に、早う女夫になりませう。いひおく事はこればかり。さあ〳〵戻つて下さんせ。

と、夫に(6)ひしとしがみつき、絶え入るばかりに泣き居たり。

(1)その詞を聞かなくても、私にはお前の心がよく〳〵分つてゐる。

(2)女房お辰。

(3)いかなる。張良樊噲共に漢の高祖の謀臣。

(4)諺「道理に向ふ太刀先なし」

(5)覺悟がきまる。

(6)必定、本當。

徳おゝ、聞[1]かねど萬事至極した。さりながら、その詞、嬉しいやうで恨みあり。本妻あるは知れた事、同じ口で、「諸共に死んで呉れ」と云うてたも。京の便りを大事に思ひ、騙り同然の才覺にて、銀四百目借り出だし、一時ばかりは懐にあつたれども、とかく二人に死脈が打つ。どこも彼處も一時に、汐のさいて來る如く、ばら〳〵と首尾わるく、もとより理を持つ女[2]ども、理窟を詰めて恨み泣き、いかな張良・樊噲でも、道理[4]にむかふ矢先はない。銀も渡す。其の塲にて、見す〳〵嘘の空誓文。とてものがれぬ此の罰。佛神を待たずとも、こちから當つて埒あけんと、道から胴[5]はすわつたり。死直は二度ならぬ。かこち顔は曲もなし。手に手を取つてにつこりと、「死ね」、「死なう」と云うてたも。

と、炬燵に顔を打投げて、世にあぢきなき涙の體。

房なう、さう思うてが定[6]かいの。

徳思ふが不思議か、女夫ぢやもの。

(1)ごほん〳〵と咳をしながら。

房ほんにさうぢや、忝い。

徳嬉しうござる。

といだき合ひ、聲を立てずの絞り泣き、炭火も消えて凍るらん。

奥へ斯くとや聞えけん、兄の聲にて、

なんと徳兵衛、痛みは好いか。

と、こつ[1]〳〵せいて來る音す。

やれ隱れよ。

とうろたへて、房を炬燵に押入れ、蒲團かぶせて徳兵衛は、上にもたれ覆ひになり、顔もきよろ〳〵なりにけり。程なく主人立出で、

物言ふ聲の聞えたは、誰であつた。

と不審顔、

徳いや、それは私寢言がな申したか。但しお前が病耄けて、空耳でがなござりましよ。歸つておやすみなされ。

といへば、

兄いや、いかう夜が寝にくい。話しさいた西國の物語して聞かせう。

と、炬燵にあたるうたてさよ。

兄やあ、炬燵の火が薄い。これ女房ども、火をくわつとおこいて、火斗(ひばち)に二三杯持つておじや。

と呼ばはれば、徳兵衛ぎよつとして、

申し〳〵、火のきついはお毒。御無用に遊ばせ。

兄いや〳〵、裾が冷える。膝節の焦げる程ながら、こちはよい。

と云ひければ、

徳平に、それは火の用心と申し、膝の皿に火がついたらば、御身體の妨げ。

と、いへども兄は懲らしめと思ひ、意地わろう、

火を早う持つておじや。

とぞせがみける。

(1)服はしさ。うるさき。

(2)十能。

(1)北濱の事。淀鯉出世瀧徳にも「北濱邊のよい衆は、火燵に水を入れまする」とある。
(2)上流の人々、即ち金持。
(3)氣が利かぬ。
(4)お氣の毒な。
(5)一庫炭ともいふ。攝津の池田から出る。
(6)無い。

徳あゝ申し、お前は病氣で引籠つて、世間を御存じござらぬ。この冬から、いづ方も火の強い炬燵すたりもの。北脇邊(1)のよい衆(2)は、大方炬燵に水を入れるげにござる。重ね井筒ともいはるる身が、氣(3)の通らぬ、「炬燵に火を入れ」なんどとは、さりとてはお笑止(4)な。あれお か様、火はいらぬとおつしやるる。

と身をもがく。其の間に火斗(ひばち)は、焦るる紅葉ばを盛つたる如き池田炭(5)、遠慮も内儀(6)が炬燵に移し、

さあたらんせ。

と言捨てて、臺所にぞ出でらるる。そばで見るさへ徳兵衛、身も焦げ渡る心地にて、

兄者人、其の火で熱うはござらぬか。いつその事に火あぶりになら しやれぬか。こゝまで火氣が來まする。ちといけて消しませう。

と、寄らんとすれば、

そのまゝ措きや。